コ1209.
328-111

勝弁函村著

天地人

丁未立版社藏版

明治
43.12.1
内務

凡そ一國の風尚は其國の盛衰强弱をトすべく、又た國民道德の傾向を測るべき準繩である。海外諸國の政治の組織とか、經濟の狀態とか、學術の趨勢とか、又た都府の設備とか云ふ事は、我輩の如く未だ曾て一歩も國外に出でたることの無いものでも、坐ながら多少之に通ずることが出來るやうてあるが、風俗の細かいことになると、實地に目擊したので無ければ分らぬことがある。されば我輩の常に歸朝者に就いて聞かんと欲することは、諸國の風俗で、其の著明なる事實は扨て置いて、男女の習慣とか、街頭の日常事とかの、極めて瑣細なるやうて、而も眞に能く其の國情民俗を測定することの出來る大切なる雜談であるのだ。特殊の視察とか研究とかを目的したので無くて、漫遊客が不用意の間に觀取して、深く其腦裡に印象して歸つた事實が、却つて人國の狀態を知るに預りて稗益するところ大に

して、又た最も興味のあるものである。北條時賴の著なりと言傳へられてゐる人國記なども、諸國行脚の途次、人情風俗の微細な點を擧げて、而して能く諸國の狀況を現はしてゐるが、外國の漫遊客が、日本見聞記などを書くのでも、國家社會の組織などよりは、都會や地方の通りすがりの觀察で、つまらないやうな事を書き并べたのが、其記する處には大いに見當違いな事もあるかなれど、其中には又た大いに眞相を含んでゐることがあるもので、其等が我國を海外に紹介するに甚だ重大な事となつてゐる。日露戰役の事蹟でも、戰史などよりは、陣伍の間に現はれたる兵士の直率なる言動の談片となれるが、海外に傳はりて、以て眞に日本兵の勇敢なること、國民の忠君愛國の至誠に富むことを知らしめたのである。鄭の賢相子產が楚の國に入るや、先づ其俗を見て、而して其政を知り、治亂興廢の跡

を察したとは此の謂てある。

櫻井君は我輩の爲、數年の間開國五十年史編纂の勞を頒ち、且つ昨年其の英文を倫敦にて出版すべき用務を帶びて、彼地に赴きて、其の往返の途次に、歐洲諸國を歷遊したのである。君は素より文學の才、加ふるに開國五十年史編纂の間に、國情民習などは、如何に觀察すべきものなるか、又た如何に批評すべきものなるかの智識に就いて、大いに啓發するところがあつたのである。而して其眼識と其健筆とを携へて外遊せば、獲る處必ずや尠からざるべしと豫期してゐたが、果して歸來其の語る處を聞き、其の記する處を讀むに、民俗の微點をも看過せず、畫龍點睛の筆法で、其の經たる所諸國の狀態を活寫するの妙あり、歷々として國々社會の眞相を窺ふことを得て、大いに我輩の意を得たのである。

我輩の撰したる英文開國五十年史が、恰も英國に於て出版せらるると其時を同じうして、又た之が副産物とも稱すべき櫻井君の『歐洲見物』が、脱稿上梓せらるゝに至つたことは、我輩自からに取つて大いに喜びとする處であるのみならず、且は我が文壇の爲、かゝる稀有の海外見聞記を得たることを祝するのである。

大隈重信

櫻井鷗村君は昨年歐洲を遊歴し、英國に數ヶ月滞在して、歸朝の後其の見聞する所を書いてゐられて、折々其の二三篇を新聞紙上で讀んだが、今回いよ〳〵『歐洲見物』が脱稿したので、予に序文を書けよとの事である。

凡そ邦人の海外に遊ぶもの年々歲々其の多きを加へて、一年に積つたら何百人と云ふ數であらう。或は官命を以て視察に赴くものもあれば、或は學術の研究を主とするものもあり、或は萬國學會に列するものもあり、又た或は單に漫遊を目的とするものもある。而して又た視察の報告書、研究の結果、又たは漫遊記を編述するものも少くは無い。官命視察者の報告書は、官府に納まりて、其の道々の參考となり、學術研究の結果は講堂論壇よりして、新智識の鼓吹となつてゐる。併し以上のものゝ如きは、特殊のシステムを有する洋

行者の土産で、又た特殊の人や事功を稗益することに限られてゐるのである。然るに犀利なる眼光と縱横の才筆とを有するものが、特殊のシステムを立てずして海外に遊歷し、目に觸れ耳に達したる地理、歷史、人情、風俗を捉へて文章に托したる漫遊記の類に至りては、これ一般の社會に最も益ある洋行土産であつて、櫻井君の『歐洲見物』は實に其類の秀拔なるものである。遊歷したる諸國の民情風俗に就いて、多くの外遊者の看過する微細な事實で、而も能く其民情風俗を示すことを得るものをも、遺憾無く我が藥籠中に捉へて、縱横圓轉たる文字に現はし、而も其中には一道の精神が脈絡貫通してゐるのである。

これまで海外漫遊記の類も尠からず出版されたことであるが、概するに外國の景色とか建物とかの大まかな事ばかりを學ばして、普通

案内書の纂譯に過ぎ無いやうなるものが多いのである。所謂生きて
ゐ無いものなのである。然るに『歐洲見物』は等と其撰を異にし、
眞に見聞記の骨髓を得て、生命の通つてゐるものあれば、予は之れ
を以て一般社會に推薦すべく、又た學窓の餘暇、家庭の團欒に於て
繙くべき好書なりと信ずるのであり、且つ近時カルチュアの書に乏
しき缺點を補ふべき良著なりと認むるが故に、今爰に鷗村君の爲、
之れが吹聽の勞を執る所以である。

新渡戸稻造

自序

『日本のブルベッキ先生』は、御維新の前から引つゞき四十年ほども我國に滯在し、條約改正の前からして、外人中先生ばかりは、內地自由居住の特權を享けてゐたのであるが、曾て一冊の日本に關する著述をしたことが無かつた。或人が其理由を問ふたら、先生は答へて、自分は餘り長く日本に住み過ぎて、又た日本を知り過ぎたから、筆を取ることが出來無くなつたのだ。日本の國情風俗などを書かうとなら八週間以上滯在してはならぬと云つた。

ウエンクステルン氏の『日本書史』は浩瀚なる二卷より成り、之れに載せられた日本に關する外國著書の數は殆ど數ふるに遑無きものであるが、其大部分は即ちフルベッキ先生の所謂八週間旅客の筆に成つた、靑眼鏡式の觀察記である。中には四十年前の

日本よりしか、實際に目擊したことの無い學者が、日本に關するオーソリチーと崇められてゐるくらゐだ。して見ると日本の洋行者は、もつとドシ〳〵西洋見聞記を書いて宜い筈であるのに、兎角遠慮に過ぎてゐる。

予が外遊の日は七ヶ月、倫敦では四ヶ月を過したが、他の都會では長くて十日、短いのが半日、これではブルベッキ先生の所謂見聞記著述の資格に欠けてもゐ無いやうである。されば西洋のペン携帶旅客の如くに、觀察が間違つてゐやうが居まいが、さる事には遠慮會釋無く、見た事、聞いた事を、細大共に筆に任かせて書きなぐつたのが、此の『歐洲見物』一卷である。

著者

目次

大隈伯爵序文
新渡戸博士序文
自序 …… 一
＊ ＊ ＊ ＊
西伯利亞倶樂部 …… 一
浦鹽停車場 …… 一
滿洲里停車場 …… 七
バイカル湖畔 …… 一三
イルクツク以西 …… 一三
憐むべき移住民 …… 一三
歐露に入る …… 二三

露京の客……二九
半亞半歐の都……二九
遊仙窟……三三
皇城の草鞋……三五
胡瓜の書……四〇
遊樂の地……四四
冬宮拜觀……四六
露國の宗教……五〇
不夜の都……五五
畫傑ヴエレスチヤギンを弔ふ……五六
ワルサウの赤毛布……五九

獨逸の十日……六五
伯林まで……六五
伯林一見……六七
伯林街頭……七五
ポツダムとドレスデン……八五
倫敦の旅枕……九一
英京の白堊市……九四
マラソン競走……九九
聖寶廟……一〇四
ウエストミンスター宮と白宮……一二三
詩仙の湖郷ケツツクの宗教大會……一三三
海水浴の名所……一五九

カーライルの家……一六八
英京の美術館……一七七
大英博物館……一九二
博物館の地……一九四
英國の動物……一九七
象は家畜——象と獅との病院慰問——犬の墓——犬の慈善運動——時勢粧と犬——獅兒を抱く——犬猫の市——寄席の動物——動物と兒童教育——『親王殿下』——警察犬——動物いろ〳〵
婦人觀……二二五
美女の露國——世帶持の獨逸女——英國婦人の標式(タイプ)——英國の母——現代的婦人の理想——社交的婦人——頼みがたき夫婦仲——結婚難——英國後家の返り咲——流行の犠牲——女權運動——夜の女と街の女
倫敦の宮殿……二八〇
倫敦塔——ウインザル宮——ハンプトン、コート宮——キウ植物園
倫敦の芝居……二九〇

予の見たる芝居——見物の好尚——寄席の藝——俳優の收入——女優の結婚——皇室と演劇
文學の塵あくなひ……三一八
諸種の見世物……三三〇
テームスの舟遊……三三九
街頭雜觀……三四三
英國人氣質……三六六

北地巡禮

オックスフォルド大學……三八五
沙翁誕生地……三八九
グラスゴウ市……四〇三
蘇國詩人バーンスの故郷……四〇六

湖上の雨……四一二
蘇國の舊都……四一七
新しきアセンスの都——メリー女皇の宮殿——エサンペラ城——
蘇國勸業博覽會

歐洲縱斷記……四三一
巴里の夜景色……四三三
極樂野（シャンゼリゼー）の秋……四三六
那破崙の墓所……四三八
森の逍遙……四四一
ルーヴル美術館……四四三
ノートル、ダムの怪像……四四八
ヴエルサイユ宮……四五一

フルッセルの小便人形……四五八
キョルンの寺……四六二
フライブルヒの櫻莊……四六五
瑞西の湖畔……四六八
ミランの名畫……四七二
水の都ヴエニス……四七六
ダンテが花の里……四八五
羅馬の都……四九二
サン、ピエトロの大伽藍……四九三
法皇の美術殿……四九七
大帝國の廢墟……五〇四
公堂（フォーラム）の趾……五〇六
コロシアム演武場……五〇八

バラチンの故宮……五一四
雨のアッピア道……五一六
カラカラの浴堂……五二一
遺跡ところ〴〵……五二四
ポンペイの大雷雨……五二九
ネープルス街上……五四三
ネープルス博物館……五四八
橄欖の野……五五一

蘇士以東……五五四

大金字塔……五五四
煩さポートサイド……五六三
海上の三十五日……五六五

挿畫目次

【西伯利亞倶樂部】
谷間の姫百合……八
忘れな草……九
バイカル湖畔……一二
ウラル山中……二六
【露京の客】
サン、バシリ寺院……三〇
クレムリン城内、イワン、ベリキ寺院……三六
雀が岡……三九
ネヴ河上より冬宮……四七
露都サン、イサク大寺院……五二
彼得大帝騎馬銅像……五七
獨髏の金字塔（ヴェレスチャギン筆）……五八

ワルザウ市街……六三
【獨逸の十日】
ウンテル、デン、リンデン通……六八
伯林公園の凱旋通……七一
凱旋塔……七二
伯林宮城……七三
チア、ガルテン公園……七六
ウンテル、デン、リンデン通……七九
伯林凱旋門……八一
サン、スシー宮……八六
シスチン、マドンナ（ラファエル筆）……八九
【倫敦の旅枕】
英佛の親交……九五
英佛博覽會場内フリップ、フラップ……九七
オリンピック競技場……一〇〇

聖ポール寺院……一〇八
海將ネルソン記念碑……一一〇
ウエストミンスター寺……一一三
詩人の墓域……一一五
國王戴冠式古椅子……一一九
英國議事堂……一二四
下院議場……一二八
僧都岩……一三六
文豪ラスキン記念碑……一三七
詩仙ウオルヅウオルスの墓……一四二
ウオルヅウオルス冥想の座……一四六
西ボーンマス海水浴……一六三
マーゲート海水浴……一六七
カーライル銅像……一六九
カーライルの家の背面……一七一

カーライルの机と椅子……一七四
小天使（レーノルヅ筆）……一八三
アミリア公主（ローレンス筆）……一八五
サイケの浴姿（レートン卿筆）……一八七
アンクル、トムと其妻（ランドシア筆）……一八九
動物園の象遊び……一九九
大猿コンソル君の病院訪問……二〇一
家族の一員（コットマン筆）……二一四
ウエニス市サン、マルコの鳩……二二三
芝居歸りの婦人……二四一
良人候補者の競爭……二四九
女子の投票權……二七二
ピカデリーの夜……二七五
反逆者の門……二八二
『牛肉食ひ』（ビーフ、イーター）……二八三

斷頭臺の趾……二八六
ウインゾル宮後園……二八九
ハンプトン、コート宮……二九三
ブッシー公園の鹿……二九五
キウ植物園大溫室……二九六
將來の演劇（一）……三〇一
ツリーのメフイスト……三〇五
將來の演劇（二）……三〇九
同　（三）……三一三
アールス、コートの夜景……三三三
テームス河上流ハンプトン、コート宮附近……三四一
巡査を圍んで道を聞く……三四四
オックスフオルド、サーカス……三四六
ロッテン、ロウの敎會行列……三四九
フリート街……三五四

文豪ヂッケンスの紙屑屋……三六三
【北地巡禮】
クライスト、チャーチ大學……三八六
アイシス河上の競漕……三八七
大學生（コンモナー）……三八九
セキスピア誕生の家……三九一
沙翁のストラットフォルド畫像……三九三
ツリニチー寺院……三九七
アン、ハサウエーの小家……四〇〇
グラスゴウ大學……四〇四
詩人バーンス……四〇七
ダーン河の古石橋……四〇九
バーンスの小家……四一一
ローモンド湖上……四一四
詩人スコット……四一九

スコット記念塔……四二一
蘇國女皇メリー……四二四
メリー女皇の寢床……四二六
エヂンバラ城……四二七
【歐洲縱斷記】
巴里イタリア街……四三三
グラン、オペラ劇場……四三五
極樂野より凱旋門……四三八
那破崙の墓所……四三九
エッフエル塔とセーヌ河……四四〇
乳賣の乙女（ミレー畫）……四四四
落穗拾ひ（ミレー畫）……四四五
ミロのヴイナス女神……四四六
ノートル、ダム寺……四四九
ノートル、ダム塔上の怪像……四五〇

ルイ第十四世臨終の寢牀……四五三
ナポレオン第一世の寢牀……四五四
海王の噴泉……四五六
ウォータールー古戰場の獅子記念塔……四五九
小便人形マンネケン……四六〇
キョルンの大寺……四六三
フライブルヒ郊外……四六五
辻の基督像……四六六
ペスタロチー銅像……四七〇
ルサルン湖……四七一
『晩餐』の基督（レオナルド、ダ、ヴィンチ作）……四七一
サン、マルコの寺前……四七六
ゴンドラ舟……四八二
詩聖ダンテの像……四八七
ダビデ（ミケランセロ作）……四九〇

聖母受胎（アンセリコ筆）……四九一
サン、ピエトロ寺……四九五
人間創造（ミケランセロ作）……五〇〇
ラオコン彫像……五〇三
フォーラムの趾……五〇七
コロシアム演武場の頽壁……五一〇
コロシアムの內部……五一一
バラチン宮の廢趾……五一五
カタコムの內部……五一九
カラカラ浴堂の跡……五二三
カプチニ寺の骸骨堂……五二七
アポロ神殿の趾……五三三
ポンペイ廢墟のレギナ通……五三六
廢都の全景……五四一
ネープルス灣頭……五四四

ポンペイの壁畫……五四九
【蘇士以東】
埃及人の家族……五五六
大金字塔……五五九
スフインクス巨像……五六一
蘇士運河……五六六
コロンボの女……五六八
新嘉坡植物園……五七一

歐洲見物

櫻井鷗村著

西伯利亞倶樂部

浦鹽停車場

六月八日浦鹽發の萬國寢臺車に便乘したる日本人は、伊豫、五十嵐の二氏と予とであつた。而して哈爾賓からは大橋新太郎及び山田靜三の二氏が乘込まれたので、此行黃色な顏の日本人が五人、いづれも歐羅巴を指して行くのである。大橋君此一行を名けて西伯利亞倶樂部と云つた。而して外人の乘客中には帝國大學のロイド氏夫妻あり、横濱なる米國貿易會社のアリソン君あり、又た瑞西公使リッテル博士及び其令息て當年六歳、日本語の頗る巧者なマックス君

がゐる。此の人々は云はゞ我倶樂部の員外員なのであつた。

五日敦賀を出たモンゴリア號は八日の早朝浦鹽港に入つた。税關官吏が船に來る、一人日本語の少し解る男が自慢で『君、ピストルを持つてゐ無いか？カルタは無いか？』と尋ねる。小生意氣な男であつた。港内を見渡せば、濱邊近き兵營にては、身幹長大なる露國兵が、朝の調練をやつてゐた。扨て船より下り、午後四時の發車を待つまでの半日間、これを有利に暮さねばならぬ。乘客は荷物を赤帽ては無くて、白前垂の擔夫に托して、各〳〵市街の見物に出掛ける、予は、新橋停車場で、偶然同行を約したロイド氏夫妻と一つになつて、先づ萬國寢臺會社に往つて、切符の引換をして貰うてから、料理屋で昼飯を食ひ、それより、イヅヲシチク(馬車)を雇つて乘廻した。ロイド氏夫婦は一臺、予は一人で別の一臺。丁度雨後の事とて、泥濘車軸を埋沒せんばかり、道路は極めて惡い。舗石はあるのだが、其上に泥が堆つてゐる、途中俄かに段になつたところがある。長幹肥大なロイド氏夫婦の車は重みがあるから、左程でも無かつたらうが、身の輕い予一人の車、ガタ〳〵、ビシ〳〵煽られづめだ。度々今にも轉落するかとヒヤ〳〵し、尻は常も坐に落付いてゐ無い。あぶなかしいので、予は兩側を押へてゐた。されど馬は肥えて柔順、赤袖黑衣の純粹なスラヴ風の御者が、二頭の肥馬を遮眼も掛けずに、泥塗れの汚い凹字形の車に繋いで、之を御することの巧妙なる爲、泥は跳ねても、車は覆へらず、予は浦鹽の大道で四這になるの御難を免れた。

道路の惡いのは言語道斷。流石の東京と雖も、道路の惡しさを以て浦鹽よりも誇ることは出來まい。但し大道の行潦に牛が溺死したと云ふ北京よりは、イクラか優つてゐるだらう。車上より道の惡さを手眞似で誹れば、御者もポッケットを叩いて一笑する、即ち道路修繕費が土の中へ入らずに、官吏のポッケットに入つたものなることを嘲るものと解したのは非か？　此の泥路を鼠色の長外套を着、肩より長劍を吊して威風堂々たる露國將校が、花の粧せる婦人（細君か、令孃か、但しは賣女？）と相携へて、泥まみれの馬車を驅つてゐるのは、妙なコントラストだ。道路に營々勞働するものは、殆ど凡て支那人である、朝鮮人である。白衣の朝鮮婦人は群を成して埠頭や停車場に、ウヂャ〳〵してゐる。時には白や紫で盛裝した韓國婦人が頭に物を戴いて通る、而して白衣の亭主と手を携へた所は西洋カブレか？　路上の敷石の乾いたところに鴿が下り群がつて、餌を拾つてゐるのは、此市街で最も趣味のあるものであつた。

支那人が低い小屋掛を並べて、野菜を賣る、果物を賣る、僕等は買はうにも言語不通。手眞似で値を聞けば、法外に貪る、コンナものは相手にせぬがましだ。路傍に花を賣るとは風雅な

やうて、汚い支那人がある。日本の女が、御國風に小兒を背負つて徘徊してゐる。日本人の店には日本語の張出しあり、勸工場には日本人の出店少からず。日本人の宿屋もあれば、料理屋もあるとの事。僕が無花菓の乾固めたのを買つた店の主人は希臘人であつた。給葉書を買つた處は獨乙人の本屋。浦港は凡て他の開港場と同じく、香港と同じく、桑港と同じく、世界的なのである。

浦鹽停車場で列車に乘る時が可笑しかつた。予の荷物の中で、一個のトランクが稍や大に過ぎた。白前垂の第三番擔夫がドウしても車室内に入れやうとは云はぬ。バカージ、バカージ(手荷物車)だと云ふ。指を三本出してバカージと云ふのは、三時にバカージを開くから預けよと云ふのだ。乘合の西洋人も仕方が無い、預けねばなるまい。旅中入用なものがあるなら、小さな鞄に詰め變へたが宜からうと敎へた。然るに西洋人の中には隨分と大きなやつを車室内に擔ぎ入れるのがある。犬の牝牡に、四疋の犬兒を容れた大きな籠さへ舁ぎ入れる男がある。それを見たから、予もドウセ錢が口をきく露西亞だ、一つ試めしてやれと、三番君に凡ての運賃として、五十コペックを見せたら、二留くれと云ふ。仕方が無い二留を見せて、なほ又た五十コペックを見せ、トランクを指して、ワ、ワゴン〳〵と云つたら、三番君乍ち予のトランクを擔

いて、車室内に入れてくれて、遂に都合四個の荷物で三留をねだつた。これでも予は大いに儲けたので、彼のトランクをバガージに預けやうものなら、大枚の運賃を絞られるのであつた。

アリソン君は二個のトランクを預けて、モスコウまで六十留を取られたとコボして居た。

停車場内には幾多の無賴漢か浮浪人らしい、醜な人相の男や、乞食が群を成してゐる。旅客に取つては、不快千萬だ。西伯利亞の停車場は、何處でも此通りである。乞食は、停車場ごとて、列車が着くと、近寄つて來る。また不具な乞食が來るのは、過る日露戰役の賜ではあるまいか。停車場は又た其土地の住民の散歩場たり、公園たるの觀がある。

浦港で偶然予と同車になつたは伊豫、五十嵐の二君で、共に伯林留學の途次であつた。予と同室になつたのは、緬甸から來た佛國の稅關吏で、能く英語を談す滑稽漢と、荒次郎式の露國俳優とであつた。此俳優は露語の外話せぬので、稅關君と僕とは彼と毎日睨み合ひをしてゐるばかり。哈爾賓からは大橋氏一行が乘り込む、これで日本人は五人。いつの間にか西伯利亞倶樂部が成立つて、會合所は大橋君の室と定まる。これへ參加して、愛嬌を振撒くのはアリソン君と、マックス少年とであつた。マックスは能く日本語を話す、惡戲をする、大橋君の與へた巖谷氏の『日本御伽噺』を予等の間に持廻つて、桃太郎、文福茶釜の昔譚を讀んでくれとねだる。

アリソン君は快濶なる青年、日本語も出來る。僕等の爲には車内の通信員の役を務めた。

不得要領なるは露國の汽車なり、僕等は萬國寢臺車に乘つたのだが、車内を通じて食堂の給仕に一人片語の英語を話すものがあるばかりて、豫て西伯利亞鐵道案内書て承はつて居たのとは少なからず樣子が違ふ。横濱て切符を買ふ時には二ヶ月前に申込めとか、常に滿員て席が取れぬなどゝ云ふのてあつたが、浦港て切符を買つた伊豫、五十嵐兩君の談ては、當日の午後まて自由に寢臺が買へたと云ひ、爾かもモスコウまての運賃は僕等が横濱て買たのよりは廉い。保險料も取られ無ければ、赤十字税も課せられぬ。車内は一等二等殆ど等差が無い。强ひてありと云へば、室内のクッションの色に相違があるばかり。イルクツクから乘換へた予等の車は、元は二等車てあつたのを、一等車に變へたのてある痕跡が瞭然と殘つてある。2d Class と眞鍮て入れてあつたのを、2 を除いて 1 にはしたが、d は依然たり。ロイド君之を指して、見よ此車は一ペンニー寢臺車なりと。d はペンニーの符號てある。萬國寢臺車會社は、少しの車輛を色々に融通して使用してゐるのてはあるまいか。又た急行列車とは云ふものゝ、所々て物の一二時間も停車する、小さな停車場にも寄る。その又た停車時間が不定て、伸縮長短は其時の御都合次第、予等は三鐘音によつて發車するを知つて、終に規定の停車時間なるものを知らず

に過ぎた。汽鑵車は石炭を焚くことが稀て、多くは通路の森林より伐り出した薪木を用ゐるから、火力も速力も弱いてはあらうが、この長い旅行に煤煙て燻べられぬのは、一つの有難い點てある。

滿洲里停車場

列車が北滿の露國租借地を通過する時、見渡すと、營々たるは支那人なり、ノンキなるも支那人なり、帝政の善惡に拘らず擊壤鼓腹するのは支那人の特性か。威張つてゐるのは露國官吏なり、支那人は掘立小屋に住んて、露人は比較的美屋に住んてゐる。支那人は、悠々ノソ〳〵として、畑を耕してゐる。路傍の樹下石上に結跏趺座して長煙管を吹き、汽車を見てゐる、雲を見てゐる。ア、支那人は天下泰平の民なるかな！　只だ羨やましきは、牛馬豚羊の肥えてゐるのと、野に妍麗を競ふ花卉の多きことてある。浦港ても、支那人などが街頭て谷間の姫百合（リリー、オブ、ザ、ヴアレー）とて白く小さく、香ゆかしき花を束にして賣つてゐたが、西伯利亞の停車場は、到る處て女や小兒が、此の花や、花瓣の大きなフォルゲット、ミー、ナット

(忘れな草)や、櫻草を賣りに來た。

滿洲里では稅關檢査がある。一行中の大橋君は、室內の手荷物の中に少からぬ絹物を入れてゐた。これを話すと、車掌先生は、一人佛國語を話す英國人を通じて、これだけの品なら二百留の關稅を取られる、檢査は頗る八釜しい、自分が匿してやらうと云ふ。大橋君三留の賄賂を遣はすと車掌は一室の板の螺釘を拔いて、中の穴へ匿くしたが、イヨ〳〵滿洲里に來て見れば、室內荷物の檢査は、只だヅウと目を通すだけで、何

露國ポヒストニーナ停車場にて賣しき少女より購ひたる『谷間の姫百合』

の面倒も無い。車掌先生は曰く、此先きのタンホイの檢査が更に嚴密だと云ふ。來て見れば、これ又た極めて無造作だ。ツマリ車掌は大橋君を威かして三留せしめたのである。

滿洲里では、バカージにある荷物を、一々停車場內の役所へ卸して檢査した。白前垂が擔ぎ出すのにも、一々乘客から金を取る、アリソン君は二留せしめられた。旅行免狀の檢閲もあつた。係りの將校が美人の女房か娘かを連れて來てゐてベンチにひたりと寄添ひて坐し、日本人の旅行免狀を女房にも見せて、笑ひながら檢閲したのは失敬千萬だが、腹を立ても仕方が無い、これが御國風だらう。

タイが附近の『忘れな草』

滿洲里に停車すること二時間半にして、汽車は又た西伯利亞に入る。丘陵あり、川あり、黑木立の小屋あり、穴居の民あり。村で獨り目立つのは、赤や青に塗つた木造の寺院で、尖塔の上には金色の十字架が光つてゐて、どれでも基督敎國だぞと誇示してゐる。停車場には必ず乞食が來る。トルストイ伯然たる長髯の乞食が多い。アア人事は慘憺たり、されど自然は愛すべくして、黃水仙、あやめ、虞美人草などが、おのがじゝ咲き亂れてゐる。

六月十一日午前にチタ附近に來たが、河流に沿うて多くの牧地あり、移住民中、未だ家を營むの力無きものは、水邊にテントを張つて生活してゐる。兵隊が魚を釣つてゐる、洗濯をしてゐる。此邊では所々に殘雪を見た。十二時早朝タンホイ停車場に着くと、御儀式の稅關檢査があつた。僕等はプラットフォームを散步してゐると、白髮長髯の老翁が、生れたばかりの孫を抱いて、乳母入らずの乳首を吸はせてゐたのは、何國も變らぬ兒孫を愛するの情で、乘客はいづれも之に目を留めた。

停車場に着く毎に、壹間だと少しの時間でも利用して、乘客はプラットフォームに降り、往つ返りつ散步する。予は之を名けて御百度詣と云つた、祈願する所は早く西伯利亞を去つて無事にモスコウへ着くやうに！　よし食事中であらうが停車場へ着くと、客は降りる、給仕も降

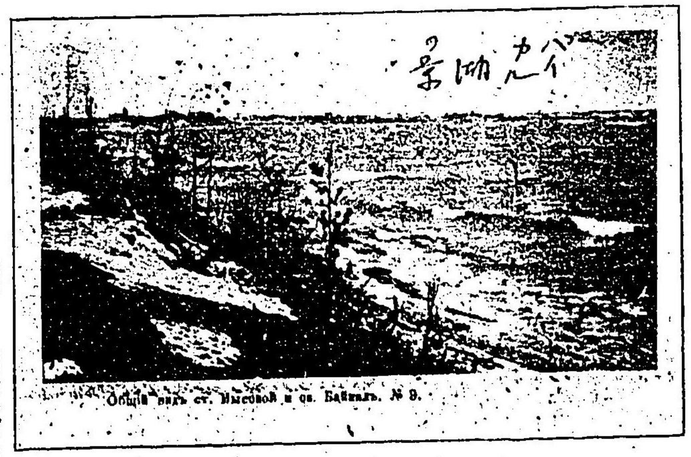
りる、そして御百度を踏む。禮も作法も殆ど無きは西伯利亞汽車の食堂だ。米國の一紳士は、旅行中、垢染た寢卷即ち西洋のどてらを着たまゝ、常も食堂に出てゐた。

食堂の話が出たから、序に云はう。寢臺車會社の食堂で供する食物は、決して上等とは云へぬ。時には腐つた小鳥が出たり、干物にしたやうな鷄肉もある。野菜物が少くて、これにも閉口。烏瓜然たる胡瓜が時々の御馳走、これは結構であつた。列車のボーイなどは、停車場で、この胡瓜とパンとを仕込んでおいて、三度の食事を此れで濟ますのもあつた。しかし途中の大停車場には、立派な食堂があり、列車のよりは遙かに上等な料理を食はす、カビアの甘いのもある。西洋人乘客中にて機敏な人は、停車場の食堂で舌鼓を鳴らす向もある。リッテル公使の如きも、時々停車場の食堂から、パンにカビアを添へて、嬉しさうに車內に持歸ることもあつた。しかし旅行馴れぬ日本人には、この停車場の食堂進擊は一寸氣が急けて出來ぬのであつた。途中の驛々では、女子供が搾りたての牛乳を賣りに來る、牛が放飼だから、乳が靑臭いけれど頗る結構、四合瓶でも、三合瓶でも、價は同じく二十コペックである。食堂用の牛乳もこれを買ひ込むのである。

バイカル湖畔

タンボイに着く朝からして、バイカル湖が見えた。湖畔の連山には所まだらに雪が殘つてゐる。水上にも流雪を見た。露國が戰役中に巨額の資を投じて、大急ぎで開通したる、バイカル迂回鐵道は蓋し西伯利亞鐵道中の難工事で、湖畔に沿うて、山を掘り、岩を鑿つて、鐵路を布いたのだが、由來トンネル嫌な露國鐵道だから、之を以て至難工事と誇るのであれど、瑞西か日本の鐵道なら、コンナ工事は左程稱するにも足るまい。

湖上には船を見ること至つて稀で、湖畔迂回の半日間に、僅かに二艘の漁舟と二隻の小蒸氣とを見たばかりだ。アリソン君曰く、多分東郷大將



バイカル湖畔

來りて、湖上の船を悉く擊沈したのであらうと。

バイカルを去ると、西伯利亞第一の都會イルクックだ。附近には牧場が多い。渓ましきは西伯利亞の牧場と、其肥えた牛馬豚羊とである。住民が河へ水を汲みに往くにも、肥馬を走らせてゐる。

イルクック以西

十二日午後二時にイルクック驛に着いたので、列車の乘換をした。僕も今度は五十嵐、伊豫二氏と同室になつた。又たハルビンから來た露國の巡査と室を同じうした。此の査公は、戰役中、長崎に來てゐたと云ふ。捕虜兵であつたものと見えて、長崎市民から記念に貰つた、萬歳と銘した匙を持つてゐる。あなた〳〵、長崎むすめ、お花さん、お勝さんなど云ふだけの日本語が分る、頗る以ての愛嬌者だ。予等は彼を呼んでアナタ君と云ふ。アナタ君大なる藥鑵を携ふ、蓋し茶を飲む爲である。僕等之れを借りてボーイに湯を求めたら、黄色の熱湯一杯で十五コペック取られた。

浦鹽から乘込んだ佛國の女郎は三十四五の大年增て、しきりに彼方此方へ秋波を送つてゐたが、トツ〳〵上海の車屋の親方なる佛國人のニヤケ男を捕虜として、イルクックから同室になつた。兩人亦た大得意で、停車場を手を引いて散步してゐた。イルクックから又た年の若い露國女郎が乘つた。物好きなアリソン君、久しからずして予等に報告して曰く、彼女の名はオルガて、齡は十九、今大いに會話をやつて來たと。では英語が解るか？　いやオルガは露語、自分は英語、互に不通だが、只だ其目能く語ると。

十四日は露曆にて聖靈臨降祭に當る日曜日なので、此前後三日に亘つて露國の夏祭だ。家々の窓にも、停車場にも、汽車の窓にも、白楊の枝を打付けてゐる。クリスマスにハレーや樅の木を飾る格だ。僕等の列車にも飾り付けてある。食堂は丸で白楊の林と變じてゐた。停車場の祭壇にも、今日は特に燈明が明るいやうに思はれた。

今日は沿道にて多くの野生の芍藥を見たのはゆかしかつた。西伯利亞の夏野は、百花で飾られてゐる。人工を多く加へざる荒野には、自然が其妍を擅まゝにしてゐる。大橋君曰く、自然主義の薄志弱行の男女を此野に放つがよいと。農家には一莖の花も植ゑねば、無風流無趣味である。しかし家の側に、郵便箱の如きものを高く竿頭に立てゝゐるのは、小鳥に巣を與へてゐるので、殺風景な露人に似合ぬ風流だ。露人の動物を愛する事は、其家畜の馴良なるを見て知るべきである。モスコウでも、市街の中に數頭の乳牛を連れて通るのに、綱一本つけず、牛は悠然たり、行人其間を横ぎるに、少しも驚かざるを見て、僕等は寧ろ驚いた。これによつて見ると、世界中て最も動物を虐待するのは日本人てあるやうだ。されど西洋人から時々、日本は宗敎上より動物を愛する人民であるため、動物愛護會などの必要はあるまいにと云はれるとゾット冷汗が出る。

今夕晚餐の時に、いつも鈍い給仕が、また一層のろい。皿と皿との間に腹が減る。アリソン君は米國式に、給仕頭の肥大漢、襟章の番號一一〇二君を呼ぶに『ハロー、ジョー』とやる、給仕の遲さを罵る。すると一一〇二君遂に傲然として、覺束なき英語で『予は給仕で無い、支配人である、シエフである、マネーヂャーである』と威張る。アリソン君は負けずに、さらばジョーて無い、シエフ君よ、給仕が遲いでは無いかと調弄ふ。このシエフ君頗る愛嬌者なり、予等は彼の肥大なるによりて『タフト一一〇二番君』と仇名するに至つたが、アリソン君は交せ返して『おたふくさん』だらうと云ふ。或時僕が食堂て、このタフト君の處へ郵便切手を買ひに往つたら、彼の側に、英佛獨語の會話篇がある。予がそれを手に取つて見てゐると、シエ

フ先生曰く、この本は自分などには最早用の無いものだ、至つて平易なもので、たゞ自分が若い給仕共に會話を敎へる參考書にしてゐるのだと、頗る付のブロークン英語で得意氣に話した。シエフ君ともあらうものが、會話篇を置いてゐるのを見付けられたから迷惑がつて、かやうな言譯をしたものらしい。しかし予はシエフ君もモット此會話篇を勉强したら、乘客には便利少からずであらうにと思つた。シエフは又た艶福家なり、一日二日と過ぐる中に、彼のオルガ女と手を取つてプラットフォームを散步するやうになつた、親密を加へて來た。オルガは他に客を得ざる爲に、シエフを餌として、旅中の食料を拵ぐのだとはアリソン君の通信であつた。

憐むべき移住民

六月十四日午後八時半、晩餐濟み、タイガ驛も過ぎて、一小驛に着いた時、露國少女が數人て愛らしき『忘れな草』の花束を賣りに來た。予は十コペックを與へて其一束を買ひ、數莖を狀袋に容れて故鄕へ送つた。忘れもせぬ、此夜は慥か舊曆の十五夜で、滿月が雨の晴間には朧に空にかゝつてゐたが、高緯度の北方の夏とて、十時になつても、まだ日が暮れぬ。此日は

陰晴定め無く、從つて冷氣を覺えた。途中處々の停車場附近では、新到着の移民が、白楊の枝を伐つて、野原に雨を凌ぐべき小屋を葺いてゐた。年寄も小兒も大急ぎで、僅かばかりの家財道具を濡らさじと運び入れる、何となく涙の催さるゝやうな憐れな有樣であつた。其翌日の朝にはカインスク驛に着いたが、此驛にては、殊に多くの移住民が到着して、プラットフォームに起つもの、坐するもの、家財道具を廣げ散らしてゐた。一抱もある露國特有の大麵包をナイフで削いでは嚙つてゐた。

西伯利亞も露境に近づくに從つて、新たに來る移住民が多くなつた。停車場に着いてゐる露國政府の四等列車を上中下三段の棚に仕切つた中には、いづれも移住民を滿載してゐる。それが皆憐れな狀態で、一外國婦人は、プラットフォームにゐた可憐な少女二人に銀貨一枚づゝを惠むと、驚いた顏して見上げる、其母親は嬉しさうな顏をする、少女は其銀貨を繼續の衣服の中に收めやうとして、收むる所なきに惑つてゐた。又た一停車場に着いた移民列車から、散步の爲に下りた移民中の婦には、裸足で、而も弊衣其身を蔽ひ兼ねてゐるのがあつた。ロイド夫人は之を見るや、一着の古着を携へ往きて、之を與られたが、初めは其衣服を手にして、呆然とロイド夫人を見てゐた。夫人が少し離れると、傍らなる女連と、其衣服を廣げて、ヒネクリ

廻す、それが彼等には分に過ぎたるものだから、ロイド夫人が二十間も離れた頃に、やうやく嬉しさうな顔になつて、ペコ〳〵低頭して謝意を表してゐた。移住民は殆ど乞食に近き風采をなしてゐる。彼等は本國にて生活に堪へぬが爲、妻子老幼を率ゐて鄕土に永別し、遠き遠き西伯利亞の荒原にて、生を求め財を集めんとしてゐるのである。予は彼等を見る毎に、ダフリン夫人が愛蘭土移民の哀歌を念頭に浮べずにはゐられ無かつた。一移民が、飢に死したる愛妻の墳墓に辭して、將に米國の地に赴かんするや、彼の國にはパンあり、日は常に輝くと聞く、されど我れは古き愛蘭土をいかで忘れんやと詠じたるが如き歎きは、聽て予等の見たる露國移民の身上なりや否やは知らねども、予は此歌を憶うて、また彼等を切に憐んだ。

露國は領土の廣大なるを誇るものである。歐露の中、その中部南部の耕作に適したる沃土のみて、三十六萬七千六平方哩ありと云ひ、人口は一千平方哩間に僅に平均六十人の稀薄なるものである。農民に割當てられた地面が、丁年以上の男子一人につき三四町歩に當る。然るに一年を通じて耕作に適する時季の短かき爲に、作物の量は少い。しかも惡政は民を虐して收斂剝薄、國稅、地方稅等を合すれば一人につき一年平均五十留の負擔がある上に、宗務院からも取り立てられる。又たウオッカ酒は彼等を鈍らす、それで農民は絶えず『我に地を與へよ』と叫ぶ。よつて國有地を拂下ぐれば、貴族等が其間に在りて私利を營む。その拂下土地價格が一町歩につき百二三十留を四十ヶ年賦に支拂ふ。即ち一年に三留ほど拂へばよいのに、それが拂へぬから、農民購土の便を計るの目的が、つまりは彼等をして負債に堪へざらしむることになつてゐると云ふ。遂には鄕土に在りて衣食する能はざるもの〻頻々として生ずるより、彼等は政府や村團の保護を受けて、西伯利亞に移住するのである。露政府は西伯利亞の移民政策に鋭意し、現に本年度に於ては、五十萬家族を移住せしむる豫算であると云ふ。移民一人につき汽車賃は露國の南西端なるダニューヴ河畔よりするも、五十留の低額であり、家族同伴者には更に割引をなすのであるが、但し西伯利亞より本國へ歸るには、高い賃銀を拂はねばならぬのである。それでも一旦移住した者の中の四分の三は再び歸國するのである。抑も彼等農民は無智蒙昧で、西伯利亞がどのやうな處だか知らず、たゞ故鄕にゐても生活が出來ぬから、西伯利亞へ往きさへすれば、土地は只で貰へる、農具は貸してくれる、旅費に就いても政府の保護があると云ふので、開墾が如何に困難なるかも考へずに往く。また政府や鄕團から壓制的に送られもする。然るに來て見れば、考へたとは大違ひ、西伯利亞の原にも小麥やキャベツは野生してゐない。これを耕やし種を蒔くまでには、草も取らねばならず、

木も伐らねばならず、石も碎かねばならぬ。魯鈍なスラヴ農民には、斯る開墾の苦難を凌ぎ、奮志荒野に沃土を發見する氣慨のあるものが少い。それで往つては見たが、生活は益す困難、同じ食へぬなら、いッそ故郷へ還つたがましと、またノコ〳〵引返す。然るに一旦村落を立退いたものは、村團からして籍を削られる、もと持つてゐた家も土地も、移住する時に處分したから、故郷へ歸つても、膝を容るゝ地が無い有樣。從つて流浪の民を生ずる。地方で食物を獲ざれば都會へ出る。都會では浮浪人として追拂ふ、又た他の都會へ彷徨ひ行く。其處でも同じく追放される。仕方が無くて、再び故郷へ舞ひ戻る。村團では村に置いても仕方が無いから、又た西伯利亞へ移住させると云ふ次第である。されば新來の西伯利亞移住民が、乞食にも等しき風采をなせるは、彼等が本國に住み兼た窮民であるからなのである。囚人の流刑地に宛てられたる西伯利亞は、今また乞食の移住地なのである。

政府の移民策は、移住民を鐵道線路より三哩距つた處より先きに居住せしむるのである。其譯は、鐵道附近に移住せしむれば、彼等は自然、線路や停車場に集合して惡事を働く、また社會黨、虛無黨の如きは、多く先づ鐵道線路附近の人民を教唆煽動するのであるから、移住民を成るべく交通便利の惡い處へ置くのである。されど彼等を毒し、彼等の膏血を絞る宗教と惡政

とは、何處までも哀れなムジークに追隨纏綿してゐる。見よ、西伯利亞の原、歐露の野、荒村廢里、豚小屋にも等しき人家の間に、白く塗り青く塗りたる尖塔の金十字を閃かして、屹立するものは、正教の寺院で無いか！

又た米國等より輸入したる大農器械を運送する貨車を見ること多し。露政府は西伯利亞を開發するに、最も適當なる大農法を行はんとするものである。されど政府の之を賣下ぐるに、貴族や豪族の、其間にゐて私利を營むが爲に、農民は之を購ふことに困難なのであると云ふ。

西伯利亞は廣漠たる沃土である。天然は此に一大富源を放置して、人工の開發を待つてゐるのである。水の富、山の富、森の富、野の富は、未だ其價を見出されずに、多くは委棄されてゐる。若し夫れ、少しく之れを開發し、其埋れたる富を發掘せんには、どうてあらう。僅に開墾の緒に就いてゐるトムスクの一州でも、其の『金山』の山脈からは、金、銀、銅、鉛、錫、白金、石炭等を產するでは無いか。西伯利亞開發は世界に於て、殊に東洋に於て、大いに注目すべき問題である。日本人は其地域の近いだけそれだけ、殊に西伯利亞鐵道の利便が備つてゐるだけに、之れには注目せねばならぬ問題である。若し夫れ惡政の民を虐すること無く、宗教の民を恐にすること無く、又たウオッカ酒の民を痴ならしむること無く、この三大害が去つた

ならば、而して更らに露國農民が教育に目を覺まして來たならば、西伯利亞の發展は刮目して見るべきものがあるであらう。否な其時には歐露も今日の狀態には逡巡してゐ無いであらう。

兎に角西伯利亞は肥沃の平原である、未だ開墾せられずして委棄せられ、人口甚だ稀薄なるは云ふまでも無い。而して此地は日本人の發展移住を希望んでゐるのではあるまいか。殊更に門戸を鎖して日本人を迎へ無い加奈太や米國まで、强ひて往くにも及ぶまじく、それよりは人民としては溫良篤實なる露人と握手して、西伯利亞の富源を開くことは出來無いものでもあるまい。賃銀の低廉なる露民と伍して此地に住するならば、加州に於けるやうな勞働問題も起るまい。

序に申す、西伯利亞を通る間、各停車場で、プラットフォームに西瓜の種の皮らしきものが、黑く白く落散つてゐる。下等民は其の西瓜の種然たるものをボリ〳〵噛んでゐる。其物の何だるかは分らぬ。ロイド君も大いに怪しんで、或時一停車場で、一コペックを出して其の一握を帽子の中へ買つた。僕も貰つて噛んで見たが、少しも味の無いものだ。歐露に入つても其通り、モスコウでも、聖彼得堡でも然り。露都の人民館へ往つた時など、其皮で地面に鉛屑を布いたやう。路傍には其種を大きな籠に入れて賣つてゐる。行人はボリ〳〵噛んでは、プイと皮を

吹き出す、支那人の西瓜の種に於けるが如きものだ。後にて其の何なるかを人に問ひて、始めて日向草の種だとか說明された。かく噛られては、露國の日向草たるもの、一年に數百萬石の種を結ばねばなるまい。而して之を噛ることは、懶惰の本性か但しは習慣性かを表してゐるのだ。常に口を動かすものは、常に手の油斷してゐる人だ。

歐露に入る

西部西伯利亞の地、エニセイ、オブ兩大河の平原に至りては、これ全く草の太洋である。處處の低き丘陵は靜に起る波のやうに見えて、こゝは廣漠無限の沃土である。一都會一部落を去つて、又た數十里にして他の都會、他の部落に來るまでは、人跡も殆ど稀な荒野である。露語にては、平原をステップ(steppe)と云ふのだ。それで一つの洒落が出來た。『トムスクよりオムスクまでの距離幾許ぞ?』曰く『一歩(step)なり』と。

西伯利亞の一大都會トムスクも過ぎたり、此市はオブの一上流トム河に瀕す。これより烏拉山までは渺茫たるオブの大沃野である。十六日午後には、同じオブ河の上流イルチシュ河畔の

都會オムスクに着いた。このあたりの原野には、南米產のパンパス草に似て、丈の低い、穗の房々したる尾花が、見渡す限り一面、風に搖いて、海の大海原を現じてゐた。十六日の午前ク ルガンを過ぎて程も無く、我等が車は既に亞細亞を去つて歐露に入り、これよりウラル山脈へかゝつた。

烏拉嶺の麓チエルヤビンスク驛よりは、彼得堡直行の分岐線がある。予等は其方を指さず、依然として舊都モスコウへ向つた。烏拉の大山脈、これが東西を分ち、人種を分ち、歷史を分つ、自然の成せる萬里の長城だと云ふが、予等は烏拉嶺に入つて、殆ど山を見ず、時に遙かに奇峯の峭立するを望むことがあつても、我が脚下、我が軌道は海拔幾丈の高さにあるか測定することを知らねば、依然として平野を往くの感がある。烏拉の嶺は天下の險で無い、胡人を禦く萬里の長城では無い。さればタメルラン前後歐露に侵入せる韃靼人種は、今以てスラヴ人種の數を壓倒せんばかりであるでは無いか。歐露や烏拉の境は平かにして守るに難く、南はヴォルカの平野によりて、一望直ちに波斯、印度に通ず。されば其國が歐羅巴の一邦たるを自負してゐても、大いに東洋的な所以である、其東洋的たることは、民族精神の一代表者なる建築物が、明かに之を示してゐるのである。

烏拉山中の停車場では、山中の名產だとて、水晶、紅玉、碧玉の類を賣つてゐる、法外な値を吹いてゐる。成程眞物もあるのではあらうが、其多くは贋物の硝子玉だ。烏拉には產せずして、歐洲の何處かの贋物師の細工を、遙々と烏拉まで輸送して來て、其山中の名物となしたるは、江の島の貝細工の亞流である。兎に角處の名物だと云ふので、店ごとに乘客が眞黑に群がり、冷かす、値切る、但し買ふ人は尠い。車中の一奇人で、耳に寶石を嵌めたる墺國人は、二三の店で、高價な品を買つて喜んでゐた。同じ店で賣る鐵器庖刀の類とて、恐らく烏拉の產物ではあるまいが、烏拉は鐵の產地である。把手が鐵槌になつた鐵杖、これは露國的で、烏拉の名物としては予は寧ろ之を推す。但し予が之を買つた譯で無い。

山中には野生の黃色な櫻草が多い。時に低峯左右より逼つて綠樹深く、一條の清流其の間を緩かに過ぐるあり、人はこれを獨乙のシユヴアルツヴアルドの風景に比した。日本人は、風景佳美なる所をさへ見れば、日本に似てゐると云ふ。

西伯利亞倶樂部の通信員たるアリソン君は、歐露の第一信として、車內の一珍事を傳へた。曰く、乘客の中に獨乙人夫婦で四五歲の童兒の惡戲盛りを伴れたのがあつて、其小兒の頭を、彼の佛國女郎が、可愛がる積で一寸撫でたのである。すると、之を見た母親は乍ち勵聲一番、

『私の見に觸つて貰ひますまい。あなたの手は汚れてゐる』と叱付けたと。剣さ付けに、彼女の賤業を恥るところが、これぞ西洋人氣質丸出しとても云はうか。

十六日午後九時半頃、時は夜に入つて、日は猶ほ高く、而して車は既に烏拉山中を出た。いよいよ歐露の平野て、ヴォルガ河の平野へ來たのてある。野には樹木稀れに、

ウラル山中

近き山々は代赭色の禿山て、草さへ生えてをらぬやうだ。過ぐる所の村落は、木無きが故に泥土を固めて壁としてゐる。農民は屋前一畝の草花ても栽うるの趣味が無いのて、なほさら殺風景、鶏狀は露出してゐるのてある。但し天然は草花を以て飾られてゐて、鐵路の兩側にも、オウスリップやゴルズが黄に跨る、海紫のゆかりの色は、君

な忘れその愛らしき草花てある。

ヴォルガ河の平原には、韃靼人が多く住居してゐる、彼等はバシュキアと稱せられ、回々教を奉じてゐるのてある。されば沿道の掘立部落で、時に尖塔高く新月形を輝かせたる寺院のあるを見た。

露國の停車場は相も變らず、地方民の散歩場てある、又た乞食の集合所てある。露國式の美人が繪葉書を賣るあり、郎君と手を携ふるあり。併し西伯利亞を通じ、露國に入りては猶更、停車場の構造が、美しくは無いが中々堅固て、規模も立つてゐるやうに見受けた。處々の停車場にポルドウイン式の大汽罐車が幾臺も雨曝しになつてゐる。日露戰役中に使用した貨車が放置してあつて、果ては之を家として生活してゐるものもあるのを見れば、戰爭中大仕掛て兵員を動かす爲に、多大の汽罐車、貨車、乘車を使用した仕末が、人以て付かぬやうだ。

十七日午後サマラ驛に着いた、漁師の婦共がヴォルガ河の名產河鱸の燻製や生を賣りに來た。これは魚類中の最も美味なるものと云ひ、イルタックから乘つた露國軍人て、平素は餘り日本人の側へ來ぬ人まて、手に日本語て、『それよろしい』と吹聽した。彼は食堂で勘定などをやかましく云ふ人、いつても乘合の高價か、但しは彼の俳優と差向のテーブルて大聲に話す。そし

て少くとも、よろしいの日本語を知つてゐるのは、必ずや戰役中に我國のお客樣であつたからではあるまいか。六時を過ぎてヴォルガ河上のアレキサンドル第二世大鐵橋を通過した。モスコウまで五千二百六十一哩の全線は、山野單調なる風景、格別見るものも無くて、而して此橋が最大工事と云ふから、乘客はいづれも、此處へ來るのを今日の朝より待兼ねる、過ぐれば又た見送るのであつた。

これから先の道も、さしたる變化が無く、前に述べた景色を殆ど單調に繰返すのみて、予等は十八日午後八時半と云ふに、此大鐵道の終點たるモスコウへ來たのである。十日半の平凡なる旅程、極めて退屈な日をやうやく明かし暮らし、夜が短かければ、日は暮るゝに遲く、明くるに早く、毎日の永々しさ日を我心でばかり追立つてるやうにした後、モスコウ四百五十寺の緬甸式尖塔が夕陽に映ずるのを見た時は甚だ嬉しかつた。

待兼ねたモスコウへは着いたが、これから當分は愈よ以て啞聾の旅行である。言語は不通、予等はどうすれば宿屋へ迄でも往けるのか、氣が揉めたが、幸に露國留學の中村氏が、大橋氏、一行を迎へに停車場に來てゐられたので、予も爰でロイド氏と互に將來の健康を祈つて別れ、中村氏等に從つて、メトロポール、ホテルに入り、予等の西伯利亞倶樂部は自然解散となつた。

露京の客

半亞半歐の都

モスコウは半亞半歐の都である。露國の舊都であるだけに、スラヴ本來の半東洋的特色が頗る保存されてゐる。其の四百五十餘の金色、青碧、丹黄の尖塔を空に耀かしてゐる寺院は、東洋的なる形態を帶びてゐる。殊にクレムリン舊城の城壁の如き、又たイワン暴帝の爲に、伊太利人が建築するや、暴帝之を見て甚だ麗美なりとし、また之れ類するものを建築すること無からしめんが爲に、其建築家の目を抉り取つたと云ふ慘憺たる歴史づきのサン、バシリ寺院の如きに至りては、遲羅か緬甸にてもありさうな、魚鱗式壁、金米糖式塔より成つてゐて、此等を見ると、ドウも歐羅巴に來たやうな感じが起らぬ。これが露國正教の寺院建築の舊式と稱すべきものなので、モスコウに限らず見受けられる。聖彼得堡でも、サン、イサク寺院、カザン寺院等、ロマネスク又たは希臘式の建築法に成れるものと並びて、又たこの金米糖式がある。

最近に建築された、歴山帝第二世紀念の爲の復活寺の如きもそれてある。

モスコウに來て、第一に目に留まつたのは其寺院てある。次ぎは其道路てある。車道には、拳大より頭大に至る丸石を敷いてゐるので、歩行頗る困難、よつて馬車馬の蹄鐵の如何に大なることよ。

ホテル、メトロポールには、兼て英語を解するものが多いと聞いてゐたが、成程玄關に一人長いトンビを着た先生、しさうと英語を話しかける。玄關の番人、これも少しは分る、マアこれだけだ。然り食堂に猶ほ一人英語の話せる給仕がゐた。宿に着くと第一に旅行免狀を渡せと云ふ、而して出立の時宿賃を拂ふと與書をした免狀を返してくれる。露國のホテルは皆これだ。旅行免狀が無れば一歩も旅行の出來ぬ國、況

サンバシリ寺院

んや國境を出ることなどをや。啻に外國人ばかりか、露國人ても同樣だ。免狀が無ければ銀行ても金を渡さぬ。パスポートは即ち人別帳てある、好い組織かな！　但し甚だ以て煩はしい事てあるが、露國のやうな國のホテルては、食逃げを拒ぐに、最も有効なる抵當を押へて置くのてある。

市街には例のイヅヲシチク(馬車)が、第一の交通機關てある。電車もあるが、予等のやうな言語不通の旅人には乘れぬ。自働車も少しはあるが、あの丸石道路ては發達のしやうが無い。ア、馬車の御者の尻のいかに大なることかな！　彼等が御者臺に坐せば、車中の客人は爲に向ひ風を除けることが出來る。上等な馬車程、まして紳士の馬車になるほど、御者の尻は大なるてある。彼等は長大なる上衣を纏ひ、巧みに身體を膨らせて居る。帽子は張子黑塗てシルクハットを押潰したやうなのを戴いて居る。今戸燒の首振達磨を想起せしむるものてある。以て露國名物の一に算ふべし。馬は肥大輕捷、遮眼をされずに車を曳いてゐる。モスコウても露都ても、公園に肥馬輕車を驅る紳士淑女の、いかに意氣揚々たることかな！

遊仙窟

露國に入つて毛も戰敗國の樣子が無い。戰勝國民の予等が、却つて小さく感ぜらるゝ程に、又た行人が予等を見て、キタイッ（支那人）コレイッ（朝鮮人）と罵りて、ヤポンスキー若くはニッポンスキーと稱するもの極めて稀に、自個が半東洋人たるを忘れて、歐洲人たるを任じて居るほどに、外觀の文明を備へて居る、文明の罪惡にも富んで居る。露國は歐洲第一の借金國、佛國から巨大なる借金をして、それで虛榮を極め、太平樂をやつて居る。モスコウでも、露都でも某々と云ふ大なる料理店があつて、貴顯富人の男女が、夜の十時から、朝の四時頃まで徹夜の宴を張つて、佛國の三鞭酒を飲み、佛國の葡萄酒を浴びて、佛國の借金の利子を拂つた上に、酒代までドシ〳〵送り込んで、而して流連荒暴、淫樂に耽つてゐると云ふことだ。而して乞食は道路に群集し、賣女は最も繁華なる大通りに横行闊歩してゐる。乞食は錢を獲ればウオッカを飲み、農民はウオッカを飲む。ウイッテ氏の酒專賣法は、ウオッカの小瓶を賣り、空瓶を買上げる事にしたので、貧民は一層容易に之と親しむことが出來る。田園は荒蕪する、

それで耕地が狹いから、モット御配分に預りたいと政府に迫まる。虛無黨、社會黨は露國自然の產物なるかな。爰に可笑しい話がある、露國の國會議員は、以前は一度議席に出る毎に、十留を受けたものだが、今日では歲費四千留から六千留を受けるのである。議員が都會に住んで、多少贅澤な生活をすれば、これだけの金では到底不足なのである。しかるに農民議員になると、これまで夢にも見たことの無い大金だから、懷中が急に暖まつて來た譯だ。處で彼等の選擧民が羨み出したのだ。農民が國會議員を選出する第一の目的は、議員によりて政府から多くの土地を得んと欲するのであるのに、國會は未だ彼等農民を滿足せしめない。處で農民等は、今度は選出議員に逼まつて、歲費の配分をなせと云つてゐるとは、他國の議會には見受けられぬ珍狀である。

予等西伯利亞倶樂部の一行はモスコウに着いた當夜、案内に任かせて、何處へ往くのか知らずに、馬車に乘せられて來た所は、モスコウの遊仙窟たるエルミタージであつた。木戸錢一人七十五文を拂つて通れば、廣々とした庭園の舞臺で、踊、曲藝をしてゐる。男女の群集犇々と徘徊し、園中のテーブルに凭つて、ソーダ水や、茶や、ビールを飲んでゐるものもある。而して此處に徘徊する盛裝の女は、殆ど皆遊仙窟の小姐老姐で、甘い御客もがなと八方睨みに秋波

を送つてゐる。食堂内にも舞臺があつて、美人が尻振踊をする。食卓の間にはエルミタージ御抱への美形が右往左往、招く人あらば、乍ち三鞭酒を呼び、料理を命ずる。一席の費二百留は瞬時にして、給仕人の書出に上るのであると云ふ。美人を擁し、美酒を飲んで、美人の踊を見るの露國人、いかにも太平の逸民なるかな！　佛國などでは同種の遊樂場に遊ぶもの〻多くは旅の耻かき捨ての外國人だか、このエルミタージに來るのは、多くは自國人だ。革命黨が騷がうが、大學生が暴動をなして、モスコウ大學の門が長く閉鎖されてゐやうが、爆裂彈が市街に跳やうが、戒嚴令が布かれやうが、トルストイ伯が愛國の聲を叫ばうが、少數者の外には神經を亂されず、依然として遊仙窟は歌舞宴樂の地、巫山の仙女を邀へて爲雲爲雨の華々公子の數を絶たずとかや。流石は大國なるかな、大國民なるかな！　ア、大國民の氣宇の濶大なるが故乎、スラヴ民族の好人物たる雅量の故か、政權は猶乙の血脈を受けたる勢力者の掌中に歸し、商權は猶太人、猶乙人若くは芬蘭人の手裡に落ちつ〻あり、歎ずべきかな！

遊樂の期節を過ぎた夏、殆ど夜無き夏てさへこれだ。而して殆ど昼の無い冬季に至り、凡ての劇場が開かれて、社交季節になると、露國都會の歡樂は其盛を極むるものと云ふ。其榮華の狀は想ひやらるゝのである。社會は益す佛國風にかぶれて來る。そこが即ち露國が歐洲の一大

國たる所以の一か！

皇城の草鞋

予等モスコウ着の翌朝はまた〳〵見物だ。第一に六百萬留を費して建築したと云ふ、ペルフニー、ルヤーヂ勸工場を見た。歐洲に多きアルケード式のものである。其建築（商品、陳列品、乃至店頭の飾付は兎に角に）の壯大なるだけは、歐洲第一と稱せらるゝものである、即ち露國式に莵大なるものなのである。但し其店頭の賣子女が、日中でも、お客さへあり、お金にさへなるなら、店を棄てゝ色々賣ると云ふも、また奇拔ならずや！

予等の足は、基督の聖像を掲げて、燈明を點じたる城門を脱帽一揖して過ぎ、ロマノフ帝室の舊皇城たるクレムリンに入つた。市民は城壁内に馬車を驅ることが出來て、宮殿内を自由に見物することの出來る所などは、露國も頗る歐洲式てある。予等はイワン暴帝の建てたイワン、ベリキ寺院の本堂へ詣つた、其の望遠鏡型の塔にも登つた。此寺院は建築の美を以て稱すべきものては無いが、其堅牢なる事、ナポレオン大帝の砲彈も之を破壞することが出來なかつ

たとて、案内のお爺さんが威張つてゐた。煉瓦とセメントとて固め上げ、殆と岩石を以て築いたかとも思はるゝやうな要塞的建築である。寺院の塔上には、大小數個の梵鐘を吊してあり、又た壁にも、鐘にも、參詣者乃至見物人が落書をしてゐる。落書は人間の本能と見える。寺院内の陰氣な堂には寶石を彫めた聖像が、彼方此方に祭られてある。案内者は特に其寶石を誇示する。細長き蠟燭の燈明は、露國人が迷信てふ無明の闇を照すことなく輝いてゐる。予等は始めて露國の寺院に入つて、先づ此民の迷信を憐むの念に堪へなかつた。

クレムリン城内イワン、ベリキ寺院

宮殿裡に來た、見物人は少からぬ數であつた。其殿舍の廣きと、林立せる大理石の巨柱、大理石の階段、ウラル產の綠石の柱など、我に椽大の筆あらんには、以て阿房宮賦をものせんに、室々の戸の把手にまで、拳大の水晶、紅玉を付けてゐるのは、英、佛、獨の宮殿にも無い奢侈だ。つまり寶玉や建築石材に富める烏拉嶺や、芬蘭を扣へてゐて、人民の膏血を絞つたから、出來た贅澤なのである。

壁に掲げたる名畫の數々、中にも多きカザリン第二世女帝——夫帝を弑して皇位を踐みたる妖婦の肖像は、艶麗妖冶の媚を呈して、ロマノフ家帝統の歴史を語るが如くに思はれた。ゴブラン織の壁、モザイックの密畫、いづれ目を驚かさぬは無い。伊豫君手帳を出して一々其名を扣へると、案内者は鼻の先て手を動かして、これを制した。

若し夫れ宮殿の宏壯なるものを見んと欲せばクレムリンを見よ、又た露都の冬宮を見よ、てあるが、但し皇居の皇居らしい威嚴を備へて、而も建築、美術の點から云はば、英國のウインゾル宮、バッキンガム宮、勿論佛國のヴエルサイユに企及することは出來ぬ。而も禁園無く、樹木さへ稀なるが爲めに、折角の大建築が殺風景に露出してゐる。大なるかな露國の宮殿や、それ徒らに大なり。其の目を驚かすものは、裝飾に金をかけたことてある、石柱の大なることてある、全體は、赤石の寧ろ平凡なる建築てある。而してクレムリン宮の古き部分は、丹碧朱金を塗つた、東洋式の天井の低い建物てある。其一隅にナポレオンの寢たと云ふ古き寢臺があ

つた。

この宏大壯麗なる宮殿を見物する多くの露國人の中には、田舍からモスコウ大本山へ御詣りに來た善男善女らしきがゐた。頭冠をしたお婆さん、髯蓬々たるムジーク老爺が杖をコツ〳〵ついて、藁か草かで編んだ草鞋を穿いたまゝで、案内者に連れられ、帝の玉座までも近づいてゐたのは、頗る異觀だ。此の大宮殿を草鞋穿きのまゝで見物さすとは、これが一番嬉しいでは無いか？　しかし露國は皇居の大なるを示して、帝威の畏るべきを知らしむるものであるまいか。彼等善男善女は、此の皇居の巨大なるを見て、果して隨喜の涙を溢すべきか？　アヽ血に腥きロマノフ家の歴史の大半は、此宮殿に於て書かれたるに非らずや。アヽ隱謀奸譎の府たりし此のクレムリンや！

皇居前には、アレキサンドル第二世の巨銅像が建てられてある。其像を廻る廻廊の天井にはモザイックで以て、ロマノフ家歴代の皇帝の肖像を飾つてある。予等が此の廻廊に休んでゐると、一人の兵卒らしい男が近いて來て、ガラスの小破片に金箔を置いたのを見せびらかし、これは此の天井から落ちたるモザイックの一片だと云つて、賣付けたいやうであつた。素より贋物なり。贋物なればこそ、此帝像を護る、金モール盛装の老兵も、知つて知らぬ風なのではあるまいか。

雀が岡

扨て同日午後、モスコウ郊外なるクリンキン丘、日本人が名けて雀が岡と云ふ所に馬車を驅つて登つた。千八百十二年の九月、ナポレオン大帝が、大舉侵入し來るや、先づ此岡に登つて、砲煙の中から、モスコウ市街を瞰望したと云ふ所で、其狀は、巨匠ヴエレスチヤギンの畫となりて、聖彼得堡歴山帝三世紀念露國美術館に殘つてゐるのである。丘上の茶店で音樂を聞きながら（露國のホテルでも料理店でも、音樂が御馳走だ。異樣の派手な服裝の樂師が雇つてある。）河を隔て、野を隔ててモスコウを望めば、他の大都會に於けるが如くに、煙突の林立せるを見ずして、寺院の尖塔の日光に映じて、モスコウが寺の都たる光景を一望瞰

下に展開してゐる。而も予はそゞろに昔の那翁になつたやうな氣がした。

胡瓜の畵

六月廿日は聖彼得堡へ出發する日であつたが、前日即ち十九日の夕刻、予は伊豫、五十嵐の二君と共に、繪葉書を買はんが爲、ブラ〳〵宿屋を出かけると、門番が馬車を呼んだ。予はニエット〳〵（否々）と云つたのに、二臺の馬車は頻りに尾いて來て、予等を挾んで乘れと云ふ、相變らず、ニエット〳〵を振廻して歩くと、一臺の小僧御者が遂に巡査を呼んで、何か訴へたらしい。巡査は笑ひながらに予の前に來て、何事か云ひながら、馬車に乘れと指さしするが、言語不通だ。メトロポールと宿屋の名を云つただけは通じた。予は御者の無禮者奴と、乍ち踵を轉じて、ホテルを指して歸ると、二臺の馬車は依然としてノコ〳〵尾いて來る。予は玄關番に、彼等の無禮を訴へ、巡査まで呼んで乘らせうとは、一體ホテルでは何と思ふのだ、それても可いのかとやつ付けると、玄關番先生、乍ち門前に出て馬車屋を呶鳴り付ける、門番の不行屆を責める、但し何と云つて叱り付けたのか、それは僕等の解し得る限で無かつた。彌次

馬の獨逸人が出て來て予に何か喋る、其も分らぬ、何でも御者にイクラか金をやれと云ふのらしかつたが、横着者に癖になると思つたから一文もやらない。御者はヒだグド〳〵云つてゐると、玄關番はポッケットから帳面を出しかけた。御者の鑑札を取上げて、ホテル附の株を奪はうと嚇かしたものらしい。すると御者は乍ち青くなつて、自分の馬車に小さくなつて退却したは、予等が外國に來てからの一大滑稽であつた。露國の馬車は外國人と見れば、乘せておいて賃錢をねだる、停車場の擔夫にも其風がある。其時には大聲で威かすか、ステッキでも振り廻さうものなら、それなりけりに退いて仕舞ふと云ふことだ。

二十日の朝はルミアンスカヤ博物館に、露國派古今の名匠の筆に成れる大畵の集まれるを見た。また歐洲の名畵の模寫もある。そして由來音樂に卓絶せる露國に、又た美術の盛んなるものあるを羨んだ。勿論、獨、佛、伊の美術館や、英京の諸美術館には迚に劣つてゐるが、それても露國は世界に誇るべき名畵を產してゐる、名匠を輩出せしめたのである。

歸途に例の大勸工場へ往つた、少の買ひ物をしてゐる中に、同行は二つに分れて互に見失つた。予は伊豫、五十嵐二君と殘つて、中村君が居ないから、聾と啞の三人連、それでも手眞似と金とで買物を濟まして、扨て晝飯を食はうと云ふ段になり、昨日一行と共に往つた料理屋に

入つて、やうやく魚とビフステキとは注文が出來たけれども、昨日も胡瓜を食つたから、今日も食ひたいと云ひ出したがお笑ひの種よ。予が英語でキウカンバーと云つても給仕に分らぬ。獨逸語か佛語で云へと云ふ。他の二君は獨逸學者なれども、生憎胡瓜の獨逸語を忘れた。だから物にならぬ。僕も『グルケ』を思ひ出せぬ。でも一旦云ひ出したからには、ドウあつても食ひたい。それで五十嵐君は遂に胡瓜の畫を描いて見せると、給仕乍ち合點し、露語、佛語、獨逸語で胡瓜の字を敎へてくれたが、直ぐに忘れた。でも胡瓜だけは食つた！

此夜九時半ニコライ停車場から露都へ向けて出發するになつて、イザ立たうとすると、祝儀欲しやのホテル召使連中、凡そ一ダスも、室の前に往來してゐる。其上玄關番も門番も心附を待つてゐる。一體露國は心附の高い國だ。外國人だからサウなのでもあらうが、到る所で取られる。序に申すが、露國の宮城見物には、伯林のやうに入場料こそ取らぬが、其代り案内者には一々心附をくれねばならぬ。それが比較的高い。露國は祝儀の高い國で、料理屋でも、食つた勘定の二割乃至二割五分を祝儀としてくれる。冬になると外套や上靴を預るものにも一々多少はくれる。すると早い話が、茶店に入つて、一杯の茶を飲むとする、其代價は十コペックとすると、給仕人其他の祝儀が其三四倍に達するのである。だから露國を經て來ると、獨逸や英

國では、祝儀の安いに、初は一寸妙な感じをする。電車の車掌にさて祝儀をくれる獨乙、和蘭でも、露國ほどにチップは入らぬ。

予等六人の日本人は、彼のニコライ一世が、露都よりモスコウの間に、地圖上一直線を劃して敷設せしめたと云ふ、八百哩の間一直線の鐵道を走つて、午前九時半すぎ聖彼得堡に到着し、ホテル、ド、ユーロープに入つた。

遊樂の地

六月廿日即ち露曆六月八日は日曜日に當つたが、ホテルに一旦落付くと、同行六人て日本大使館を尋ねた。本野大使は歸朝の途に上られた後で、二三の書記生に會ひ、而して明日冬宮拜觀の切符を貰ふことを依頼した。露國式の紅茶にレモンの一片を投じたものを御馳走になつた。玄關番の金モールを付けた露國老兵には、二留のチップを與へた。大使館の玄關番にまで祝儀とは流石に露國式だ。

午後には、一行六人て、ホテルより乘合式の自働車を賃して、ネヴ河口のデルタの一なる島

の公園に遊んだ。殆ど自然の儘なる林間に、立派なドライヴがあつて、淑女紳士が自働車を駆る。達磨式の御者の御尻て、風を拒ぎながら、輕車肥馬轔々たる淑女もある。河上に船を繫いて、料理店となすものもある。林間草地は能く手入が屆いて、堂々たる一大公園、市民が市街の熱閙を去りて、數時の散策をなすに宜しく、富人の贅澤心も滿たされる。若し夫れ白雪滿都を埋むるの時、橇車を此公園に驅るの快は幾許ぞや。聖彼得堡には、此他夏の公園はじめ二三の大小公園やスクエアがあるけれど、殆ど稱するには足らぬ、而して、露都の最大公園は、島の公園では無くて、却つてネヴの本流及び支流と其兩岸とである。都會の中央を流るゝ其水や清くして舟を浮ぶるによろしく、堤上は樹木蒼蒼として、綠影水に映ずるの佳景、これは巴里のセーヌに優りて賞すべく、やゝ倫敦テームス河の上流の風光に似てゐるところがある。

予等はまたニコライ第二世人民館へ往つた。聞く處ては此の人民館は禁酒會員が發起となつて、下層人民に清き快樂を與ふるが目的て、淺草の奥山風に設備したものてある。十文の入場料て、手品あり、踊あり、玉轉がしあり。射的あり、酒は嚴禁して、十文て茶と菓子とが食へる、同じ價で輕便な食事も出來る。また多少の金を出さば芝居も見える。それて下等民が來る來る。日曜日の夕刻になれば、波を打つて入場する。下女は兵卒と手を引き、子守は職人を携へ、夫婦は子を引いて來る。女は流行遲れや、店曝しの安衣服、それも配合が野鄙て、人柄ソックリなのに、孔雀を擬ねる烏のやうに、鍍金のブローチ、腕輪を飾つてゐる。納屋とも見ゆる舞踏場には、此種の男女が、二人宛組合つて輪になり、奏樂に連れて踊り廻る、これが西洋の盆踊て、頗る振つてゐる。西洋人は何處までも踊の好きなる人種なり。

此の人民館設立の目的は上述の次第てあるが、今ては下等地獄が多く出沒徘徊して、此て痴客を捉へ、場内は禁酒なれども、更に他に走つて一夜を淫酒に明かさしむる、其爲の一媒介所の觀ありとは、創立者の遺憾思ふべし。人民館に隣りて、動物園あり、これも亦た、やゝ上等な、入場料の高い遊樂場て、女郎もまた之を一巣窟とすと云ふ。

人民館に接して、國事犯人の監獄がある。ネボカドフ等降將は、この内に幽閉されて、逸居してゐた。禁錮されてゐるのては無くて、寧ろ氣樂に其日を送つてゐると云ふから逸居だ。彼等は近き人民館の樂聲歡呼を聞いて何の感があるだらう。監獄に接して、ペトロハヴロフスキー要塞内にサン、ピエールに及びサン、パウロの二寺院がある。其一はロマノフ家歴代の遺骸を安置してある處だ。之に隣りてネヴ河上の砲臺がある、戰役中、冬の河祭に、實砲を冬宮に撃ち込んだは、この要塞からてある。要塞は即ち河を隔てゝ冬宮に面す。

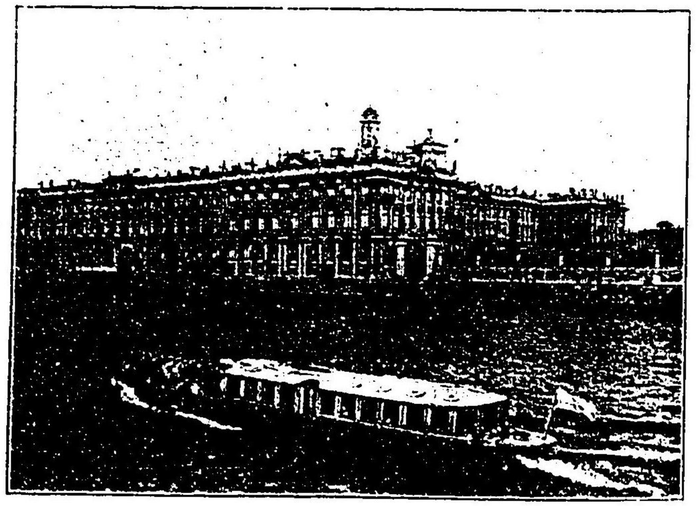
冬宮拜觀

二十一日には午前から、冬宮の拜觀に出かけた。外務留學生成瀨君は予等の爲に通譯の勞を執られたのである。冬宮は、ネヴ河に臨み、名詮自稱の露帝が冬の御殿である。

途アレキザンドル第一世紀念の巨石柱碑上、天使十字架を捧ぐる銅像を安置したのを見て過ぎた。この巨柱は芬蘭土に產するとか云ふ赭色石一本で、實にすばらしく長くて壯大なるものである。丸石を舗いた廣庭の中央に嶄立し、周圍には官衙が窓を並べてゐる。此の廣庭の一角なる巨穹門を過ぐれば、やがて冬宮の正門に達するのである。冬宮の建築は例の赭色石を用ゐてゐる。露國式の建築は赤いものがお好きである。其裏面はネヴ河に臨みたる街路の人道に接し、宮殿の窓の下を、平民でも乞食でも、乃至虛無黨でも往來するのである。この宮殿には庭と稱すべきものが無い。從つて木も花も無いのは、モスコウ府のクレムリン城と同じ。これは露國が寒國だから、樹木養成が困難なためかと思へば、公園や、スクエアのやうな所には、木も草もある。推して見ると露國人は花卉草木に對する趣味に缺乏してゐるのであるまいか。兎

に角露國宮殿の赤裸々――實に赤くて、一樹の蔭の之を蔽ふことも無く、裸々と露出してゐるのは、僕等の目には殺風景だ。

予等は冬宮の裏口より通行を許されて、大理石の階段を登り、宮殿附の案內者に連れられて公衆に許されてゐる處、皇帝謁見室、會議室、公堂、私室、寢室等、廣くて數多き室々を參觀した。其間凡そ案內者が三四度は代る、順次に送られる、而して案內者の代る度に、一留ぐらゐの心附を要するのである。夫れ冬宮內、大理石の巨柱、巨壁、天井の繪畫、壁畫、モザイック、コブラン織、巨匠の繪畫、歷代の皇帝及び宰相の肖像、凡て其裝飾の美麗目を眩するもの、一々擧げて云ふことは出來ぬ。予も其細か



ネヴ河上より冬宮

いことは、數十室を見て廻る中、片ッぱしから忘れたのである。只だ紀念に深く印せられたのは、アレキザンドル第二世の臨終の御居間である。この室には特別の案内者が附いてゐて見せてくれる。室内の裝飾、机上の整頓も、同帝在世の日の通にしてあるとかて、而して机上の時計は、皇帝が今や復活寺の在る所に於て、虚無黨の爆裂彈の爲崩御せられた時刻を示して止まつてゐる。繰出暦表は千八百八十一年三月十三日と出てゐる。弑害に逢はれた時の吸ひかけの紙卷煙草は玻璃管に保存してある。其折召されてゐた外套もある。案内者は一々此等の遺品を手に取上げて、さも珍世界の展覽品なるかの如くに説明する。室の一隅には皇帝御最期の寢床がある、頗る粗末なベットてある。要するに露國宮殿の寢室は、至つて狹隘且つ質素なるやうに見受けられたが、其防備は至つて安固なるものとか聞いた。而して此悲慘なる臨終室を去る時には其案内者に別の祝儀を與へるの必要があつた。

彼方此方の大廣間の壁間、殆ど空隙の無いばかりに、黄金の大皿と小箱とが飾つてある。これは歴代の皇帝、皇后の祝節に、皇族、大臣、貴紳が、皿にはパンを盛り、箱には鹽を容れて献上したのを、かく飾付けて置くものだ。案内者予等を顧み此の許多の金皿を指して曰ふに、露國は日本に負けたが、決して金が無いからては無い、此等を見よと呵々一笑した。或る廣間

ては、白銀金モールの番兵が、ッカ〳〵予等の側に來り、成瀬氏を介して、日本は露國の敎師である、自分等は元より戰爭を好ま無かつたのだが、此度の事て、我國は大いに益を受けたと云ふ。露國人は太ッ腹と云へば太ッ腹、又た中々の愛嬌者て御世辭が好い。但し、彼等は此冬宮の巨大なることが大の自慢て、日本人と見れば、日本にも此程大きな宮殿があるかと聞くのが例である。僕等の答へは、これても露國の宮殿の中に算へるのてあるか、日本にて宮殿と云へば、冬宮のやうな小さなものて無いと吹いてやつた。

廣く長き廊下は、彼方此處に通ず。其壁上には大繪畫を懸け並べてある。多くは露土戰爭の畫なり、露國勝戰の畫ならざる無し。日露戰役の繪畫は見當らず、否僅に一幅を掲ぐ。これはミスチエンコ將軍騎兵隊逆襲の圖である。露軍殆ど唯一の勝利(?)てあるが故に、之を描いて此に保存するものであらう。案内者は艦隊遊戈の一圖を指して、此中數艘の軍艦を貴國に奉納したる名譽の將軍は、今や此冬宮と河を隔てゝッヴィ其向ひの監獄に投ぜられてゐるとて笑ふ。意はネボカドフ將軍等を暗示するものであつた。

予等は此の大宮殿の略ぼしを拜觀し、冬宮の概觀を得たる後、案内者にチップを與へて袞を辭した。

露國の宗教

露國は標榜して基督教國と云ふ。成程其國からして豪い宗教家も生れたらう、異端とは云はれてゐるが、トルストイ伯のやうな熱烈な宗教家もゐる。しかし國教として立てられてゐる正教會が、其國民と國家との上に、實際ドレだけの感化を及ぼしてゐるか、これは長い研究を要する問題である。唯だ予等露國一見の客から評すれば、露國は實にえらい宗教國だ。基督教は迷信に流れ、形式に陷つて、人民は之に惑溺して、多くの資財を寺院僧侶に吸收されてゐるやうな感じがして、寧しろ哀れむに堪へなかつたである。天理教が國教になつたら、こんなものになるのでは無からうか。何處の停車場でも、聖像を祭つて、燈明が上げてある。ホテルの室室にも其の隅には基督の畫像がかゝつてゐる、恐らく女郎屋にも賭場にもあるだらう。市街の此處彼處にもある。モスコウの寺院四百五十と云ふが、辻や通の小な御堂を合せたら、其數は算へきれぬだらう。露國は到る處斯うなのである、寒村僻邑でも一番立派な建物は寺である。これでも基督教國だと云ふのだらう、頗る妙だ。道を行く男女が、御寺の前で、顔の所で十字

の印を切る。馬車が御寺の前なりを通ると、馭者も十字を結ぶ。車中の客もする。寺詣での人、これは淺草の觀音と同じことで、女が多いのだが、畫像の前に跪いて祈念する。細長い蠟燭を上げる、長髪長衣の坊さんから、御水を戴く。又た畫像の足下をガラス越しにキッスする、坊さんは後から廻つて、其キッスの跡を拭ふ。

淺草の觀音樣は一寸八分でも、黄金佛であるから、奈良の大佛よりも難有いと云ふが、露國の宗教（と云はうか寺院と云はうか）は、珠玉の燦爛たる聖像を誇りとするものだ。先年一人の教育ある露國婦人が東京に來た時、駿河臺のニコライ堂を見て、此寺院にはダイヤモンドが無いから難有く無いと云つた事を覺えてゐる。露國の信者は乃ち此徒なのであるやうだ。彼等には御佛の光とは、聖像を飾る無數の金銀、ダイヤモンド、紅玉、眞珠の光なのである。

予は露都第一の大寺院と云へる、サン、イサク寺を見た。建築學上からは、ロマネスク式とか云ふものであらうが、美術に暗き予には、左樣の事は少しも分らぬ。たゞ其建築の宏大なると、石柱の如何にもすばらしいのを見た。金壁、モザイック及び壁畫の爛熳たるを見た。彼方此方の柱の下にガラス箱入りて、横に置いてある基督の畫像には、金銀の後光を戴かせ、拇指大の金剛石の白毫や、金剛石、ルビー、眞珠等の頸飾、服飾の燦爛たるに驚いた、そして露國

露都サンイサク大寺院

は如何にも寶石の廉いところかなと思つた。或英國人が、露國人は金の使途を知らぬ無いと云ふたが、かゝるものを見ては、いかにもサウとしか思べぬ。一隅には基督の柩(?)に擬したものがある、其上には基督の寐像が描いてあるのゞ、案内者が見物人を階子に登らせて見せる。其前には基督の戴いた荊の冠と云ふものが、ガラス入になつて飾つてある。頗る巧妙に出來て

ゐる。猶太の昔にこんなものを用ゐたらしくも無い。

堂内の一隅には種々雑多の名目を附した寄附金箱が、山のやうにある。祭壇の前を見ると、二人の若い婦人が、若干の御賽錢を上げたものと見えて、青地金襴の法衣を着た長髪の僧が二人出て、祈禱文を讀む、聖書を朗讀する。一人の平服を着た男は、キョロ〳〵ウロ〳〵他用を辨じながら、鼻歌式に讃美歌を唱へてゐたのは、あまり難有くも無かつた。婦人は始終跪いてアーメンを連發してゐた。御祈禱が濟むと、御水を戴き、畫像の足下にキッスして祭壇を退いた。小娘が、背延びして、一々畫像にキッスして廻るのも見た。

カザンの大寺院にも詣でた。之は結構から云へば、サン、イサクよりも更に宏大なるの稱があるものだが、裝飾は劣つてゐる。門前には寺院免許の乞食が奉加をねだる。堂前には一ダス許の黑衣尼が、何か唱へながらこれも御奉加だ。露國の御寺は安くは見られぬ。案内者には一心附だし、寄附金箱にも多少入れねば外國人の顔が立たぬやうだし、乞食にもくれねばならぬのだ。

露國皇室歷代の墓所たるサン、ピエル寺院内に入つて見たが、祭壇の前に、あまり器用で無い大理石のサルコファガス(石棺)が陳列してあつて、そして僧侶が案内料を貰つて、これはペ

ートル大帝これがカザリン女帝、これがアレキサンドル第二世だと指して廻る。

ネヴ河畔にあるペートル大帝の舊殿も訪れたが、これは三間に五間位の粗木造で、今日は、この家を蔽へる小家が建つてゐる。ペートル帝自製の椅子、書棚、又たボートなど昔のまゝに保存されてゐて、當年の英傑を偲ばしむるに足つてゐたが、其家の一室は、又た例の御堂で、金剛石の燦爛たる聖像が燭光に映ずる。參詣人がキッスした跡を番人が拭つて廻る。アレキサンドル第二世紀念の復活寺は、同帝の弑害に逢うた場處を紀念する爲に、最近に出來上つたもので、これに巨萬の資と幾多の年月とを費やし、建築委員長の某皇族が女俳優買ひをして、金を使ひ込んだとか云ふことだが、建築の美なることは一しほだ。予の往つた日は、坊主の休日とかて、鎖されてゐたが、外壁までもモザイックの宗教畫で美しく飾られてゐる。

露西亞は實に宗教國なるかな、日曜日の他に、諸聖人の祭日が、一年を通じて百日位ある、皆な休日だ。僧侶は入寺の日から一切頭髮を刈り、髯を剃ることがならぬのだ。アヽ露國に此の宗教とウォッカとが無かつたなら、其の進歩發展は、なか〳〵以て今日の如きものては無からうに！　素より此宗教はペートル以來、其虐政を以て國民を統一にするに與つて大いに力があつたらう。之を軍隊に施しては、兵士を死地に冒進せしむる爲の、強大なる刺戟となつたら

う。人民を愚にして、知らしむべからず、由らしむべしには、屈强の利器てあつたらう。されど今日に迨んて、なほ其舊型を維持し、之を迷信的に人民に布くを以て、國家の政策の一となせるは、中世紀思想に據るものて、露國將來の發達を阻害するものてある。

不夜の都

六月廿二日の午後、予等は相携へて、ノヴワヤ、セレブニヤの博覽會場に赴いた。此博覽會は、ネヴ河支流の岸に建てられて、家具、建築用具及び裝飾品の陳列を目的とするものてあるさうて、まだ本式に開場されてはゐなかつたが、見物人は夕刻から集つて飲食し、音樂を聞き、女郎を見るのだ。對岸のクリストスキー遊樂場には、寄席あり、樂堂あり、又た例の怪しげなる女が、人毎に秋波を送つてゐる。夜風が寒いので、予等は有名なアクワリアムへは行かなかつたが、これもクリストスキーと同種のもので、いづれも小遊仙窟てある。

歸途はネヴ河を小蒸氣て溯つた、時刻は既に午前の一時を過ぎてゐたが、夏至の日の事とて、高緯度の此地には全く夜が無く、何時日が暮れて、何時日が出たのか分らなかつた。おまけに

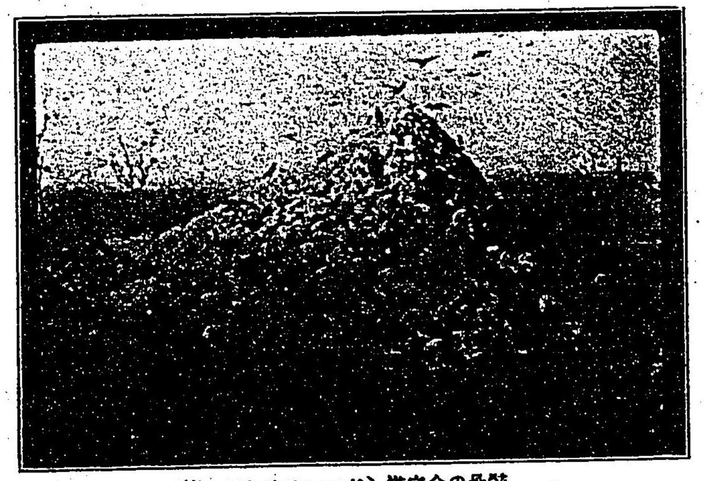
風が寒くて、予等は厚地の外套を着てゐるのに、なほ頭へ上つて、ホテルに歸つたのである。季節が不夜であるのみならず、徹夜歡樂する此地は實に不夜の都である。

畫傑ヴエレスチヤギンを弔ふ

露西亞は新國である。スラヴの夷人が冠冕を着けてゐるのである。其發達は僅に二世紀間の事であるが、其地が歐洲の諸國に接してゐるので、其文化の影響を蒙るに便なれば、偉大なる文學も興つた。其音樂は、スラヴの天稟によりて大いに發達してゐる。而して繪畫彫刻に至りても、他に優越したる名作を有してゐる。第十九世の間に、彫刻家には、アントコルスキーあり、トルーベツコイあり、畫家にはルジエビンやセロウや又たヴエレスチヤギン等の巨匠が生れた。宮殿に處狹きまで掲げられてある繪畫を見よ。カザリン女帝、アレキザンドル帝の銅像、又たはピーター大帝騎馬像の如きは、他國に稀なる巨作である。寺院を飾る壁畫、モザイツクの類は、色彩畫風が派手過ぎて、予には厭味であつたが、それでも露國が如何に美術を奬勵して、國人の思想の表現をなさしめ、以て國家の裝飾を麗美にせんとしてゐるかゝ知れる。露

都のエルミタージの美術館も亦た歐洲有數なるの稱がある。而して、アレキザンドル第三世紀念美術館は露國の名匠の作品に限りて集め、陳列品二千三百五十八點、其作家三百九十餘人と云ふ。予は此美術館に赴いて、スラヴの夷人が急進して美術國民となりつゝあるを羨ましく思

彼得大帝騎馬銅像



（筆ンギヤチスレエヴ）塔字金の骨骸

つた。而して此美術館に於て、予の特に一見せんと欲したのは、近代の名匠なり思想家として欣慕するのみならず、旅順の役に、マカロフ提督と其悲慘な最期を共にしたるによつて、吾人の同情を惹くこと大なるヴエレスチヤギンの遺畫なのであつた。彼は好んで戰爭畫を描いた、然るに彼は平和主義の人て、戰爭畫の無韻詩を以て、戰爭の恐るべきを說法したのてある。彼が大名を成したプレヴナ戰爭畫、骸骨の金字塔等は、モスコウの一寺院に納まつてゐるのだが、此美術館內、二三の室を占めたる彼の作品中、其主なるものは那翁露國侵入の畫てある。クリンキン丘上砲煙の中に、モスコウを瞰下する矮軀の那翁、クレムリン城內の那翁は此英雄の昔を偲ばしめ、雪中退却の圖、

猛鷲の餌食となれる兵士の死骸の畫などは、予をして悚然たらしめた。又たヴエレスチヤギンが、日露戰役前、日本に遊んて、日光其他の風景をスケッチしたのは、彼を弔ふべき絕筆となつて掲げられてゐる。彼の肖像には、椰子の葉を飾りて彼が名譽を表し、また黑布を附けて、其非命を哀悼してゐるのである。

ワルサウの赤毛布

啞の旅行は心細くて不自由なるものなる事は、露國に來て、シミ〳〵覺つた。後ては笑話の種になるやうな赤毛布的の失敗も、其の當時の心地は至極眞面目で、笑ふどころの騷ぎては無い。予は伊豫、五十嵐二氏と、二十三日の夜、伯林に出立せんため、露都ワルサウ停車場へ往つた。切符は既に萬國寢臺車會社で買つた。しかし荷物を預けるになつて、ホテルから附いて來た男は英語が分らぬ、手荷物を渡した擔夫は何を喋るか通ぜぬ。たゞワルサウ、ベルリンとだけ答へてゐた。やうやく獨逸人て同車する英語の分る人に逢つて、色々聞きもし、通辯もして貰つて大きな荷物をチエッキし、小さな荷物は車室に入れさせて、先づはタイした事も無く

て露都を後にした。

翌日の午後九時、ワルサウ近くになつて、初めて彼の英語の分る獨逸人から、停車場に着いたら、伯林行きには市の他端にあるベリンスキー停車場まで、馬車が往かねばならぬのであることを知つた。彼は下車したら馬車を傭つてやると云つて、ワルサウ停車場に來て見ると、入口で巡査が一々馬車の番號札をくれた。彼の獨逸人は予に一つ貰つてくれたまゝ、自分はサッサと馬車を驅つて往つて仕舞つた。

三人で手提の小カバン數箇を積んだところで、馬車が大きいから、一臺あれば十分なのに、五十嵐君も例の番札を貰つたものだから、馬車が二臺用意された。一臺で良いと喋つても手眞似でも、素より通じない、一臺はサッサと荷物を積む、一臺は乘れ〳〵と云ふ。ガヤ〳〵云つてゐると巡査が來る、言語互に不通、少し獨逸語を使つて見ても駄目だ。仕方が無いから、二臺で、一臺は荷物だけにし、一臺には三人が乘ると、ゴロッキ然たる男が來て、荷物の方に乘る、何の爲だか分らぬ。通行人の中から少し英語の分る人が出て來て、話をしてくれて、やうやう馬車は動き出したが、ベリンスキー停車場に着くまで、夜中ではあるし、何處へ連れられるものやら、ヒヤ〳〵してゐたが、來て見ると、事は又た面倒になつて來た。自分等は寢臺車

に乘る積でゐるから、五十嵐君が改札係に獨逸語で其事を話したが通ぜぬ。乘客連が珍しさうに寄つて來る。獨逸語の巧な老紳士がしきりに五十嵐君に聞く。寢臺車の切符を見せると、これは駄目だ、別のがあるかと云ふ、それは無い、話は少しも要領を得ぬ。予は氣が氣で無い、誰か英語の分る人は無いかと尋ねるが見當らぬ。集つてゐる人も、英語の話せさうな人を探してくれてゐたやうだ。予は例の獨逸人は來てゐさうなもだと探して歩く其中、馬車屋は來て馬車賃をくれと云ふ。三留やると、五留くれとねだる。荷物の番に乘つたゴロッキには一留くれたのに、まだねだる。氣が苛立つてゐる時だから、馬車屋に見幕を見せて、渡した三留の紙幣を引きたくるやうにして、突き飛ばすと退つて仕舞ひ、ゴロッキにも『馬鹿野郎』と呶鳴りつけたら、其見幕に駭いたか、何處かへ見え無くなつた。

彼の老紳士や改札係の方は五十嵐君に任かせる、伊豫君が悠々と繪葉書を買ふ。予は停車場内を右往左往して、やうやく彼の獨乙人を見付出した。段々話すと、初めて此處の苦情の原因が解つた。露都の會社では何の説明も與へ無いから、予等が唯だ只だ伯林までの寢臺車を買つた氣でゐたのに、賣つてくれたものはワルサウまでなのである事が知れた。獨乙人は信切で、此處から國境までは別に寢臺を買ふが宜い、國境から先は獨乙列車に乘換へるので、朝にもな

るから、最早寢臺の用は無いと敎へてくれた。それで萬事如斯くに明瞭となれば、是までの心遣ひも消える。早くそれと分れば、この停車場中へ赤毛布の廣告をせずとも濟んだらうに、言語不通の旅とは、さて〳〵苦々しいことのあるものかな。先づ事が分つたから、白前垂に乘車切符と金とを渡して、寢臺を買はすことにした。

事が落着いてから、四十恰好の婦人、獨乙人らしく、學校敎師かと思はるゝが、僕の側に來て、流暢な英語で、言葉が通ぜぬため困つてゐられるとの事だが、何か御力になりませうかと云つた。予はイヤ萬事分りました、御信切難有うと丁寧に禮を述べたので婦人は去る。後に又た予が待合處邊をブラ〳〵してゐると、彼婦人またもや予に言

ワルサウ市街

葉をかけ、まだ何か不明な事が起つたかと尋ねてくれた。旅中の不便に困つてゐるときに、信切な言葉をかけてくれる人があると、實に嬉しいものなることは、此の婦人に會つて、一しほサウ感じたのである。

處でまた氣を揉むことが起つたのだ。予等三人ながら、餘りのドサクサに、切符と金とを預けた白前垂の番號をスッカリ失念したことだ。其男の顏にも判然と見覺えが無い。氣付いて見ると、サア一事件だ。五十嵐君は此男らしいと思ふのに、手眞似交りにビレー、ビレーとやつたが、ニエット〳〵だ。一方ならず氣を揉んで、其時丁度兩替店に現はれた男が、英語が分ると云ふから、近寄つて事情を話す、白前垂を二三人引張つて往て、聞いて貰ふ。すると五十嵐君の見當を付けた男が、ニコ〳〵と自分の墓口を開けて、切符と金とを見せた。先のニエットは、まだ時間が來ぬから寢臺は買へぬとの、深長にして簡單なる返辭とは、やうやく解つて、あまり馬鹿々しさに五十嵐君も腹を立てたが、つまり三人が揃ひも揃つて間が抜けてゐたからだ、お笑止さまよ！

寢臺も買へた、これで時間さへ來れば、列車で一休み、伯林まではドウにか往けさうだ。ワルサウの赤毛布たるもの、祝杯を擧げざるべからずと、三人食堂に駈付けて、ビールを抜く、

ウイスキーを飲む。予は此時また側に食事をしてゐた彼の婦人に、改めて厚意を謝し、言語を知らぬ國への初旅の、いかに不便にして、又た意外の滑稽を演ずること多きかを笑つた。

午後十一時四十五分遂に此のワルサウを發車した。翌朝即ち二十五日の早朝に國境アレキサンドロオ停車場に着して、獨乙列車に乗換へた。其際チェッキした予のトランクが移し載せられるのを見ると、革紐が一本紛失してゐる。露都より此處に來るまでに、列車内で盗まれたのだ。着服したものは云はずもがな。托送の荷物すら紛失し易く、その紛失を訴ふるとも、驛員でも警官でも、それは持主の不注意だとて相手にし無い、此の露國の汽車中で、予は幸にこれまで一物も失は無かつたのに、遂に革紐一本を露西亞帝國へ置土産に取られたのである。

獨乙の十日

伯林まで

獨逸國々境トルン驛にて、税關檢査があつた。室内の荷物は例によつて、官吏がズイと其儘、目を通すだけだか、チェッキしたのは、驛内檢査所の臺の上に並べられる。僕は一乘客の注意によつて、小使か雇員かのやうな男に、大枚金二十文を呉れると、トランクを開けるか開けないで、直ちに檢査濟のマークを附けられた。

人爲の國境線を左右に分つて、一は露國となり、他は獨逸となると、國情が俄かに一變してゐるやうに感ぜらるゝのである。殊に著しきは田野村落の狀態の相違である。露國には荒地多して、村落また窮乏の狀を呈してゐるのに、足一たび獨逸に入れば、田野は廣く耕され、村家の建築と云ひ、農民の樣子が、何となく裕かさうに見える。自然に打勝ちて、砂地に森林を營み、磽土に五穀を植うる、獨乙國民が勤勉の精神は、其山野に磅礴としてゐる。

有名なドレフユー大尉軍機漏洩事件の時、佛國民は彼の肉を喰はんとまて怒つて、而して他國人は多く斯人の寃枉を憐んだ。すると佛國人はピリニース山脈を境して、善惡の標準が異なると歎じたが、歐洲の地、廣袤三百八十万平方哩の間に、二十餘の小國分立して、政治を異にするのみか、善惡の標準は知らず、其風俗習慣まて、ピリニースの險ならざる、人爲の堺線一つて、大なる徑庭を示し、この交通自由なる世に、なほ封建時代の藩國の狀態を守つてゐる。殊に露獨の政治的堺線は、又たスラヴ及びチユートニック二大種族の人種的堺線となつてゐるから、高さと深さとは天空地底に達すとも、幅は零數なる國境を越ゆれば、國情風習の大差を見るも當然か。

露國人は檸檬入りの紅茶を飲むだけ、それだけ多く獨逸人はビールを飲む。一たびトルン驛に着し見よ。フラットフォームの一隅には、生ギール栓賣りの臺が出てゐる。グラスに注いて車窓の前を賣り歩くものがある。更に食堂内に入れば、いよ〳〵以て獨乙がビール國たる現象を示してゐる。而して其ビールは本場だけに甘いのは、云ふにや及ぶ、昨日までゐた露國のそれとは大いに異つてゐる。また制服好きの獨逸は、停車場を巡視する警官、兵卒、または税關吏、列車の車掌によつてまて著しく代表されてゐる。警吏の燦然たる兜のいかに嚴しきよ。車

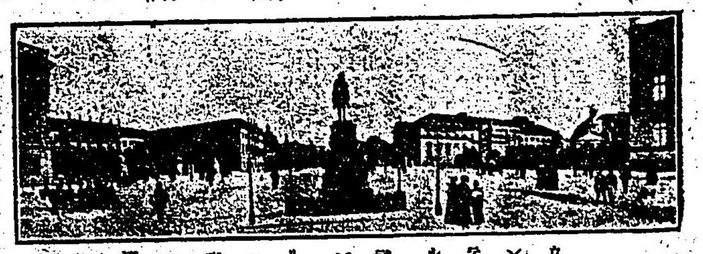
掌まて金モールを光らせて、何の何樣かと拜まるゝ。獨逸の下等社會の女、殊に下女が理想の男とは制服着用の人、兵卒、巡査は無論、郵便配達夫でも嬉しがるのだとは、制服國の難有さか。拙な畫でも金緣で光る、制服國とは、其金緣を貴ぶものなのである。

伯林一見

六月二十五日正午伯林フリドリッヒ街停車場に着くと、友人首藤中佐に迎へられて、予等は日本倶樂部に入つた。中佐は纔か其の前日に、バルカン半島及び土耳其への旅行から歸つたところで、予のモスコウから出した書面を見て、かくは迎へに出たのである。それて予等は運が好かたので、さも無くば不案内な獨都て、一寸途方に暮れるところであつた。先づ日本食の蹉餐て、久し振りの美味だ。但し其日本食たるや、至つて書生風な調理法だが、珍らしいから甘い、甘いやうな感じがする。それて貴顯紳士も伯林に遊べば、此の日本食――本國にあるなら、コンナものが食へるかと却けて顧みない此の料理て舌鼓を打つのてある。扨て又た日本倶樂部ては、多くの日本人にも會つた。後一睡して露都以來の疲勞を散じて、其夜は伊豫、五十

嵐の二氏と共に、凱旋門下を通じてウンテル、デン、リンデンの大通を散歩し、リンデンの若木の蔭を行き、兩側の店頭を覗き、これてドウやら伯林に來てゐるやうな氣がした。これより伯林に滯在すること約十日、殆ど毎日首藤中佐の東道で見物に廻つた。

歐洲での第三位にありと云ふ動物園は、名はこれも動物園と稱して、其實人間より外の動物は徘徊せぬ公園に接してゐる。其結構はタイしたものと云はねばならぬ。象舍が印度のパゴダ式、駝鳥舍が



ウンテルデンリンデン通

*古代埃及式と云つた構造で、動物も隨分贅澤に飼はれてゐる。殊に興味多く感じたのは、象などの家畜を家畜らしく取扱つて、鐵鎖で縛することもせぬことだ。象舍の中で、園丁が掃除する傍に、象が長鼻を垂れて悠然と遊んでゐる。見物人に鼻を差向けて、餌を求めるからして可愛い。河馬の如きすらが、鐵柵から其の不恰好な頭を出し、巨口を開いて、見物人に媚える。予も手を其口に挿入れ、其喉を搔らんばかりにしたが、何の害をも加へぬのみか、却つて嬉しがつてゐた。凡て千三百餘種の鳥

獸蟲魚を容れ、鸚鵡の種類さへ百三十を集めたること、以て其設備の如何に大なるかの一端を推すべくして、而も飼養の法が其宜しきを得てゐるから、予等は動物が小檻に窮迫せらるゝの慘を思はずして、動物の生活を見て樂しむことが出來る。且つ此動物園は、噴水池の傍には音樂堂あり、ビールや茶を賣る店が、庭上にテーブルを並べてゐること、又た幽邃なる池あり、僻々たる樹林あること、其觀、其景、佳好の遊園たるの備に富めるものである。

動物園を出てから、近く開設せられ、獨帝親しく其開會式を擧げられたと云ふ海事展覽會を見た。これは要するに獨帝か獨乙國民かの、英國に對して海上權力を擴大せんとする野心の一示威運動ではあるまいか。軍艦、商船の發達の跡を示したり、海軍兵器の進歩を現はしたり、商船の構造の壯麗なるを誇つたり、其陳列も頗る巧妙で、會場内が處々船體式に出來てゐることなどは、頗る整つてゐる。

新舊の博物館また美術館等も、少しの時間に素通りしたのであるから、遺憾ながら深き印象を受くることは出來なかつたが、舊博物館の希臘式建築、新博物館のルナサンス建築、又た其内部の整頓、稀有珍貴の陳列品、又た美術館内の名匠の作品など、流石は獨乙大帝國の首府を飾るに充分なる價値ありと云ふべきである。美術館の藏する所、悉く傑作とは云へぬさう

だが、時代と流派との多くを有し、歴史的に整つてゐることから云へば、優に倫敦國立美術館と肩を並べることが出來るので、特に十五世紀の伊太利派、フレミッシュ派の作品に富んでゐるが、其特色なのてある。フレミッシュ派大家のルーベンス、和蘭派のハルス及びレンブラント、伊太利派にはダヴインチ●コレギヨ並にレニの作もある。又た英國ヘンリー第八世の爲、ラファエルの意匠に基いて織出したる七枚の帷帳は、目を驚かすべき珍品てあるが、其原畫が英國皇室の所有て、今や倫敦サウス、ケンシントン博物館に陳列してあるに至つては、猶更驚歎すべきてある。

予は恥かしいことに美術の眼識が無いから、伯林美術館を取つて、これを近くはドレスデン美術館又たは英京美術館やルーブルに比較してドウカウと云ふ資格が無い。たゞ此處のも豪いものだと感じたと云ふのが掛値の無いところてある。併し博物館も美術館も、獨乙だけに、露國のそれ等を見て來た目を轉じて、此等を見ると、いかにも歴史的研究的に整頓してゐるやうに思はれた。此等を一見した後に、一寸美術展覧會を覗いたが、孰れも新作の小作て、繪畫の多くが、佛國のアンプレショニストに食傷してゐるやうてある。中には佳い畫もあつたらうが、概するに好い感じを得無かつた。此等は恐らく獨乙近時の美術を代表するものではあるま

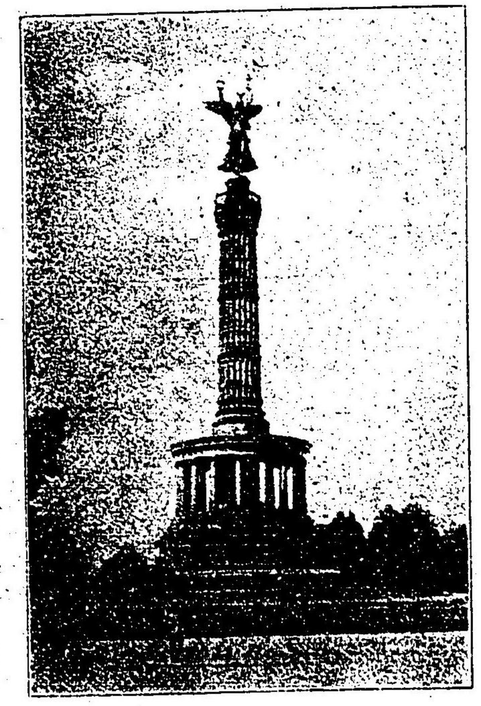
い。一室には日本畫を參考品として陳列してあり、北齋(?)の一軸もあつたが、要するに孰れも見るに足らぬものゝみ。

公園の東隅、凱旋道路の兩側に普魯亞の三十二王の、各二人づゝの名臣を從へた大理石像が、菩提樹の蔭に寧ろ餘りに御行儀能く、觀兵式然と列んてゐる。其突當りに、天を摩する巨柱が百五十呎の高さて、ケニヒス、プラッツの中央に屹立し、頂上にはボルシア女神の像が、月桂冠と十字架とを捧げて金光燦爛と、森の綠と相映じてゐる、又た左右には多少の距離はあるが、ビスマークの銅像と、モルトケ將軍の大理石像とを扣へてゐると云つても可い。これが伯林の一巨觀たる凱旋塔、上なる女神の足下まては登れると云ふから、何も話の種、昇らずんばと、

伯林公園の凱旋通

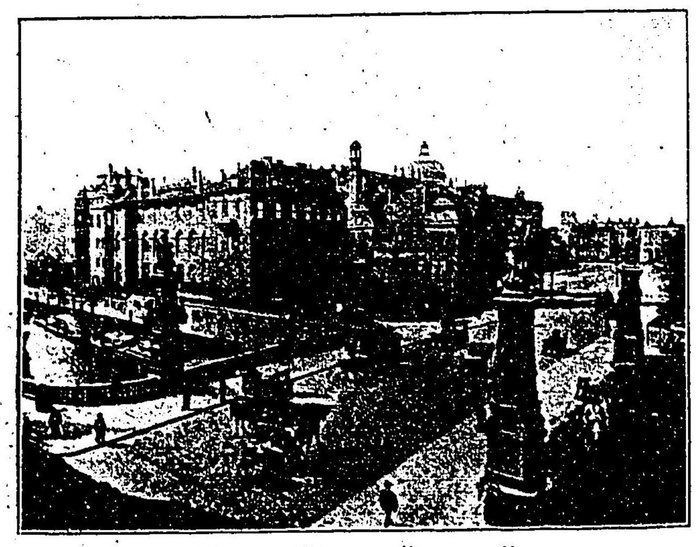
予は伊豫氏を促して、先づ其塔の臺石の四面に嵌まつた、銅牌浮彫の戰景を見てから、若干の昇塔料を拂つて昇つた。塔脚の柱廊で、千八百七十年戰役畫のモザイックを拜見してから、よ〳〵塔内の螺旋階を昇る。

昇れど〳〵、脚はすくみて痛み、息は喘けども、それで容易に達し無い。やうやくの思ひて女神の足下まで昇つて、空を仰げば、行く雲は行かずに、我目が眩いて、足が浮くやう、伯林の全都は一眸に在り。公園の森は低く、三十二王像の行列は小さく、一寸得難い觀望だが、昇降機の備無くして、脚が痛いのには閉口した。予が歐洲に入つてから、高い處へ昇つたのは、モスコウでイワン、ベリキ寺の塔の途中まで登つたのが初めてで、この凱旋塔は其次ぎであつた。



凱旋塔

二十九日午前予等は日本倶樂部幹事東君の案内で、王城拜觀に出掛けた。ウンテル、デン、リンデンを過ぎ、フレデリッキ大王像を仰ぎ左右にウイルヘルム一世宮、伯林大學、オペラ劇場等を眺め、王城橋を渡つ後て、又たウイルヘルム大帝の巨像などを見てから、獨乙ルナサンス建築の典型と云はるゝ王城に來た。先づ拜觀料五十文を拂ふ、守衛の差圖に從つて階段を昇る。一つになつた拜觀人は尠からぬ數で、一々靴に十五文大の上靴を穿かされる。これはモスコウのクレムリン城が草鞋穿の百姓を其儘通すのとは、一寸趣きが異ふ。王城内の結構も裝飾も、これを露國の宮殿に比べたら、大いに見劣りせらるゝが、



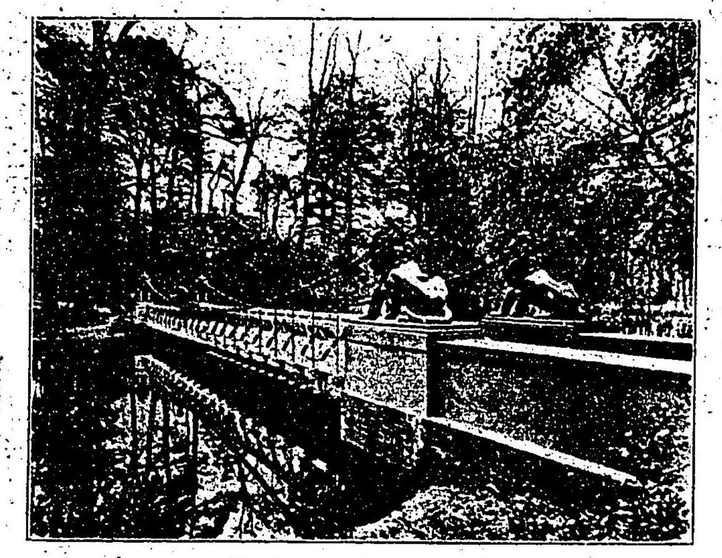
伯林宮城

それでも流石は大國の王城である。而もウルイヘルム老帝が、折々市街を行く人に龍顔を示されたところの窓とは、このあたりかなどと思へばゆかし。扨て孰れの王城へ行つても、拜觀するのは建築の麗、裝飾の美て、つまり美術館を見るのてある。壁畫、モザイック、畫天井、油畫、什器などから、皇帝の居室、謁見室などの華麗な飾付など、此等を案内者の後に付いてスウ〳〵早足に見て通るのだが、只だ成程立派だわいと感ずるだけの事だ。この王城で案内者が特に聲に力を入れて得意て見せるのは、ロココ裝飾の最も麗美を極めてゐる玉座の間の、喇叭手棧敷と稱せらるゝものだ。現在のは何て造つてあるか、只だ銀色を帶びて、それに細かい浮彫が施してある。案内者が威張る點は、この棧敷が昔は純銀にて構へられてあつたのに、千七百四十五年時のフレデリック大王が、之を鑄潰して軍資に宛てた、それが豪いと云ふのて、冬宮て金の皿を誇るのと好いコントラストをなしてゐるのだ。

伯林街頭

伯林は新都てあるからして、市街の區劃も整然とし、家屋の高さは四五階に限られて能く揃つてゐる。また人道の如きも、其舗石は贅澤なものてあつて、獨帝が其首府を裝飾するの野心が、能く實現せられてゐる。建築に歴史を誇るものは無けれども、美術に秀てたるもの尠からず。公園、プラッツなどには、帝王、名將、詩人其他獨乙國歴史上の偉人物の銅像、石像が多く、スプリー河上に架せる橋梁は、多く彫像を以て飾られてゐる。ウンタル、デン、リンデンは、巴里のシャンゼリゼーと比するに足らずと雖も、廣き街路を飾る花卉草木が美しく手入れされて、中央の人道又た一の遊歩場をなせると共に、此大通が横にフリドリッヒ街を控へて、伯林市商業の中心をなし、又た政治文藝の中心を成せるが如きは、他都に於て見ざる情態てある。凡そ市街の整然として美しきより云へば、伯林は歐洲第一の都てある。其新市街のみならず、舊市街に到るも、小路裏通さへ、他都の如くに、甚猶ほ暗淡たるが如きこと無くして、比較的に清潔てある。況んや家屋建築法が嚴重て、市の中央に近く製造所を設くることを許さざるより、煤煙の街衢を包むこと無きをや。市街掃除の如きも能く行屆いてゐる。

草木の綠に乏しき露都を去つて、伯林に來ると、街上、花、紅に、草綠に、リンデンの並木の若木ながらに、枝さしかはす其蔭の夏は凉しきこと、これが實に嬉しかつた。昔はフレデリッキ第一世朝の頃まて、王室の狩獵地たりし、チアガルテンの公園六百三十エーカーの地、王



チアガーテン公園内

室の所有として、樹木は深く、草花美しく、水また清し。道に確くにアスファルトを以てする所あり、夜間はアーク燈で鏡の如くに、之を走る馬車自動車の影を映ずるのである。

辻待の馬車、自動車、いづれもタキシメートル（距離に應じて自動的に賃錢表を示す）を用ゐるが故に、新來の見物左衛門も、心配無しに儆ふことが出來る、但し賃錢以外に酒手を拂ふことを忘るべからず。電車は番號によりて方向を示す。

伯林にては乞食を見ず、また倫敦に於けるが如く、無職浮浪の徒の徘徊すること無きは心地が良い。これは警察制度の嚴重なのと、貧民救助の法が、由來法規の國だから、法規

的に勵行されて、一區劃内に、一の救助所があり、警察の證明さへあるならば、一週間の食料を給與し、且つ職業をも世話する、なほ又た勞働者保護の爲、廉價にて衣食住を與ふるの道もある。人口の繁殖を圖ることから、私生兒保護の法も立つてゐて、中流以下の社會の女子の操德が亂れてゐても、差支の無いやうに、預め設備してあるのだ。

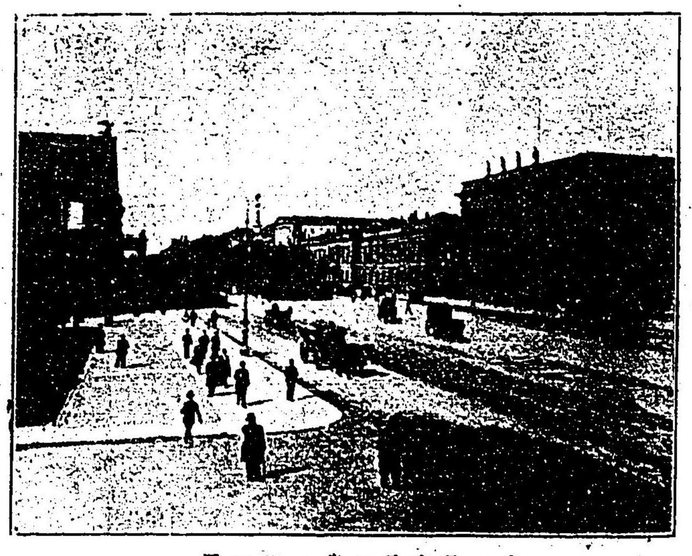
既に白晝を過ぎて、フリドリッヒ街より、ウンテル、デン、リンデンに歩を進め見よ。白く塗りたる化粧の女の、右往左往に客を釣らんとするの如何に多きかな。伯林の私娼十四歳より六十歳まで、其數凡そ六万、而して警察の目に止まつて、鑑札を押付けられてゐるものは、僅に其十分の一にも滿たぬ數だとは豈に驚くべきならずや。徘徊する女郎でも、之を巴里オペラ附近、又た英京ピカデリーにて見る同種の輩に比すれば、風采も賤しく、それに顏が概して拙い。一抱の柳腰テク〳〵然たり、赤鼻赭々たり、獨乙人て御坐いが、看板に僞りの無い體、これても客商賣とは驚かるゝやうな代物までが、白く塗り立てゝ歩いてゐる。抑も造物主が、獨乙人種の女の顏を拙く彫み上げたことは、此國の一大損色だ。それに風采も質素だから、猶と引立たぬ。藥人形も衣裳てと云ふが、其衣裳が粗末だから、拙い女の顏が更らに拙い。しかし元々勤儉國の獨乙も、大分巴里の贅澤問屋（巴里人自からが贅澤なるに非ずして、彼等は歐米

諸國に贅澤奢侈を供給する問屋なのである）から次第に多く供給を受くるやうになつて來るとか。それで今後の女は美しく見えて來るかも知れぬが、獨乙國の爲に贊成の出來ぬことだ。獨乙人は矢張り醜婦で强壯な妻女に滿足し、彼等の多產率を落さぬやうにする方が、國家の勇健なる嗣業を失はぬ良法であらう。それは兎に角、露國の街頭には多くのスラヴ的丸ポチャの美人を見ること多けれど、伯林に入つては醜婦の多きに失望するのである。南獨乙には美人多しとか、既にドレスデンまで往つても、街上の女の顏が、伯林のよりは少し見優りせらるゝやうに感じたのはドウか？

獨乙は質素なる國であつた、今も猶ほサウである。鐵血宰相が獨乙聯邦を成すまで、其國は久しく內訌外患に苦しめられて、人民の富の程度も進歩せず、それが爲に國民は久しく儉約すべく餘儀なくせられ來つたのである。日本郵船會社のアントワープ代理店に勤めて、相當な地位に居る獨乙人が、朝は一杯の珈琲に二三片の麵麭を食つたゝけて出勤する。午餐には御持參の麵麭一塊を茶で流し込み、斯くて午後六七時まで精々と働いて家に歸るを常とす。人あり、君は高給を取りながら、それ程迄の儉約せずとも宜からうにと云へば、イヤ自分等獨乙人は、倫敦の商店の雇人のやうに、朝からハムや魚を食ひ、九時頃に出勤し、午餐には料理屋へ出懸

け、四時には茶店に往き、五時には歸宅するやうな氣樂な事は出來ぬと云つたさうだ。獨乙人は通常如斯くに儉約なのである。その中流の社會で、日常の食事が、朝は珈琲にパン（これは大概何處も同じ）で、十一時頃に二三切のサウセージを食ふもあり、食はぬもあり、午餐が主食で二三種、夜は冷肉位でアッサリだ。英佛などに比し、米國に比すれば、其食物は大に劣つてゐるのである。

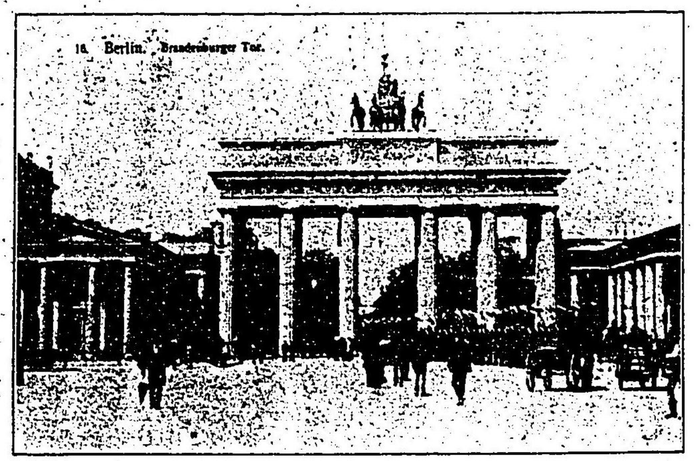
二三人連でカフエーでビールを飲む、レストラントで食事をする、濟んで勘定の時に、給仕が必ず別々かと聞く。日本人なら一處とやるが、獨乙人なら、名々で勘定をする。給仕は一本の葡萄酒さへ頭割にして別々に附



ウンテルデンリンデン通

出す。酒を飲まぬ人には、酒代を拂はせぬ、これが所謂『獨乙流の御馳走』である。これを考へても、獨乙人の儉約なことが察せられる。彼等は、日本人のやうに、貧乏な癖に氣前を見せたり、外國へ往つては、汽車でも宿屋でも、比較的多くの茶代を拂つて、少し丁寧に御辭儀をされて大盡然と喜ぶ風は無い。否此風は獨乙人ばかりて無い、歐米人概してサウて、彼等は中々無駄なところに一文も使はぬのに反し、日本人は駄々子の坊ちん見たやうに金使ひが下手、そして財布はいつも空尻なのだ。

又た中流以下の獨乙人は、男子が義務教育年限でも過ぎやうものなら、自活の途を取らす、親の軒下にゐても下宿料を拂はせる。子が借金をして親が取替へるなら、遺產分配の時に、キチンと差引くと云ふ、いかにも現金な習慣が出來てゐる。初めは國情の止むを得ざるより强ひられ、後には一般の慣習となつたる此の節儉の風、これぞ即ち獨逸國が今日の進歩發達をなすの大動機となつてゐる。又た各々自からパンを求めざるべからず、親の脛噛りが出來ぬから、獨乙種族は世界の到る處に移住して發展し、露國の商權を壟斷もすれば、紐育及び桑港が人口より云へば、即ち獨乙人の都であるにも至つたのである。併し由來儉約な獨乙人も、贅澤には染み易くて、伯林でも元は商店と住宅とを一つにしてゐた商人が、此頃は住宅別莊を郊外な



伯林凱旋門

どに設けて、それて郊外の地價も、五年前に比して十倍するに至つたとの事てある。

伯林の市街には、靴磨が少い。歐洲の大都は英京でも、米國の都會のやうに、靴磨が街のコーナーに大きな椅子を三四臺も高く並べて客を待つやうな事は無く、停車場のやうな繁華な處で、客の片足を載するに足るだけの、足形の附いた箱を置いて、多くは不具者か少年かが、靴を磨いてゐるのだが、それすら伯林には少い。又た伯林の犬は法律によつて皆口輪を篏められてゐる。それがブールドッグか、マスチッフのやうな大犬なら當然でも、手の掌にも乘りさうな小犬まて、戸外ては口輪をかけられてゐるのが、何事も法令て通す斯國の風を現はしてゐて、寧ろ可笑しいが、いや他處事ては無い、日本ても獨

乙風にかぶれる事が犬にまで及んで、警察令は狆にも口輪を要求することになつたのである。しかし犬の口輪は無論市の警察令で定めたことだらうから、獨乙一般では無い。聯邦の結合が極めて薄弱で、バヾリア王國では、聯邦政府發行の郵便切手を使用し無いくらゐだから、他の市で伯林を一々眞似はせぬ。フライブルヒ市の友人を訪ねた時、外出に犬を連れて歩くに、口輪を掛けぬから、伯林の通ては無いのかと云へば、然りフライブルヒの犬は自由なり、伯林には人間さへ口輪を掛けねばならぬ者があるとは、昨年の十月獨乙皇帝の外交に關する談話が、英國の一外交家によつて倫敦テレグラフ新聞に發かれた爲、内外の大物議を惹起し、獨乙議會は内閣に警告して、皇帝の發言を戒めたことを暗示したらしい。因に云ふ、伯林では一頭の犬を飼ふに、一年の税金二十馬克を要すと。

日本の所謂御役所風即ちレッド、テープは、舊幕の遺習でもあらうが、維新後獨乙に負ふところが尠く無い。獨乙は實にレッド、テープイズムの國である。予等外國人が一新聞社を參觀せんとするにさへ、大使館の紹介狀を要するでは無いか。官立學校を參觀せんとせば大使館を通じて文部省に許可を求める、其の往復に一週間を要すと云ふから、米國流に手取り早くはいかぬ。某日本陸軍將校が、伯林の某陸軍學校を參觀せんと欲して、大使館より陸軍省に掛合つて

貰つたのに、數日經つても許可書が來ぬ。更に催促して、やつとの事に下げられた許可書には、『獨乙軍人が日本に派遣せられて、陸軍學校を參觀せんとする時には、之を許容することを條件として、日本將校何の誰が、伯林某陸軍學校を參觀することを許可す』と小面倒臭く認めてあつたと云ふことだ。日本政府も隨分神經質だが、戰爭後、獨乙でも佛國でも、日本に對して餘り神經質になり過ぎたやうで、番に陸海軍のみならず、普通の製造工場までが、日本人の參觀を拒む風である。それには、日本人は惡賢しいから、新器械でも一遍見せたら、直ぐに眞似をするし、實際眞似もするからと恐れてゐる點も大いに預つてゐるのである。

伯林の市には婦人が多い。また男女共に背の低いものが多い。伯林否な獨乙に多きはビール店である。人は茶の代りにビールを飲むのである。女でも小兒でも飲むのである。茶や珈琲は高い。カフエーが多い、徹夜してビールを飲み、音樂を聞く大小のカフエーが多い。いづれも女郎が客を釣るところらしい。又た自動的の飲食店がある。定價の金を投ずれば、望みの皿なり酒なりが、自動仕掛で客の前に出る。自動の靴磨きもある。

六月は既に演劇の季節を過ぎてゐたから、皇立オペラ劇場や、其他屈指の劇場も閉されてゐた。僅に一夜首藤中佐の案内にて、メトロポール劇場に『男は見るべし』の所作劇を見た。國

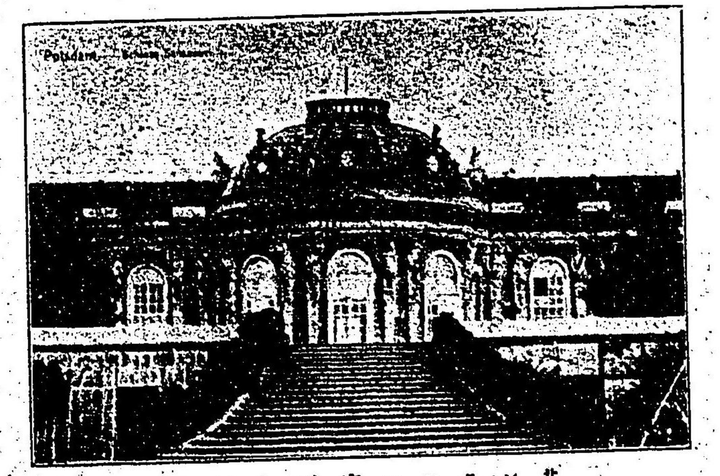
會議員を罵つたり、獨帝の亞非利加政策を諷したり、輕氣球旅行を見せたりする、大甘のものであつた。予が幕の間に便所に立つと、菓子店の女賣子が、大聲でヒニーゼ（支那人）と罵つたから、ムッとしたが喧嘩も出來ぬ。一體伯林の市街でも、日本人を見れば『ヒニーゼ』だの『コレイッ』（朝鮮人）などと大聲に罵る下等な奴がゐる。不快でならぬ。扨て支那人の留學生などは、日本人と僞稱して、酒屋などで金を使ひ、大きに持てるのだとは、僞稱されて頗る迷惑てはあるまいか。

フリドリッヒ街の店頭はたウエルタイムの大勸工場など、凡そ獨乙の商品は、他國に比して廉いが、英國品などに比すれば劣等だ。例へば東京製と大阪製との差があるやうだ。英國では獨乙品は安からう惡からうと云ふのである。獨乙は又た模造國である。各國の特產を模造して賣る。日本品の模造などは、實に盛んなもので、歐米の市場に供給してゐる。但し模造品だから良い筈は無いのだ。獨乙の商法には英國のそれとは異なり、前金割引の仕組が大いに行はれてゐる。新聞の一枚賣は十文だが、一ヶ月前金だと割引があること日本の如く、また飯屋でも一週間乃至一ヶ月分前拂の切符を買へば格安であるのだ。扨て其新聞も、飯屋ビール屋で見て濟ます連中が多い。獨乙では又た葉卷煙草が安いから、勞働者まで吹かすのは、英國のパイプを吸ふのと同じやうだ。又た此國は玩具の本場であるから、陶器燒の愛らしい人形が、廉くて而も美しい。鍼力細工器械仕掛の玩具は、歐米諸國共に獨乙からの供給を仰ぐのであつて、予は露國にて、何か彼國特有のものがあるかと注意して見たが、極めて粗末な木製のものくらゐなものの外は、悉く獨乙品であつたに驚いた。又た繪書印刷術に長じた此國の事であるから、從つて繪葉書やアルバムなどは安くて、而も上等なのがある。英國などの繪葉書も、タックなどの上等品になると、孰れも獨乙で印刷するのである。

ポッダムとドレスデン

伯林を東京とすれば、ポッダムは西京である。即ち普魯亞王家の別莊地である。伯林を發して一時間半の距離に在り。予等は東君を東道として、王城を拜觀したる日の午後半日を爰に費した。靈廟に先帝フレデリッキ第三世及び皇后ヴイクトリア兩陛下の石槨の御寢像を彫刻したるを拜して、馬車をサンスシーの宮殿に驅つた。樹木鬱々たる禁園の中、平家造りの古雅なる一宮殿、これぞフレデリッキ大王が、其生涯の多くの日を過ごした處である。又たポルテイ

アを師として學んだところである、其父王が巨漢の軍隊を組織して大得意であつたところである。宮前多くの階段を下りて禁園に遊べば、ヴエルサイユの壯觀は無けれども、樹間の逍遙、噴水地畔の小憩、はた幽雅なる花壇の薫風に、離宮の風雅清趣を汲むのである。予等は宮殿内並に附屬の美術館を見ることを得無かつたから、内部の結構や、ホーヘンツオレルン王家の寶物たる佛國十八世紀の名畫、並にルーベンス。レンブラント。ヴアンダイク等の名作を見ることを得なかつたのを憾とする。新宮殿また今日は門を閉して人を許さず、都宮も纔に其外觀を一見したるのみ。サンスシー宮禁園の前なる、古き風車は名所の一に算へらるゝ程に珍らしい型のものだ。予等は林間の茶店に憩ひてレモン水を喫したる



サンスシー宮（ポツダム）

後、再び馬車を驅りて停車場に馳せ、夕景までに伯林へ歸つた。

七月一日予は五十嵐君と共に、サツクニー王國の首府ドレスデンへ赴いた。蓋し其美術館に名高きラフアエルが筆のシスチン、マドンナを見るを第一の目的としたのである。此地に在りて化學を專攻する山崎理學士は停車場まで出迎へられて、予等は、兼て首藤中佐から紹介狀を貰つてゐたフロイライン、ベーニッシュの下宿屋へ往つた。山崎君も此家に泊つてゐた。また此地に二三日滯在して見物をしてゐた北田理學士にも會つた。

予等は兩學士と共に市街を見物し、エルベ河畔を逍遙したる後、下宿にてベーニッシュ婆さんから牛鍋日本飯の馳走に預つた。

翌日午前予等はベーニッシュ婆さんに案内されて、王立美術館に赴いた。ベーニッシュ嬢、日本べいきの婆さんの綽名あり、客間に日本國旗を揮み、何年かの間泊り合した日本人の名簿を有し、日本人を案内して歩くのが見得なのである。昨夜の牛鍋に、婆さんが巧みに箸で米飯を食ふのに感心した。

館内二千六百餘種の繪畫、勿論摸寫も含んでゐるが、サクソニー王家が、長い歳月を費して蒐集したものとは云ひ條、能く集められたものだ。精撰が行屆いてゐず、從つて玉石混淆だと

云はれてもゐるが、美術史的に分類の出來てゐる事、殊に伊太利派、フレミッシュ派の作品に富んでゐることから、歐洲美術館中の一二を爭ふものと云はねばならぬ。況んやラファエルの傑作たるシスチン、マドンナを藏するに於ておや。ルーベンスやヴァンダイク又たはレンブラントやコレジョ、及びチシアンやヴェッキオの作品の多さこと。近くは獨乙近代の大匠たるホフマン。クナウス。メンツエル等の作もあり、其多くは予が既に寫眞で度々見たことのあるもので、今は其原畫に接するのだから嬉しかつた。而してシスチン、マドンナは、此の美術館に在る唯一のラファエルが筆に成れるもので、繼馬ヴァチカンなる彼の壁畫を除かば、これが彼に成れる、圖の最も大きものゝ一である。千七百五十三年に伊太利ピアセンザのサン、シスト僧院より、二万ダカットで買つたものと云ふ。即ち四万弗ほどしたるものだが、今日では、如何に美術品蒐集に熱心なる巨富モルガンが、其全財產を擧ぐとも購ふことは出來ぬ。畫は館內のA室を獨占して渴仰の徒を集める。マリアの顏、幼き基督の姿、また下端なる二小天使は、予等の心を引付けるやうである。予は特に此畫を見んが爲に、ドレスデンまで來た希望が十分に滿足を得たのである。現に此美術館內に在るチシアンやコレジョのマドンナとても、之に比すれば、全く其光を失ふのである。ラファエルの筆に成れるマドンナて現存してゐるものも多

シスチンマドンナ（ラファエル筆）

いが、中にも此のシスチン、マドンナは、彼が希臘主義と基督教主義との二理想を調和して、肉と靈との間を辿ることに於て、最も完全の域を得たものては

あるまいか。ア、予には美術の評は出來ぬ。只だ一寸感じたところを云つて見るだけだ。古來マドンナを描くものは多いが、ルナサンス以後のマドンナ、殊に近世の作には、娼婦だか何だか素性の分らぬモデルを使つて、それに役せられてゐるから、肉情的表相の淫靡なマドンナさへある。然るにラファエルが、畫僧アンゼリコ等の宗教畫のやうに、人間界から離れたものて無くて、人間にして靈性的なる、高潔にして威あり愛あるを描いたのが、其マドンナの隨喜渦仰さるゝ所以なのてある。傳へ云ふラファエルの性情婦人に近く、且つ生前自からドンナ、ベラタの肖像畫に描いた貴婦人を崇拜し、自ら心服してゐたといふから、其影響が自からマドンナに現はれたのてあらう。

館内なるジョルジョネ及びベッキオのビーナス女神の二畫は頗る有名なるものてあるが、此等は寧ろ肉に就けるもので、シスチン、マドンナと相比して語るべきもので無い。此と彼とは眼識を變へ、心を別にして見るべきものだと思つた。

ベーニッシュ婆さんは、予等が畫飯を何處かて御馳走しやうと云つたもので、美術館を途中から家に歸つた。予等はユックリと見物してから、又た陶磁器博物館もザット一覽した後、待てども〳〵婆さんが來ぬ。街の角て、呆然と久しく待つてゐたら、遂に來た。美術館を途中て

去つたも道理、畫餐と云ふので、衣服を着かへて來たのだ。それより婆さん先立ちて、エルベ河畔の料理屋に入つて、腹を滿たしてから、河蒸汽に乘つた。河水は濁つてゐるが、兩岸の風景は明媚、左岸は丘陵を成し、其間に富人の別墅多く、之を遠く溯らば、所謂サクソン瑞西の勝地に入るのてあるが、予等はさまて遠く遊ぶべき時間を持たぬ。今夕六時の汽車に乘つて伯林へ歸らうと云ふので、氣が急ける。されど婆さんが、ナニ自分が附いてゐゝから、時間を遲らすことては無いと、遂にロシュヴィッまて往つて、船を下り、有名な架空鐵道に乘せてくれた。其の頂上に達して、ドレスデン市やエルベ河を煙霞の間に瞰下するの風景にまた一しほの眺望を送つた。歸途は電車て、婆さん左右の大建築を指しては、彼れは病院、これは孤兒院と、懇切に教へてくれたが、予等は時間、發車時間、それが迫つて來るから氣にかゝる。婆さんは大丈夫々々と云ふ。遂に大丈夫て、丁度の時刻迄に、予等を停車場まて送つてくれた。予等が二等の切符を買へば、伯林までは僅かの時間て無いが、獨乙の汽車は三等て澤山なのにと、何處までも信切、再び歐洲に遊ぶことがあつたら、是非訪ねてくれよと云つた。

倫敦の旅枕

七月四日予は遂に西伯利亞以來の旅の友にも別れ、伯林の友にも別れて、只だ一人フリドリッヒ街停車場より出發し、其夜半、和蘭國フリッシンゲンより火輪船に乘つた。船中にて東京高等工業學校の市岡氏に會したが、翌早朝英國クインスボロに着いた時には、同氏を見失ひ、却つて同船ではあつたのに、今迄會は無かつた、福原男爵に偶然出逢つたのが緣となり、汽車にも同乘し、倫敦に着くと、共にグロヴナー、ホテルの而も同室に泊ることとなつた。それよりは大使館に陸奥伯を訪ねたり、日本銀行の柳谷卯三郎氏に會つたり、又た郵船會社支店にて支店長根岸綠次郎氏にも會つた。根岸氏が越後長岡の豪傑河井繼之助の姻に當る人で、頗る議論好な人だ。英京に留まること既に十有五年。根岸君の我英國と云へば、評判なものだ。今日は同氏が午餐に肉一片を御馳走しやうとて案内せられた處は、倫敦名物のグリルの燒肉屋で、鐵鍋の前に立つ、白帽、白エプロンのクエカー教徒然なる老人は、肉を燒くこと三十餘年と云ふ老功の人、勘定方の老人はフロックコートで、これまた一廉の面相をした者、而してステーキの

肉の甘いこと、流石は根岸君が自慢のグリル屋ほどある。同君は此店が得意で、新來の客を、誰彼無しに連れて行き、家の汚いのと、肉の甘いのとで、アット云はせるのである。根岸君から、グリル屋の御馳走になつた、我國の紳士の數は果して幾許人であらうか。

午後シエパアード、ブッシュの下宿に本田增次郎君を訪ねたが、旅行中で不在であつた。然るに翌朝同君から葉書が來て、同宿せぬかとの事であつたから、早速訪ねて往つて、本田氏に三年の久濶を叙し、それで日本人に緣故の深い、このウオルトン夫人の家に下宿することになり、其午後にホテルから引移つた。予は此下宿に留まると一ケ月餘、八月になつて、郵船會社の上谷君の下宿へ移つた。

予の倫敦に客たること、約四ケ月、其間に湖畔詩人の故郷を訪ねたり、蘇國の湖上にも遊んだのであるが、實は思ひの外に、用務が果取ら無かつた爲、つい滯在も長びいたのである。而して其月日の間に見聞實歴したことも尠く無いが、何にせよ、倫敦といふ處は、其市街の區劃が錯雜して、倫敦人ですらが、巡査に道を聞かねば、下町などは見當が附かぬ位なのと同じことで、政治も、社會も、教育も、習慣も、昔から自然に發達して來たまゝを保存し、法律さへ條文が無くて不文の習慣法であるから、六ケ月や一年の滯在で、倫敦と云ひ、英國と云ふもの

が、臆げにも分るものて無い。國法學者のスタインは、英國に職を奉ずること十有餘年の後、初めて英國制度に關する著述を成すことを得たといふ程てあるのに、まして予の如き雲煙過眼の徒には、何事も分つたものて無い。只だ滯在中我目に觸れて、直覺に感じたまゝを、思ひ出しては、そこはかと無く書き述べて見やう。

英京の白堊市

英國の夏は外國人の多く來遊する期節てある。而して今年は五月からして、京の西部シエパード、ブッシュに、英佛聯合大博覽會が開催された。佛國人の來遊するものが殊に多く、停車場には佛語て出入口を示す、其他の場所にも佛蘭西語の張出が澤山にある。蓋し此博覽會たるや、實は英佛握手の一現象として見るべきものであつたのみか、又た英國人が大いに佛國人の御機嫌を取つてゐるやうな形跡を認め得られたのてある。されば頻に佛語でアンタント、コルデーアル(親交)を振廻してゐる。其會場の守衛が淺黃色の制服を着た處などは、純然たる佛國式て、之を見ても此博覽會開催の意味が、我邊にも讃める樣に思はれた。

流石は歐洲の二大强國が握手した結果の博覽會であるから、其設備と云ひ、陳列品と云ひ、世界の一大博覽會の中に算へらるべき價値を十分に有してゐた。一昨年の上野の博覽會などの比ては無かつた。其建物の凡て白さが故に、市人は之を白堊市(ホワイト、シチー)と呼びならはしてゐた。

此英佛大博覽會は、千九百〇三年に英國王が巴里を訪問せられたのが動機となつたので、引續いて倫敦なる佛國商業會議所が發起する、佛國政府は直ちに之に應じて國庫補助を諾した。しかし英國は慣例上かゝる事業に對し政府からして補助すると云ふことは出來ぬのてあるが、英國王は一昨年巴里からして勅書を以て、此博覽會が英佛兩國民の親密を加へ、兩國の商工業の進歩に稗補することの大ならんことを希望

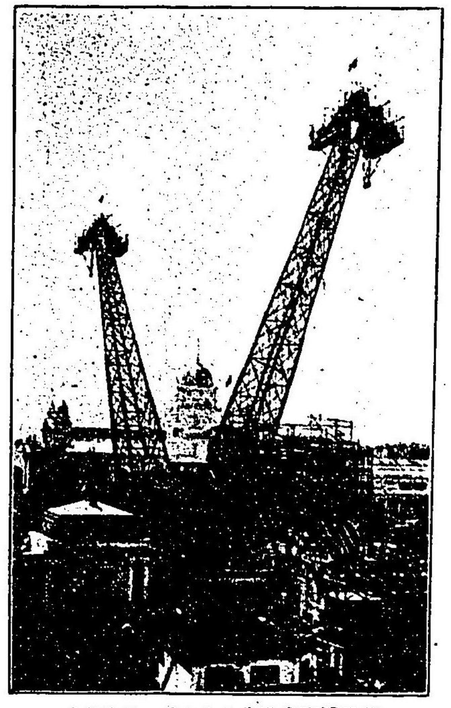
英佛の親交

されたのである。而して此博覽會は英國では一の民間事業たるに過ぎないが、元々利益を目的としたもので無く、收入は擧つて、公共の事業に寄附する筈であり、又た其建物は毎年一回博覽會の種類の會場として使用せらるゝことになつてゐるからして、建築は鐵骨を用ゐた半永久式である。明年日英博覽會の開設せるべき場處は即ち此處なのである。

此博覽會が英佛親和を第一の目的とするもので、それが外面に現はれてゐることは前にも述べた通りであるが、又た停車場や、町の板塀などに盛に掲示してある博覽會の廣告には、肥大なるジョン、ブールが、婀娜たる佛國の女と握手してゐる畫があり、又た繪葉書には或は英國王と、佛國大統領との肖像を並べたり、或は英佛兩國の女神が英國海峽を隔てゝ、國旗を交叉し居るものなどがあつた。

博覽會の有する地坪は百四十エーカー(十七萬五百餘坪)で、其建物の坪數は四十エーカーであるが、これを彼の千八百五十一年の英國博覽會、即ち今日も水晶宮として保存せられてゐる時のに比べると、七倍の大さであると云ふことだ。建物の數は總計で百零五であるが、此中には、料理店、各種の見世物も含んで居るので、大なる陳列館は先二十であつた。佛國農業館、佛國應用美術館、英國教育館、佛國教育館、器械館、美術館等がある。加奈太館、濠洲館等は

大いに注目すべきものであつた。見世物には、英國や佛國の植民地の蠻人を引張つて來て、其風俗を觀せてゐる。遊樂にはフリップ、フラップとて、二個の大梯の上に廻覽箱を設け、それを高く空中に上げるのは、廻覽車よりも一層奇拔であつた。これは會場内の一大評判物で、會ふ人毎に、殊に女などは、君はフリップ、フラップに乘つて見たかと問くのであつた。



英佛博覽會場内フリップ、フラップ

觀光鐵道が書劃の山を疾走する、車に乘つた老若男女が喧々と叫ぶ。之に乘らんとする者が切符賣場に、或夜の如きは數町に連つてゐた。博覽會の開場は朝より夜の十一時まで、日曜日は閉場するのであつた。

各會館内の陳列法は、頗るユックリと出來て居て、我國の博覽會の如くに、狹い處に、無

暗と詰込んでゐる風では無く、而して陳列の仕方は概するに佛國の方が趣味に富んで居て上手なやうだ。又た陳列品によると、パノラマ式の背景を用ゐたのがあつて頗る巧だ。會場の一方の板塀を隠す爲に、大なる山水の書割を用ゐてゐるなどは、大いに面白かつた。

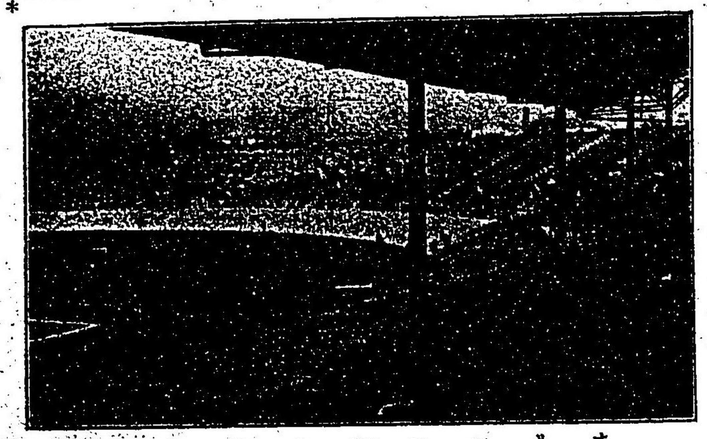
此大博覽會は唯だ徒らに大なるものでは無いのだ。陳列品は何れも英佛兩國の粹を拔いて互に優劣を競つてゐるので、少しも駄目が無い。此博覽會によつて見ると、英の强大なるを以しても、容易に佛國を侮ることは出來ぬのである。器械館の如き、最新の進歩を示したるもので、これだけ多くの新器械を集めたは、流石の倫敦でも此度が初めてであつたさうだ。また美術館の如きは、素人目にも英佛の傑作を集めてゐると思はれた。而して佛國のが、これがサロン式とか云ふものか、畫がやゝ浮いて、婀娜めいてゐるのが多いに比して、英國のは靜かて落付いた畫が多い。英佛兩國美術の差異は、予等の盲目連にも分つた。又た水彩畫とは山水樹石のなぐり畫きをするものゝやうに思つてゐたし、日本の大家からして、ソンナものばかり見せられてゐたのが、此美術館にて、予は初めて美術界に名高き英國水彩畫の或者に接したので、ある、或は精緻、或は瀟洒、或は幽雅、或は婉麗、そして頗る大なる畫題を捉へた水彩畫が、油繪以上の成功と趣味とを示して居るのに敬服した。

數大新聞社は各〻自個の新聞館を設けてゐる中にも、デーリー、メールの如きは、巨大なるホウ式輪轉機を備付け博覽會版を印刷して、會場の內外で賣つてゐた。デーリー、ミロアの如き繪入新聞は、電送寫眞機を備付けて、觀覽に供してゐた。場內に多きは煙草店で、美人の賣子が客を呼ぶ。中には、器械を備付けて紙卷を製造する。又た土耳其人が手卷をやつてゐるのもあつた。而して煙草店でも菓子屋でも、御面相の美しい賣子のゐる所が、一番繁昌してゐたのは、何國も變らぬ人情だ。博覽會の入場料は一回一志で、又た場內の見世物は、いづれも六片以上を取るのであつた。佛領アルジール土人の小屋は見料が一志で、而も中は頗るクダラないものであつた。

マラソン競走

太古の世希臘人が、ゼウスの神を祭るため、オリンパスの山の麓にて、四年に一度七月の月に、徒步競走、輕車競走をなしたのは、古史の一盛觀となり傳はつてゐる。是が希臘の滅亡と共に、二千有餘年絕えて久しく亡んでゐた。然るに近世運動競技の盛んなるに連れて、新工夫

を好むものが、あれても無し、これても無し、ズツト大昔のオリンピック競技の復古が、歴史的と云ふ錆のついてゐるだけに振つてゐるては無いかと、これを首唱したのは佛國人で、遂に千八百九十六年に希臘アゼンスの本家本元で第一回を復興したのである。第二回は巴里大博覽會の時で、第三回はセント、ルイ市の大博覽會の際に行はれた。而して第四回目が、即ち英佛*



オリンピック競技場

博覽會と聯絡して行はれた。歐米諸國は勿論、南米、濠洲にも、萬國オリンピック競技委員なるものがあつて、英國ではテズボロー卿が其委員である。第四回大競技の會長は前首相バアルフォア氏であつた。

白聖市に隣りて五萬磅の財を投じて建設したるスタヂアム、即ち希臘、羅馬のサーカス式に倣つて廣大なる競技場を有し、周圍の棧敷には四五万人の觀客を

容るゝに足るものが、即ち第四回オリンピック競技の會場なのである。芝草を植付けた競技場は、向ふの方では何をしてゐることやら分らぬ程に廣い。其中には長さ三百二十七呎、幅四十八呎と云ふ游泳場が小さくなつて見える。周圍にはコンクリートで固めた自轉車競走のトラックがある。

この大競技は七月の十三日より二週間に亘つて、陸上水上各種の運動遊戯を競ふたのであり、而してなほボートレースの如きは、テームス上流にて行はれ、フートボール、スケーチングの如き冬の運動は、十月より十一月にかけて競技されたるのである。而して競技の撰手は悉く素人なるべき條件で、其道の商賣人は許さ無い。扨てこのオリンピック競技の爲に、撰手を送つた國の數は二十有六とか。歐米諸邦は無論、印度、濠洲、南亞、南米までが參加してゐる。但し日本、支那の如きは之に預ら無い。而し高等師範の永井道明氏は、瑞典から態々英京に來て、二週間の競技から、冬のにまでかけて飽きもせず、熱心に研究した。入場料は六片以上で、上等席になると、競技中の回數切符が數ギニーの價となつた。又た毎日々々異つて販賣する番組は一冊六片であつた。

七月十三日午後に、折々の雨の中に英國王及び皇后兩陛下が皇族方を從へられて、スタヂア

ムに御臨場あり、躬からオリンピック競技の開會式を擧げさせられた。予も大枚二志の入場料を拂つて、玉座を離ることズット遠き左側の蹲坐に辛うじて立つてゐた。煙火が揭がる、競技場中の一段高い處に並んだ歴史的のヘラルド兵が、大旗の附いた長い喇叭を吹奏する、グラナディア衛兵の樂隊が奏樂する、それで兩陛下の御臨場を迎へた。場外でも低い重いヒユラーの聲が鳴る。すると玉座と覺しきあたりに白い姿の數多見えるのは貴婦人方であらう、黑いのは紳士である。いづれが兩陛下におはすや、遠くて拜むことが出來無かつた。

國王が御臨場になる、國歌が吹奏せらるゝ、見物人が帽を脱する。すると何と無く森嚴の氣が滿場を壓するやうで、他國人ながら、予も自然に難有いやうな感じが起つて、眼には涙が濕んで來た。

兩陛下が御着座になつたと思はれると、其下の方に數十人の紳士が寄り來つて、ゴツ〳〵としてゐた。これは國王陛下から開會の勅旨を拜してゐたのであらう。暫くすると、玉座に向つた正面の通路の口から、出るは〳〵、各國の選手が、國々によりて隊を分ち、國旗を捧げ、國名を揭げて、孰れも運動服の勇ましい姿勢で邊り出して來た。それが場内を一週したるのち、玉座の正面に、國旗を樹て〻集まるのであつた。其中にて尤も目立つたものは、丁抹より來た

二十人の年若き女學生が、白の揃の服裝にて、美々しく現はれ出でたことである。いづれも、瑞典式の體操家で、今日を晴と競技をなさんとするものであつた。予は變な時に妙な事を感ずる癖の男であるからでもあらうが、この二十有餘ケ國の國旗の下に、整々堂々と運動家が邊り出したのを見たとき、ア、あの中に何ゆゑ日章旗が交つてゐ無いのであらう。日章旗を捧げて英國のスタヂアムに、オリンピック競技をなす運動家は無いのであらうかと、妙な感慨を起したのである。數万の見物人中、日本人は何人ゐたことかしらぬ。よし予一人であつたにしろ、一人の日本國を代表するものがゐたのである。然るに競技場内には我國を代表するもの無く、殆ど凡ての國の旗が並んでゐるのに、日章旗が無い。而も同盟國と云ふ英國でこれてあり、同盟國の君主の御前に、旭日旗の光を輝かさぬとは遺憾千萬であつた。

儀式が終ると、數番の競技競走に移つた。自轉車競走、游泳、フートレースなどもあつたが、最も目立つて賑かなのは、丁抹、瑞典、那威三國の特長たる體操の演習であつた。其中には彼の二十人の女子體操家も一隊をなして競技してゐた。

餘りに廣いスタヂアムで、此處彼處で同時に諸種の競技をやるのだから、見物人は氣が散つて、目が迷つて、あまり面白く感ぜられぬ。たゞし見物の中には諸國の人が交つてゐて、國々

の撰手に對して聲援を與へてゐたが、全然無關係な日本人は、彌次つて見るだけの氣も起らなかつた。

予の前にゐた老人は、其前にゐた二三の婦連が、雨が降つて來たもので傘を差したので、向ふが見えぬぞと呶鳴る、惡口する、それでも女共は平氣でゐた。すると老人いよ〳〵怒つて遂に自分の卷いた傘で、一人の女の廣げた傘を打つた。當然破れた。すると傍の人は女に對して亂暴至極だ、辨償してやれと叫ぶものがある。予は女の勢の強い國にても、コンナ事があるものかなア、成程驚いたと、實は目を丸くして驚いて見てゐた。これが今日目擊した中での活劇であつた。

雨も降る、競技もあまり面白くないので、予は暫くしてスタヂアムを出て、博覽會場内をブラ〳〵してゐると、程經てスタヂアムの近傍が、何となくゾワ〳〵しだす、多勢の人が騒付ける、予も近寄つて見た。國王陛下の御還幸が間近いと見えて、赤の制服美々しき馭者馬丁が、馬車を動かしてゐる、既に馬車を驅つて去る紳士もある。群集は泥濘の中で込み合つてゐる。又たスタヂアムの高い見物席から下を瞰下してゐる。丁度スタヂアムの入口に面した、一棟の料理店には、屋根にも窓にも人が攀ぢてゐる。折角奇麗に植付けられて、青々としてゐた芝生

を、制札の表に頓着無く蹂躙り、圍の鐵條を踏倒して、あはれ無殘な有樣に荒してゐる。澤山な綠塗の椅子の上には泥靴で立つ、但しこれは監督者が何程宛かの損料を取つたのだ。箱車の上にも登る、木にも登る。我國では陛下の御通路などにて迎も見受けられぬ亂狀であつた。下宿に歸つてから主婦に此事を話すと、それは佛國人の仕業だと云ふ。但し不思議な事にいづれも英語を話してゐた。されど群集の中ながら押合ひ壓合ふこと無く、先列へ出やうなどと前のものを押除けるやうな事も無く、又たがや〳〵騒がぬところは、流石に英國人だ。

兩陛下が馬車に召される、群集は低く萬歳の聲を揚げる、帽を脱する、國王陛下は一々シルクハットを脱いで答禮された。予は丈の高い前列の人々の間から覗いて、やうやく半白なる國王陛下の尊容を拜することを得た。

オリンピック競技中の最も主なるものは、即ちマラソン競走である。紀元前四百九十年、ミルチアデースが希臘アゼンスの軍に將として、マラソンの海戰に彼斯の大艦隊を擊破した時、急使を二十五哩の遠きアゼンスに奔らせたと云ふ吉例によつて、希臘に行はれた古式に範つたもので、七月二十四日に諸國の韋駄天共がウインゾル宮よりスタヂアムまで、三時間足らずで二十五哩半を競走したのである。無論撰手には名々介添が、或は自轉車、或は自動車で附いて

ねて、處々でビスケットや飲料を呉れてゐた。扨て第一に到着したのは伊太利のドランドであつた。スタヂアムに入つた時分には、最早失神の態で、度々倒れたのを起されては、又た走つて、辛うじて決勝點まで達したが、其時に悠々然として驅け込んだのは、米國のヘーズであつた。それで審判の結果一等賞は米國の手に落ち、伊太利は見苦しき勝方だから、一等賞は獲られなかつたが、其勇氣の特別賞與とあつて、皇后陛下の御手づから金杯を拜受した。そこまでは可かつたが、此のドランド、元々素人であり、またさうあるべき筈であつたのに、其後寄席に身賣の醜態を露したのである。オックスフォルド街の或寄席は、人氣取の拔目無いところから、評判のドランドを大枚の金で買つて、マラソン競走の活動寫眞で、ドランドの姿を映す時に、生きた本人を舞臺に立せた。格別の藝も無からうから、たゞ顏見せだけで觀客の人氣を取つたものらしい。すると新聞などでは、ドランドの不心得を攻擊するものがあつたので、ドランドはたまら無くなり、報酬は總て慈善事業に寄附すると云つて、其失敗を言譯し、匆々本國へ歸つたが、鄕里ではマラソンの勇士なりとて、英國皇后陛下恩賜の金杯と共に諸方へ舁ぎ廻されたとの事であつた。

聖賢廟

英京の二大寺たる聖ポールと、ウエストミンスターとは、昔より王家、偉人、英雄を葬り、又た其紀念碑を立つる所となつてゐる。これ等は即ち大英國の聖賢廟なのである。而して聖ポールは、ウエストミンスターがあまりに繁昌して來た爲、之を補充するものとなつてゐるのであり、二寺共に英國古今の歷史を、石に刻みて後代に錄する處であれば、英京に遊ぶものとして、必ずやこの二大寺に英雄偉人の跡を偲ばねばならぬのである。されば予も滯京中數次此處に詣でて、今まで書物の上で讀んでゐた歷史と文學とが、なほ深く心に印せられたのである。而して又た講壇上の大說敎よりも深き感覺を受けた。

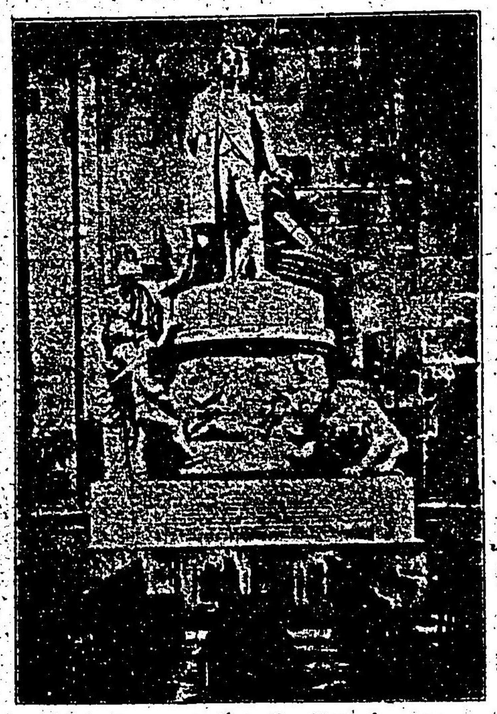
聖ポール寺院は倫敦草分の寺であり、サクソン人種が基督敎徒となつて以來、此地を相して開いたもので、草創の聖人はメリタス僧正と聞く。太古に羅馬人が嫦娥の女神ダイアナの宮を建てたる其遺跡なりとも云ふ。寺は屢ば祝融の災に罹つて、今のが四度目の建物なりとか。十七世紀の頃此寺は殆ど廢寺同樣で、製造場、酒庫にも代用せらるれば、劇場ともなり、廊下

聖ポール寺院

は平民の散歩場ともなつてゐた。チャールス第一世は其の修築に取かゝつたけれど、國王も自からクロムウエルの爲に斷頭臺の露と消ゆる戰亂の騒ぎに、又た其儘になり、クロムウエルが鐵騎の馬を繫ぐ厩とまでなつた。王政復古の後となつて、漸く改築が出來上つたのに、千六百六十六年の大火、即ち今なほ倫敦モニユメントの一隅に、其慘憺たる災禍の紀念碑を止めてゐる彼の大火の際に、一堆の灰燼に歸した。然るに後九年にして、時の大建築家クリストフア、レンが再建に着手してより、三十年を費やして、今の巍々宏壯たるルナサンス式の大殿堂を興した。建築費實に八百五十萬磅と云ひ、これは倫敦へ輸入する石炭に課稅して支辨したのである。謂はゞ石炭で出來たこの寺は、即ち世界五大寺の一て、羅馬のサン、ピエトロ大寺に型どつて、僅に小なるものである。外圍の宏大なる、內部の莊嚴なることなど、拙き筆で形容するまでも無い。但し草創の昔六世紀の頃の倫敦では、此地も寺に適し、堂內を墓とするのみならず、堂外に墓地を奠くに宜しかつたらうが、今日のやうに發達した倫敦の下町では、寺の四方八面が、熱鬧たる商業の中心で、寺前の雜踏は云ふまでも無い。海老名君は歎じて、これては聖ポールの神聖を害すると云つたが、人の中に寺を建つる基督教主義は、山の中に寺を建つる佛教主義とは、思想の上に大いに徑庭があるから、聖ポールがシチーの眞中に巍然と堂母を聳やかしてゐるのも亦た可ならずとせず。而も門外の擾々たるを去り、一たび闕を排して堂內に進めば、爰に靜寂なる別天地あり、人慾を去つて、靈覺に歸せしめ、醍醐味は其中に盈ちてゐるのである。此處ゼウイクリッフが宗教改革を唱へた處であり、又たチンダルが心血を濺いで飜譯したる新約全書を燒棄てられた所であつて、英國の宗教改革の歷史の大部分は此堂內にて演ぜられたと云つても可い。且つは古へより名僧智識の遺骸を葬る所であつたのみならず、ウエストミンスター寺が狹くなつたもので、此寺また國家の柱石たりし偉人、思想家の俊傑の遺骸を埋むるの聖賢廟となつてゐる。ウエストミンスター寺の『詩人の塋域』に對すべき『畫家の塋域』があつて、風景畫家ターナー。ペンジヤミン、ウエスト。ヒーレンス。レートン卿。

ミレーズ及びレーノルヅ等は、此寺院よりして塵に歸つたのである。又た史家ハラムの墳墓もある。而も亦たトラファルガーの英雄ネルソンも、ウオータールーの將軍ウエリントンも共に其功成り名遂げて、國家を百難より拯つた尊き此世の生命を終つたる後の遺骸を此處に横たへてゐるのである。また此寺院には、殊に國難に殉じたる軍人の墳墓が多い。英雄も書聖も共に此堂下宮内に一堆の塵に歸したのである。而して彼等の偉名を刻し、功業を勒せる碑石は殿堂の床を成して、予等は肩摩毂擊の雜遝の中を歩んで來た泥靴の下に此等を踏み付けるのである。

寺院が繁華なる區劃の中に建つてゐるから、近くに寄つては、其の宏壯たる全觀を見ることは出來ぬが、若し夫れテームス河畔ブラックフライアー橋邊より之を望めば、堂々たる寺閣が白宮と相對して屹立し、水に臨んで一大偉觀を描いてゐるのである。



海將ネルソン紀念碑

テームス河畔にそゝり立てるウエストミンスターの寺院は、英國の最大靈場である。加ふるに歴代國王の戴冠式を行ふ處である。第七世紀の昔、河畔の沼地を開いて建立せられ、後六百年にして時の國王ヘンリー三世父子が爰に大伽藍を興して今日に及んだ。この莊嚴にして神さびたるノルマン、ゴシック風の古寺に來りて、一度び其北面のツランセプトに入るや、乍ちワシントン、アービングが『この大寺の宏大陰森なるため、深く奇しさ畏敬の念に打たる。墓の畏き靜默を破らんかと寅みて、足に心し、歩を靜かにす。低き足音も堂内に呼を起し、墳墓より故人が語るやうに思はれて、一しほの靜寂を感ずるのである。吾人は其功業は歴史を飾り、其の名譽は大地を輝かせる過去の偉人の遺骨の堆積中に在るの感あり』と云へるを憶ひ出づ。いな同じ感覺がひし〳〵と胸に應へるのである。十字形の殿堂の巨柱の下、石壁の間よりは、大英國の歴史そのものが、無數の石像、銅牌となりて、其歴史と直接關係の無き吾人にも迫り、心は怪しくこれが爲に動くものを、英國人であつたなら、どのやうな感覺を促さるゝことであらう。否彼等は大英國の歴史を成したのみで無い、皆これ其生命を以て人類の史乘を書遺

したものである。人格偉業は國土人種の差別を排して、廣く人間を感化教導するものであるから、彼等偉人の名を慕ひ、德を仰ぐものは、予等如き、黄色な人間でも、此處に來れば、古への英雄と膝を交へて、無言の說敎を聞くことを得るのである。

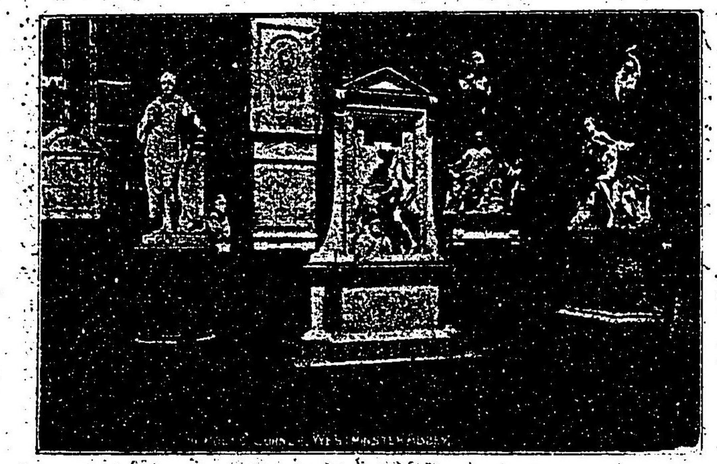
此處に立てるは大老爺グラットストンが大宰相の禮裝を着けたる石像なり、又た彼處にはビーコンスフイルド卿、パーマストン卿。ビットー。ピール等大政治家が腰掛に接して並び立ち、英國の近世政治史を代表してゐる。予は其英姿を仰いでゐる中に、脚下を見れば、圖らざりき、大老爺夫妻の墓碑の上に立つてゐるのを見て愕然として去つた。されど偉人英雄の墓を踏むの無禮を爲じと

ウエストミンスター寺

ならば、此の寺院に入ることは出來ぬ。即ち其床上の舗石は此處彼處に偉大なる名を刻してゐる。我等が立つ所、我等が座する腰掛の在る處、靴の下、多くはこれ英傑の墓なり。奴隷廢止の義人ウイルバアフオースの像を仰ぐ傍には、進化論の開祖ダーウインが見下してゐる。其前には彼れダーウインが、天文學者ハアシエルと墓碑を並べて横たへられてゐる。田舍者の一隊を案内して廻つてゐる尤もらしい男が、靴尖にて其碑石を指して、此人はチャールス、ダーウインと云つて、豪い學者であつたさうなと說明してゐた。

これに近き座席の傍には、一尺角位な舗石の一つに『嗚呼稀有なるベン、ションソン！』と銘刻したるが、注意を拂つて床を見廻らぬ者の目には見落される。これぞ沙翁同時代の勅選詩宗たりし大戯曲家を埋めたところだ。本堂の脇堂の薄暗き一隅には、ライダルの詩仙ウオルヅウオスやキングスレー。アーノルド父子及びカウパー等の石像が並んで、英詩壇の一方面を代表してゐる。予等なほ又た亞弗利加の義人リヴイングストンにも會ひ、正義の政治家コブデンにも會ひ、大科學者ニュートンにも會ひ、ラッセル卿。ランズダウン卿。印度の英雄ヘスチングス。フオックス又たは大宗敎家ウエスレー兄弟にも會つた後、更らに歩を轉ずれば、即ちアーヴイングが、此寺に訪ひ來るものゝ足を長く留めて、低回去る能はざらしむるの感ありと

稱したる『詩人の塋域』に入るのである。チョーサー以來英國の大文學を興し、思想界を拓いたものは、殆ど皆此の一隅に割據してゐる。彼等は既に死して、此處に或は其墓を留め、或は其像を置いてゐる。政治上の英國は滅ぶとも、彼等の成せる英國は滅ぶること無きのである。『詩人の塋域』はチョーサーを葬りたるに始まりて、沙翁、アヂソン及びカメル等の全身像あれば、マコレー卿。ゴールドスミス。トムソン。バーンス。サウゼー。コレリッヂ。テニソン。ミルトン。エドモンド、スペンサー。スコット。ラスキン。ペン、ジョンソン。ドライデンなどの半身像または銅牌を安置してある。彼等の紀念碑は、政治家、軍人などのに比すれば甚だしく小く、半身像は立派な方で、單に銅牌のみなるが多い。否な墓石のみありて、未だ紀念碑のあらざる詩宗さへも少く無い。されど彼等は人の思想に常に生き、其詩文は百千載の後までも、世界人類の思想感情と接觸してゐる。即ち彼等は永遠に生ける偉人であるなれば、石や金の大記念碑の遠く企及すべからざる彼等の紀念は、人心に深く銘せられてゐるのである。唯だ彼等の名を聞くのみて、吾人の念裡には懐かしく親しい心持が起り、彼等の偉大なる思想の教訓を感謝するの情を催されるのである。予の如きもウエストミンスター寺院を訪ふの主なる目的は、即ちこの『詩人の塋域』に渇仰禮拜を捧げんとするに在つた。嗚呼アーガイル卿、彼れ何



詩人の塋域

者ぞ。彼は蘇格蘭政界の一俊傑であつたにもせよ、彼は過去と共に葬り去られたのである。然るにルビリアックが彼の爲に丹精を凝らして刻み上げたる大記念碑、これは美術上の一大作であるにもせよ、それが『詩人の塋域』の一隅に傲視してゐるのは、この靈場中の至靈殿を汚すものゝ如くに感じられて、之を見るを厭ふものは、單に予のみではあるまい。誰かゞ『偉大なる者の紀念碑は小さく、平凡なる者の紀念碑は大なり』と、この『詩人の塋域』を評して云つたのは、洵に然りである。ルビリアックの墜より成つたる紀念碑は兎角此の靈場の缺點で、かのナイチンゲール夫人の爲に設けられたる、死の神の骸骨が大鎌を提げ、墓門を排して全身を現はしつつ、見上げた處には、良人の腕に凭りて氣息將に絶

せんとするナイチンゲール夫人の像を刻んだものは、悲痛悽愴の眞に迫り、鬼氣人を襲ふ。これも『詩人の塋域』の近くにありて、近世美術の名作であり、この寺院の一大裝飾ではあるかなれど、アーヴィングも既に『何すれぞ無益の恐怖を以て死を包み、吾人の愛を寄する者の墓畔をして悽慘たらしむることをせんや』と云へるが如くに、予等も之を見て、却つて不快の感を起したのである。

沙翁が像下に枕を並べて葬られたるものは、ディッケンスなり、マコレーなり、名優ガリックなり、而して近くは名優アーヴィングのまた此處に來りて、死せる偉人の群に投じたるあり。ブローニングとテニソンとの墓碑は相並んで、詩人カウレーが石像の前に横たはる。而して此の塋域にて、小さき半身像ながらも、最も異彩を放つて居るものはロングフエローである。彼は米國の詩宗なれども、同じく英文學に大貢献をなしたる偉功を以て、沙翁やテニソンの傍に坐してゐる。外國人にして此の聖賢廟に祀らるゝの光榮を荷ふものは、恐らく斯人のみであらう。

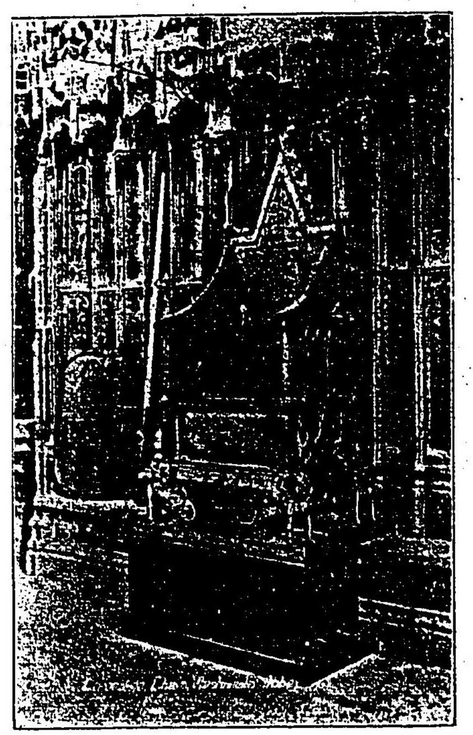
『詩人の塋域』より、中に方形の庭を圍める古さ廻廊に出る。其石壁はこれ十五世紀頃までの高僧名士の紀念碑を以て隙間無く、それが七八百年の星霜の變に逢ひ、風雨の虐するところとなりて黒ずみて物寂びたり。また歩道の礎石は悉くこれ沒字碑ならざるは無く、殆ど二千世代の足に踏まれて、刻まれたる名は磨滅して讀むべからず。これより又た屋根低く暗きアーチ形の通路を過ぐれば、八角形のチャプター、ハウスに入る。アヽこれ英國憲政の搖籃ては無いか？　十三世紀より十六世紀の頃まで、衆議院の議場として、自由と王權との激烈なる政治戰を闘はしたるアレナては無きか？

予は再びポーエッツ、コーナーに立戻りて過ぎ、鐵柵のある處にて、六片の入場料を拂つて通されたのは、即ちウエストミンスター寺院の最も古き部分て、古への帝王、王族の墳墓ある堂舍である。十一世紀の昔アングロサクソン王統の最後の王なりしエドワード信敬王の建てたる祠堂を廻らせる六祠を一つ宛に巡拜した。幾多の貴族の男女の石柳の上には、黑く煙つた大理石の寢像がある。武裝嚴めしき武士の劍を抱きて眠れるもある。唯だ異樣の觀あるは大小說家リットン卿が此の小祠の一に葬られてゐることである。扨て低き階段を登れば、即ちエドワード信敬王の祠堂である。昔は美觀を極めたるべき此堂の壁間に、石を刻んて細かなるゴチック風の裝飾も、歲月を經る久しきと共に碎けて、僅かに其破片を留めてゐる。否な歲月のみならず、情無き古物蒐集者が、亂暴にも缺き取つたからたまら無い。其美觀は消えて認むべから

ずと雖も、流石に森嚴の觀ありて、昔を偲ばしむるに足つてゐる。信敎王の廟あり、又たエドワード第三世の莊麗なる殯柳の上に王像の臥せるあり。凡そ六王六妃はこゝに葬られてゐるのである。而して其碑石、寢像の多くは、無殘なる人の手に毀たれ、落書に汚損されてゐる。この王族墳墓の古祠堂に入つて見れば、孰れの石像にも、壁間にも、隙間無きばかりに落書がしてあつて、帝王宮嬪の寢像の顏にても、何處の土百姓か分らぬ奴の名が刻み付けてあるのは亂暴狼藉と云はねばならぬ。況んや手足などの缺け去られてあるをや。英國にも落書の御構ひ無き時代があつたのだが、今日にては公德が進歩して大いに其風が廢れたのは喜ばしい。但し此の古祠堂の部分が鐵柵を以て堺せられ、別に入場料を取り、且つ寺僧が案內に附くのは、王者の墳墓の保存と共に落書橫奪を防ぐ爲であると察せられる。この信敎王祠堂には、英國歷代の國王が即位式を行ひたる玉座の古椅子がある。椅子に嵌めたる方石は、舊約の時代にジャコブが野に臥して、夢に天使の天階を上下するを見たるとき其枕としたるものなりと傳言ふるスコーン石である。この石上にて數代の蘇國王は戴冠式を行つたのであるが、後英國に移つて、エドワード第一世後、彼の戴冠式の玉座に取付けられた。現國王エドワード第七世も同じくこのスコーン石の椅子にて戴冠せられたのである。其の傍にはエドワード第三世の使用したる

木の楯と錆びたる長劍とが石壁に立てかけてある。この椅子、楯、劍にも、例の如く滅多矢鱈と落書が刻んである。

この信敎王祠を下りて、更に奧に進み、黑くなれる階段を進めば、これぞヘンリー第七世王の建てたる祠堂であつて、ウエストミンスター寺院中の最も莊嚴偉麗なるものである。堂內の天井、周圍の纖細巧緻なる彫刻は、蜘蛛の糸の巧みなるを欺き、聖敎聖人の傳說を描ける窓硝子の奇麗なるは目を眩す。蓋しゴチック建築法の極致に達したものである。周圍に高くバスの勳爵士の座を並べ、上には彼等が內外幾多の戰場に輝かしたる旌旗が古く朽ち破れて垂れ、彼等の偉勳を



國王戴冠式用古椅子

弔ふ標となつて哀れ唯だ物寂しい。

ヘンリー第七世はチユードル王統第一代の君主たり、禍亂三十年に亘りたる薔薇戰爭を戡定して、平和王の名あり。其治世に當りてや、美術工藝は進歩し、商運隆盛を致し、國家從つて殷富なりしかば、此宏壯偉麗なる祠堂の建築せらるゝに至つたのも然るべき事である。而して皇后先づ此堂に葬られ、彼も亦た其完成を告げざる中に其遺骸を横たへらるゝに至つた。チユードル及びスチユアード王統の帝王王族が多く此處に永遠の眠をなしてゐる。十王の墓、數人の皇妃王子の墳あり。紀念碑の最も壯大なるは即ちヘンリー七世及び其皇后のサルコファガス(石槨)で、其上には兩人の寢像を飾つてある。祠堂內南の脇堂には哀れなる蘇國のメリー女皇が斷頭臺上に生命を絶たれて、首體其所を異にせられる遺骸が埋められてゐる。側には文豪アヂソンの墓あり。又た之と對する北の脇堂にはメリー女皇を刑したる處女皇エリザベスの石槨あり。又たリチヤード三世の爲に倫敦タワーにて弑害せられたる幼王エドワード五世兄弟の墓がある。奥の小祠にはクロムエルを始とし、革命時代の清教徒の英傑の古墳あり、小さき石の面に彼等の名を連ねて刻んである。而して父の仇なるが故に、クロムエルの墓を發掘して、其死屍をウエストミンスター殿舍の尖塔に二三十年間雨曝にしたるチヤールス二世も、亦た女皇

メリーの槨側に眠つてゐる。クロムエルが墓の前に置かれた古さ一脚の椅子は、十七世紀以降、皇后戴冠式の時の玉座で、現皇后陛下も、これに坐して戴冠せられたのである。

ア、敵も友も、王者も臣下も唯だ雜然として其骸を横たへ、赫々たる功業も、殺伐なる爭鬪も、これは只だ歷史の上に記さるゝのみて、彼等の死すべき身は既に朽ちて、後世の人に哀弔せらるるばかり。而も泥靴に踏まれ、落書に汚さるゝに至つては、我等の心に怪しき感情を促されずにはゐられぬ。名僧テーロアが『人一度び此王者の墳墓に入らん乎、無上の說教を聞いて、いと深く心を動かさるべし。王者の中、好戰、好和、多幸、多艱なるものも、善君も惡主も共に、其死すべき身を横たへて塵に交り、人の一たび殘灰となれば、王者も凡俗も何の異なること無きを示す』と云へるは、實に此二十餘王と其皇后及び王子王女等の祠堂に入るときの感慨である。

予は此處を去りて、再び『詩人の塋域』を拜したる後、この寺を出で、そして門前に賣つてゐる繪葉書數葉を求めた。再び寺に入つて、其繪葉書に印せられたる、沙翁や、虞翁や、又たはミユートン等の像下にそれ〴〵廻つて、家鄕友人に贈るの短文を認めたのである。妻に贈りたるは、『ポーエッツ、コーナー』の繪葉書にて、其表には、

『ウエストミンスター寺院内ポーエッツ、コーナーなる沙翁。トムソン及びバーンス等の石像下にて認む。予が足下には名優ガリック。アーヴイング又た文豪ジョンソン。ディッケンス。トマス、カメル等の墓碑を蹈む。』

と走り書きした。

予の初めて此大寺を詣てたるは七月十六日の午前、悲雨蕭條たる日で、傷ましいかな、泥に塗れた靴、雨の雫の滴る傘にて、心ならずも、英雄偉人の墓を汚したのである。而して寺を出て、議事堂の側なる料理店に入つて、命じたる食物の運び出さるゝを待つ間、予は今日の寺詣により深く心に銘せられたる死と云ふ感想は、去年亡ひたる我一子を悲しむの情を強く打つた。此悲哀は抑へんとして抑ふる能はず、予が此度の外遊の最大動機となりたる次第である。されば予の眼からは不覺の涙が湧く。一杯の麥酒に感情を鈍らさんとしても、只だ悲感の増すばかり。人目を恥ぢて心を制せんとすれども能はず、はふり落つる涙を汗にまぎらせて、ハンカチーフを絞つた。

歸途エキスプレス新聞社に、友人フイリップス君を訪ねた時、ウエストミンスターが如何に多くの感想を予に與へたるかを語つたれば、同君は一週に一度は必ず此寺に詣で、默想を樂しむのであると云つた。

後日亦た二回ウエストミンスター寺に詣でた。而して特に誠意禮拜したのは、『詩人の塋域』であつた。只だ憾らくは、此寺の日曜の崇嚴なる禮拜に加はるの機の無かつたことであるが、しかし寺境そのものが、無上の說教を無言に語るもので、其敎化は百万遍の禮拜にも優る。

ウエストミンスター宮と白宮

洋々たるテームスの流に沿ひて、巍然として幾多の尖塔の聳えたるもの、殊に四面に大時計の針のいと正確に時間を示し、鐘聲鏗々時を報ずる大尖塔のあるによつて更に目立たしきものは、これぞ英國憲政の府たる議事堂であつて、一名にウエストミンスター宮と稱せられ、同名の大寺と相對峙してゐる。

予も一度は國會開會中に傍聽と參觀とを兼ねて、此議事堂に入りたい考でゐたが、傍聽となれば、大使館か議員かの紹介を受けねばならぬ。然るに漫遊客が多くて、言語の通不通に關せず、國會傍聽を英京の一見物と心得てゐて、爲に大使館を勞するものが多く、それで大使

英國議事堂

館では、餘り紹介狀を連發するのは信用に關すると云ふ事なので、予は敬意を表して差控へ、秋の開會の時を待たうと思つて、ツイそれなりに議事の傍聽をする機會を失つた。しかし正直な處、議事傍聽に往つたとて、英國政界の現狀、議案の論點など、例へば、去年夏の議會の大問題たりし養老金法案等に就いて、これまでの成行に通曉してゐるで無かつたなら、つまり議員の頭顱を、上の傍聽席から見るくらゐが關の山なのである。

予はそれで閉會中一土曜日、即ち參觀を許す土曜日の午後に議事堂へ赴き、通行門にて巡査より入場券を貰受け、案内者に連れられてはいつた。内では一志で案内書を賣つてゐる。たしか繪葉書も賣つてゐるやうに記憶してゐる。

ウエストミンスター宮は、昔エドワード信敬王以來久しく王宮の在りたる處、エドワード第三世が建立したる聖スチーヴンの祠堂は長く國會議事堂とせられてゐたが、遂に回祿の災に罹りて、僅かにウエストミンスター、ホール等を殘すのみとなつた。今日の宏大なる建築はバリーが圖案にてチユードル、コシック風の大厦高閣を興し、其費實に三百萬磅を要したりと云ふことだ。

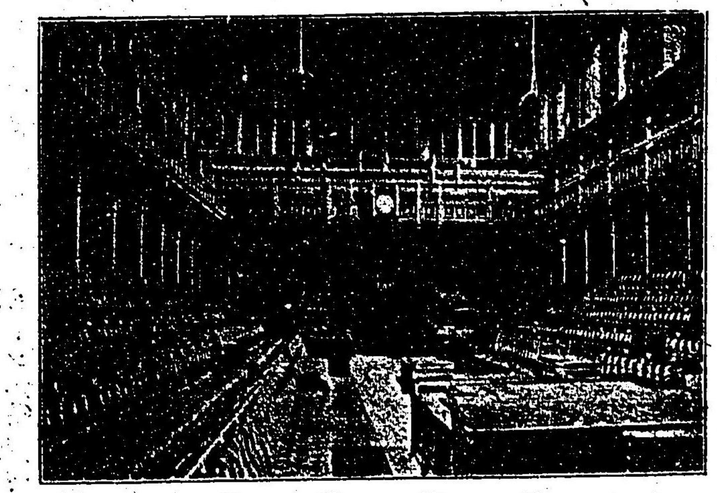
扨てヴイクトクア塔下の通用口より案内せられて、ノルマン、ポーチを過ぎつ、而して先づ目を眩する國王御化粧の間に、アーサー王物語の壁畫などを見た。又た、國王が御化粧の間より上院に渡御せらるゝ時の通路に當る、ローヤル、ガラリーの華麗なる、又た其天井の金色燦爛たる裝飾を見る。大壁畫のネルソン戰死及びウエリントン將軍がウオータールー戰勝後、普魯亞の將軍ブリーフェルと會見するの狀を畫いたものを見る。昔時八王の銅像も見る。皇族室の美觀も見る。かくて通るのが即ち上院議場である。正面の國王皇后兩陛下の玉座は嚴として尊く、左右に並べる數十脚の赤皮張の長椅子、是に貴族の議員僧正等が雜然と腰うち掛けて、國家の大政を料理するのである。結構莊重優麗なりと雖も、五百五十の議員を容るゝには甚だ狹さやうな感がある。窓硝子には歴代國王の肖像を描き、窓間にはジョン王をして大憲章に調

印せしめて、以て憲政の基を創めたる十八侯の彫像を安置してある。議場を出れば、即ち上院の控室にて、壁間にはズラリと帽子掛の釘が打つてある。又た廊下に出れば、チャールス一世葬送、巡禮祖先の米洲移住の門出などの八枚の大壁畫がある。次ぎは八角形の中央室にて、炭翁などの石像を並べたり。更に次ぎは下院の廊下で、爰にも亦た八枚の歴史的壁畫あり、これより下院の控室に入る。抑も議會の活動は議場よりも、此等の廊下控室に於て目覺しく演ぜられ、英國政治史の大部分は此處に於て書かれ、また書かれつゝあるのである。扨て下院議場を見る。其大きさは上院に似たれども、下院は下院だけに質素に出來、裝飾も派手で無い。而して大英國の議場ともあるに、何ずれぞ其の甚だしく狹小なるや。日沒すること無き英國を支配し、列國に威臨する實權の存せるこの立法院が、このやうに狹い處なりとは、觀者爲に一驚を喫せざるを得無い。左黨右黨の長椅子の席は僅に四百六十人を容るゝに足りて、而して六百七十の議員はドウして坐れやう。されば大問題討議の日となると、議員は我勝ちにと席を占め、後れて來るものは起立してをらねばならぬのだ。議員の數が增しても、坐席の數を殖さぬところも、これが歴史保存主義の英國一流ならん。議長は高き椅子を占めて、議席を睥睨する所に坐するかなれど、演說者は其下の床に置いたテーブルの上の、書籍などを並べ、又た議會の威

嚴を表する權標を置いた傍に立つて、大議論を吐くのであらう。グラッドストンが長時間に亘りて、愛蘭土自治法案の大議論を演說したるも、この處かと思へば、其姿勢も想像せられぬでは無い。バーマーストンの支那政策も、ゴブデンやブライトの平和論も、此處より轟いたのである。或は坐席のまゝに名論卓說を闘はすのでもあらう。要するに英國の議會は、往昔ウエストミンスター寺院のチャペル、ハウスに、代議士連がゴタ〳〵集つて相談會を開いた形を、今もなほ保存してゐるのである。云はゞ村中の老寄株の寄合が、其形を變へずに、依然として傳はつて來てゐるである。一人宛の椅子を備へず、議員數だけの坐席も無いところなどは、飽くまでも保守的である。しかし此の寄合式、相談會式の議場でも、これが世界に冠たる憲政を立て、光榮ある國是を定むるの府たるに足れり。形を重んぜずして實を取るのは英國風である。政界の俊傑皆此小議場より生れて、廟堂に立ち國船を指導するの舵手となるのである。

再び控室や廊下を通つて中央室に歸り、左の戸を過ぐれば即ち聖スチーヴンのホールで、これぞ往時幾世紀の間、國會を開いた跡であると云ふ。更に右の階段に下れば、此處ぞタワー古城やウエストミンスター寺と共に倫敦の最も古く、また最も歴史的なる建物であつて、幾多の政治的喜劇悲劇の舞臺たりしウエストミンスター、ホールである。これぞ即ち往古のウエスト

ミンスター宮の祝融を免れて殘存せるもので、十一世紀より十四世紀の間に建築せられたのである。其大廣間は一本の柱無くして、宏大なる桷木造の天井を支へたる下にては、大昔に國會の開かれたこともあり、又た十三世紀後六百五十年の間の法廷となり、數人の國王さへ、此處にて人民の爲に罪を定められたのである。之を改築したるリチャード二世既にこの公堂に於て廢位を宣せられた。ジョーヂ四世以前歷代國王の即位式宴會を催した所でもあつたし、又た昔エドワード三世が蘇國王及び佛國王を虜囚として、此處に饗應の宴を張つたことがあつた。床上一枚の眞鍮牌に文字を刻せるを讀めば、其處ゞチャールス一世が壓制暴虐の罪過を以て、死刑の宣告を受けたる時に起立して



下院議場

ゐたところを銘するのである。而して斯王を斬に處したるクロムエルが攝政官に擧げられたのも、此堂にてである。彼れの死後幾許ならずして、其屍はウエストミンスター寺より發掘せられて、此堂に運ばれ、あらゆる侮辱を加へられ、死屍に鞭たるゝの殘忍を嘗めたのである。而して其髑髏は三十年の久しき此堂屋の尖塔に懸けられて風雨に曝された。なほ壁間や床上にも他に同じやうな眞鍮牌ありて、此ホールに於て演ぜられたる大悲劇の跡を留めてゐる。此處よりして斷頭臺へ送られたる愛國者、佞臣、政治家、奸雄の數は算へ盡し難く、又たワーレン、ヘスチングスが印度政策の高壓手段の爲に非難せられて、七年の間、今予等の立てる床上にて審判を受けたのである。大老爺グラッドストンのウエストミンスター寺に葬らるゝに當り、其靈柩の一先づ此堂に安置されたことは、この處最近の大事件である。公堂の周圍にはスチュアート王統及び現皇統ハノヴァー家の國王の紀念像を配置してある。

聖スチーブンの窖堂は、ノルマン王統のスチーブン(第十二世紀)が初て建立したる禮拜堂なるが、久しく材木庫となつて朽壞してゐたのを、近く大修繕を加へられて昔に優る五彩燦爛の美に復したのである。

ウエストミンスター宮内で觀覽を許されてある處は、以上の部分で、上院及び下院附屬の圖

書室の如きは予のやうな普通人には入場を許されぬのである。

門を出づれば、スコットが小説タリスマンの主人公たる獅子王リチヤードの騎馬像あり、又た容貌魁偉、巨身長軀のクロムエルが、長剣を突いて曾て己れの髑髏を曝物にされた尖塔下に、二百五十年後の英國民を睥睨してゐる。議場前の小公園の四方には、バーマーストン。ビール。ビーコンスフィールド等の銅像が並び立つてゐる。其前を通つて國會街に出て更に歩めば、これも歴史上に名高き白宮通に出る。左側には諸官衙の巍立せるを眺め、而して騎馬親衛隊舎の門前左右の穹門の下に、堂々華麗の軍装をなしたる哨兵が二名、馬に跨りて立つ。其哨兵の軍服の美しさ、長き白毛を附けたる鐵兜の日に映ずるあてやかさよ。されど其乘馬が一時間の哨兵勤務に直立不動の姿勢を保つてゐるのは、一しほ感心すべきものである。この營舎に向つた海陸軍協會博物館が即ち白宮の名殘てある。ヘンリー八世の寵を失ひて、『ア、王者の寵倖を頼む人の哀れさや』と嘆じ、『我等、君に仕ふる誠實の半ばなりとも神に事へたらんには、我等を赤裸々にして敵の手に渡すことをなさじ』と悔みたる英僧ウルジーが、此驕王の爲に、ハンプトン、コート宮と共に沒收せられたところである。ウルジーが王寵を頼みて俗界に權威を振ひ、榮華の極を盡したりし日の殿堂であつたから、其昔の壯麗な有樣は想像される。ヘンリ

ー八世が花を欺くアン、ボレインの若き姿に魂を奪はれ、先后を追ひて彼女と婚したが、久しからずして寵愛衰へたるのみか、嫉妬の故に姦淫の罪をボレインに嫁して、タワーの廣庭に於て斧鉞の下に美しの首を打ち斬りたる悲劇の序幕の演ぜられたるも此宮なれば、チャールス一世も此宮の窓より引出されて、庭前の斷頭臺上に刑せられたのである。又た偉大なるクロムエルが詩聖ミルトンを書記として政務を執りたるも此宮である。彼れ豪雄の死せしも、其死屍に鞭ちたるチャールス二世の崩ぜしも、皆此白宮裡であつた。然るに其宮殿は夙に灰燼に歸して、今僅かに殘れるはチャールス王の建築したる大饗宴殿あるのみ。之に接したる博物館には、英帝國の海陸軍勝利品及び紀念品を藏してゐて、中にも目立つは、ウオータールー大戰實況の模型とトラファルガー海戰の模型とである。ネルソンが傷き『我が義務を盡したり』と絶叫して將に死なんとして凭りかゝりたるヴイクトリー艦の帆檣の一部もある。其帆柱には、水夫が緣喜取りに打ち付けた蹄鐵まで殘つてゐる。ナポレオンを乘せて鐵脚歐洲を蹂躙したる名馬マレンゴの白骨あり、又たナポレオンが聖ヘレナ島にて用ゐたる、いと粗末な椅子がある。此椅子と彼が乘用したる黄金の馬車のヴエルサイユに存置せらるゝものとを對照し見れば、彼が榮枯盛衰の變移の慘として何ぞ其の酷だしかりしよ。ウエリントン將軍やネルソン海將の遺品

もあれば、又た支那、印度及び南亞からの戰利品もある。クリミアの大戰に、一吹の號音過つて、六百七十三人の輕騎兵を死地に驅り入れたる古き喇叭もある。アシャンチの咖啡王が大禮に用ゐた大きな象は甚だ振つてゐる、珍とすべしである。此處に又た各種の武器、戰艦の模型などの保存されてゐることは云ふまでも無い。

詩仙の湖郷

附ケジックの宗教大會

毎年七月の半ば過ぎから、北英湖地の都會ケジックで、宗教家の夏期大會が開かれる。予が倫敦に着いてから間も無き十八日と云ふに、本田君がこの夏期大會に招待を受けて往く、他に二三の日本人も招かれてゐると云ふ。予は其大會が如何な種類のものか、判然と承知もせず、唯だウォルヅウォルスの故郷たる湖畔地方の名勝に遊ぶことの出來る、これが最良の機會と思つたので、本田君に同行を賴んで、彼日午前ユーストン停車場から出發した。汽車中には、此大會に出席する爲の難有家の信者連が、多勢乘込んでゐた。グリーンランド積氷の中に傳道し

てゐると云ふ、白髮の老宣教師、手の甲に入墨をしゐるので、其昔の下賤な身分が推察せらるゝ人もゐて、しきりと難有い話をしてゐた。予等と同室の向側に座した、これも大會に往く細君同伴の老人が、恐ろしく臭い煙草をパイプに詰めて吹かしてゐた。この老人は予を捉へて、日本では學校で英語を敎へるのかなど聞く。又た汽車の窓から原野の景色を見て、英國では次第に麥作耕地が減少して、牧場草地となるのだ、農夫も麥を作つてゐては引合はぬのであると云つて聞かせた。成程さう云はれて見れば、英國には耕地が少くて、草地が多い。內國では麥など作らずとも、海外の領土から何程でも其供給が仰がれるから、農業が次第に衰微し、牧畜が盛んになる。それに比較的地面の廣さを要せぬ工業で國本を立てゝゐるのだから、狹い國土で土地が餘つてゐる。倫敦の如き大都會でさへ、渺茫として廣い牧場的の公園——實際羊を放養してゐる——が幾ヶ所もある。中央部を離れた所には廣々とした荒地がある、これはモウ郊外かと思へば、倫敦市有電車が走つてゐる、そして大倫敦市の區域內なのである。或日本人が英國には不毛の磽土が多いと評して、斯國農業を以て國を立つる必要が無いから、自然土地が餘つてゐることなるに氣の付かなかつたと云ふ笑話がある。かゝる狀態であるからして、郊外の地、殊に田舍へ往けば、地面が非常に廉いのである。サレーの田舍に地坪六エーカーで、中

に十二間ばかりの煉瓦造の住宅が建つてゐる、勿論交通の便が英國の事だから頗る良い、道路も立派なのがある。それが八千圓で賣物に出たことがある。又た倫敦市内でも、南西區のキルバーン附近て根岸君の借家が、一年の家賃が三千圓てあるのに、それの持主が變つた時には四千圓て賣買された。勿論煉瓦造て、十二三間もある一軒建だ。或る資產家の知人は英國て地面持は駄目だと云つたことがある。かやうな國柄だからして、田園都市なるものも起される。日本のやうに、農業を立國の本とした土地の價の高い國ては、何程內務省などが、田園都市を羨望しても、それは到底困難な事てある。

予等の汽車はホーソーンの生籬や石壁て繞らしたる草地また少き耕地の間に、時を得顏に紅に咲けるポピーの花を眺めつゝ六時間餘の路程を馳せ往いた。詩人サウゼーが其墓を殘した此ケジックに着くと、即ちこの宗教大會に列つてゐる日本傳道會の書記ツレデニック氏、東京警視廳の英語教師をしてゐる某英國宣教師、又た猪股文學士などが、停車場へ迎へて來てゐて、予等二人を客內した一軒の家、予等は此處へ御客になつた譯なのてある。猪股君も數日前から泊つてゐた。男女の相客が數人あり、日本に傳道をしてゐた婦人宣教師も二三人泊つてゐる。後で聞くと、此處が日本傳道會の借りた家なので、同宿の外國人は、いづれも松江に傳道する

聖公會中て、一種毛色の異つたバックストン氏一派の傳道者て、中世紀的の信仰て暗きに迷へる異教の日本人を教化しやうと云ふ仲間だ。予等が着くと直ぐに御祈禱讃美が始まる、形勢が何となく不穩——予に取つては不穩になつて來た。

晩餐にも祈禱、食後十一時頃まて亦た祈禱。予たるもの驚かざるを得無い。翌日は日曜日、朝から祈禱て、食後には天幕や教會へ思ひ〳〵に說教を聞きに往く。正午からは日本の爲の祈禱會と云ふので、種々な人が集まつて來て、かの汽車中で予に日本ては英語を教へるかなどゝ聞いた老人等まても、日本の爲めだと、熱心な御祈禱をする。暗きに迷ふ日本人を拯ひ給へ、異教の日本を憐みたまへと云ふ。僕も信者の片端だが、これを聞いては少からず厭な心地になつた。しかし四五日は會の厚意に預る御客樣だから、無禮をしてはならぬ、神妙にしてゐねばならぬ。食後には猪股文學士を誘ひ出して、湖の女皇と云はるゝ、ダーエントウォーター湖上にボートを浮べて、島々の間に遊び、また僧都岩（フライアース、クラッグ）の岩頭を巡りて遇游し、其風光の絕佳なるを樂しんだ。岩の上には文豪ラスキンの紀念碑がある。平たき自然石の面に、ラスキンの半身像を浮彫にし、其下には「予が生涯中の出來事として、最も早き記憶に存するものは、我が乳母に伴はれて、ダーエントウォーター湖畔僧都岩に遊びたることなり

き』との此文豪の語を刻んである。湖水から宿に歸ると、本田君から、日曜日に舟遊びなどしては、主人側の信心家連の感情を害せぬとも限らぬから、謹んでゐた方が可かつたのにと叱られたが、この湖上の二時間によりて、ラスキンならねど、其風光に接したる快樂は深く心に印象を殘された。

僧都岩

夕刻また猪股君と共に此湖畔に峙立せるキャッスル、ヘッドの丘山の岩を攀ぢて、湖上幾多の木立深うして碧滴る島嶼に憧れ、碧波滑なる水面を慕ひ、遙かにスギドウ等の山々を望みつゝ、此湖の水景英國に冠たりと云ふの敢て誇稱にあらざるを知つた。六時頃になると寺鐘が鏗々と響く、それで予等は丘を下りて、土地の教會へ說教の聽聞に往つた。晩餐は九時過ぎ、其後がまた祈禱會で、十一時餘に亘る。本田君も毎日これでは生命が繼かぬと云ふ。予は思ひ掛けの無い難有き集會に來たものかなと嘲つ。本田君はマア社會學研究の信

てゐたまへと笑ふ。しかし毎日の行事は日曜日に限らず、此通の難有づくめで、祈禱三回、集會三回、三度の食事の度にも祈禱がある。予は如何に客人たる分を守つて神妙にしやうと思つても、これでは繼かぬ。翌日からは朝の食前の祈禱には、必ず寢そべつてゐて出ぬ。正午の異教國日本を惑みたまへの祈禱會には、いくらかの愛國心が手傳ふから出席せぬ。天幕の集會も一日に一度ぐらゐは御義理で出るが、其餘は缺席するとして、不得要領なる樣子をしてゐた。であるから初日からして、婦人宣教師の中には、予を變な奴が來たわいと思ふやうな顏付をしてゐるものがあつた。抑も此のケジックに集れる數千の信者は、殆ど皆ロー、チャーチに屬するグーデー、グーデーの難有家即ち感情的信徒なので

文豪ラスキン紀念碑

ある。而して日本傳道會なるもの、其意志は美なりと雖も、其行爲に於て頗る誤れり。これては迚も日本の傳道などが出來るものて無い。予も奇縁て此仲間の客人となつた厚意に酬ゆる爲には、此地を去るに臨んて、一言の彼等の迷妄を諭すこと無かるべからずと思つてゐた。

今日湖畔て一人の盲人が、凸字聖書を高聲に誦しながら、行人の施與を求むるに會つた。予は即ち猪股君を顧みて曰く、見よこれ日本に在る多數宣教師の模型ならずやと。

予は偶然日本傳道會のお客とはなつたが、決して漫に神の名を唱ふる感情的信者の祈禱で祈り上げられるのが目的て無かつた。勝景に富める湖郷の天然に接し、ウオルヅウオルス等詩仙の遺跡を訪ねて、これによりて冥々の薫化を感受せんと欲したのてある。それて二十日の月曜日には、朝の天幕説教會を失敬し、クインス、ホテルから出る四頭立コーチの頂邊に駕して、ウインダアミア湖畔アンブルサイドまて出かけた。このコーチの賃錢は頂邊の方が廉くて、下が高い。しかし途々の風景を樂みながらドライヴしやうと云ふのに、下へ乘る恐物は無い。同行十餘人、婦人迚も交つてゐた。大道は何處までも坦々として砥の如く、山谷湖畔に通じて觀望頗る佳。山の頂まて石壁を繞らして羊を飼つてある。只た山上に樹無うして、草と岩とのみなるには失望した。また名勝を探るには道路の險惡を冒すものと心得てゐる日本人には、この

坦々たる馬車道が却つて面白くないやうにも感ぜらる。天然に加ふるに餘り多くの人工を以てしたかのやうに思はれる。されど人をして容易に佳景に接するを得せしめ、勝地保存の行屆いてゐる事は實に敬服の外が無い。天然を愛するの情を以て他に優れりと誇つてゐる日本人が、却つて天然の破壞者てあるのとは雲泥の差てある。道路交通の便を良くして多くの旅客を名勝に誘致することは、單に經濟上から見ても有利なることだ。蘇格蘭の湖地に至りても、其交通機關、道路旅館の便の如き至れり盡せりて、これが即ち其地に多くの遊客を引くことゝなつてゐるのだ。日本人は大いに此點に鑑ねばなるまい。日光、箱根は天下の絶景てあるかなれど、馬車一つ無い、少し大雨が降うろものなら、忽ち交通遮斷ては、迚も多くの遊客の足を引くことは出來ぬ。剩さへ木を伐る、岩を碎くので、大いに風致を害し、折角天然が大斧鑿を用ゐて勝地を營んだ其深意を毀つてゐる。蓋し名勝開發は日本の一大富源を起すものてあることは、其地方々々の人士に大きに考へて貰ひたい。

かやうな風景論を獨りて考へ込む。叙者は屢ば鞭を高く揚げて、彼の山、此の岩角を指して其名前を教へる。流石詩人の國だけあつて、小さな岩にもいみじき名が付いてゐる。予は又た同車の客から、日本は風景の國だと云ふが、この湖畔のやうな處があるかなどと聞かれたり、

菓子の振舞を受けたりなどしてゐる中に、サールミアの湖畔を通る。水は碧を湛へ、木立深き小島は散在す。この湖水はマンチエスター市水道の源泉を成してゐる。ウイスバーンへ着くとコーチは一息み、馬に水を飲ませる。車をばかのウォルヅウオルスが『ウイスバーンの小やかなる祈の家』と詠じたる小會堂の墓地の石壁の側へ寄せる。乘客は其石壁の上に降りて、小墓地を通じて、小會堂へはいつて見ると、ウォルヅウオルス。サウゼー及びローンスレー等湖畔詩人の此會堂を詠じたる詩句が印刷して掲げてある。詩人等が此の小やかなる會堂に入つて祈を捧げた昔が偲ばれる。會堂の向ひは、これ亦た歌枕の一名所ナップ、ヘッド、インてふ酒店て、予はこれへ入つて一杯のエールを飲み、また會堂の繪葉書や、彼の詩句を印刷したカードを買つた。

コーチは再び出發した。暫くは又た丘陵の間、石壁の路を通じて往く中に、遙かにグラスミアの水が深樹の間から見える。同名の村を右手に見て、市外に來ると、馬車道から少し離れた處に白く塗つた家が見える。これぞヴォルヅウォルスが多年の間住居して、多くの詩を作つた『鳩の家』(ドーヴ、カッテージ)である。彼の詩集に『これはグラスミアなるタウンエンドにてものす』とあるは、即ちこの家にて成れるものである。ドクインシー亦た屢ば此家に客たり、

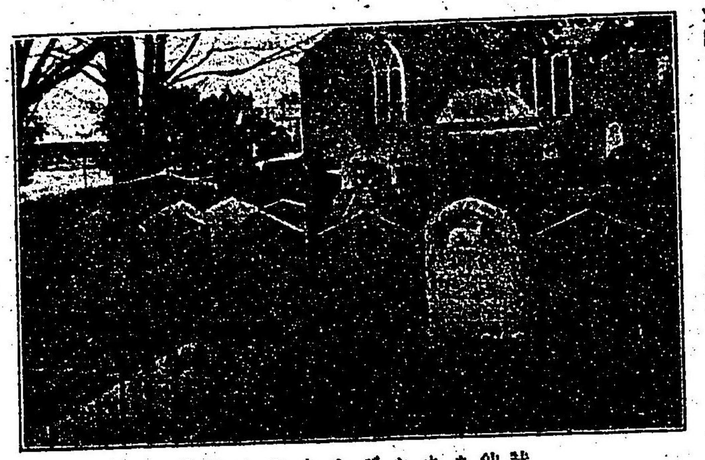
後には自から之を家としたこともある。馭者は一寸車を駐めて鞭を擧げ、乘客に詩仙の舊宅を示す。しかし客を下さうとはせぬ。予は一寸下りたいものと、既に車輪に足をかけたら、馭者が制して、時間が無いから、降りて見ることは出來ぬと云ふ。それで詩仙の遺品を多く藏する、詩界の此一名所を見せて貰へぬのは殘念であつた。嗚呼、今予等の通ずる所、これぞ此の詩仙が日毎に吟行して、錦繡の詩腸を吐いたところては無いか。このあたりの山水風物一として彼の詩に入らざるは無い。それを思ふと、いかに記憶の惡い予も、彼より敎へられた靜思冥想が、朧げにも浮ぶ。これより後彼の詩を讀むときには更に一しほの感じを惹き起さるゝことであらう。やがて馬車はホテルの前て駐まる。近き處にはグラスミアの寺があり。境內には即ちウォルヅウオルスの墓がある。これぞ六十餘年の昔まて、この湖畔に

『鳩の家』(ウオルヅウオルスの舊宅)

沈吟し、この寺にて祈念し、この墓地にも默想しつゝ、蜉蝣の人生に煩悶して、而して『不滅』の歌を詠じ、

"Thanks to the human heart by which we live,
Thanks to its tenderness, its joys, and fears,
To me the meanest flower that blows can give
Thoughts that do often lie too deep for tears."

と悟りたる詩仙が、生前彼が好んで其岸に徜徉したり清き流に沿ひて、永遠の眠に横たはつてゐるところである。小さき石碑には、彼と其妻との名を刻し、なほ側には其兄弟ジョン、愛妹メリーの墓も立てり。彼は實に其詩に云へるが如くに人の心の中に長へに生けるものである。而して彼が生前夢想だにせざりし日本人まで、今や彼の名を慕ひ、彼の德を望んで、此所に其遺跡を訪ふものが少く無いのである。彼の墓の近くに



詩仙ウオルヅウオルスの墓

其親友ハアトレー、コレリッヂの墓がある。コレリッヂは父子二代詩人の名を馳せて、ウオルヅウオルスと共に、湖地の風物に光榮を冠せしめ、子なるハアトレーはウオルヅウオルスに先だちて沒し、彼は其柩を此墓に送りてより久しからず、自から亦た其側に葬られたのである。寺の堂内にはウオルヅウオルスの名を刻せる大理石の碑がある。

又た馬車の頂から、グラスミアの湖景を眺めつゝ往けば、道の傍にハアトレー、コレリッヂの住居せしナッブ、コッテージが尙ほ立つてゐる。女秀才マルチノウ嬢の家や、アーノルド博士の家も、右手の森の間にチラリと見ゆ。馭者が例によりて鞭で指す。予の後にゐた、何でもニユー、ジーランドの蠻界とかへ宣教に往つてゐたと云ふ、無學で野鄙な男が、アーノルド博士と聞いて、マシウ、アーノルドだと合點し、其偉父トマス博士の名を知ら無いやうであつたのは可笑しかつた。やがてライダルの小湖へ來た。湖のライダル川に流れ出づる所に近く、路傍に一の岩あり、階段を刻みて、其上に登ることを得べし。これぞ『ウオルヅウオルスの坐』とて、詩仙が左に高きライダル、マウントの家より下り來りて、屢ば此岩頭に坐し、湖上を眺望しつゝ沈吟したところである。

遂にコーチはアンブルサイドの市に着いて、予等は下車した。馬車はこれより尙ほウインダ

アミア湖畔の中程にあるボーネスまで往き、歸途に予等を乘せてケジックへ引返すのである。其間二時間ほどの餘裕があつた。彼のニューヂーランドの宣教師が、予に同行して見物せかぬと云ふ。それは好からう、だが其前に午餐を食はねばならぬ。宣教師君はホテルの門前にゐた給仕に、午餐料は何程かと聞いて、それは高い、カフエーを捜して輕便に濟まさうと云ふ。しかし予はカフエー位では、此腹が承知せぬから、一人てホテルの食堂へ入る。宣教師君、それでは待合してゐるから、早く來たまへと云つて分れた。ホテルに近く、ジャパニース、カフエーと云ふ、何に感じてコンナ名を附けたのか、田舍には珍らしいが、日本人たる予には嬉しいやうな氣持のする茶店があつて、それへ宣教師君は這入つたものらしい。予はホテルで、たらふく食事をなし、故郷友人への繪葉書を認めたる後、悠然として、ウインダアミア湖畔へ歩を運んだ時には、モウ宣教師君の影は見え無かつた。

湖畔には富人紳士の別莊らしきがある。ボートも夥多繫いてある。また小蒸汽船が運つて湖上の見物をさせる。しかし予には時間が乏しかつたから、湖の北角のピーアの上から、この長蛇の横たるが如くに、蜒々として長き湖水を遙に一望しつゝ、水面を吹く微風に汗を拂ひながら、此所に近きコニストン湖畔に立てる文豪ラスキンの故宅の繪葉書に二三句を認めて、米國

費府の友人バーツホーン女史へ贈つた。然るに圖らざりき數週の後、女史よりの返書は同じ湖畔地方から、倫敦なる予の許へ届いたのである。

予は直ちに又たアンブルサイドへ引返して、市中の書店を片つぱしからウオルヅウオルスの詩集は無きかと聞いて廻つた。此度廻遊の記念として、詩仙の故郷よりして彼の詩集を得んとしたのである。然るに孰れの書店も、至つて粗末な安版だけしか持合してゐ無かつたので、買ふ氣になら無かつた。

又た以前のホテルに來て、予のライダル山下て、コーチを待合はすから、黃色服の馭者の乘つたのが來たら、日本人がサウ云つてゐたと話してくれと頼んで、數町の道をポツ〳〵歩き、ライダル山下に來た。その緩き坂を登つて、志したるウオルヅウオルスの家に來て見ると、その葛に包まれたる美しき家は、何人かの住居て、門には大文字で「公衆の觀覽を許さず」と掲示してあるのには、少からず失望した。予は其下なる清らかなる會堂の庭に入り、小さき岩に腰うち掛けて一息みしたる後、坂を下りて、此度は彼の『ウオルヅウオルスの坐』に登つて、詩仙肖像の繪葉書に、家に贈るの短文を鉛筆にて走書きした。

この岩から下りて、なほブラ〳〵してゐると、アンブルサイドの方から二婦人が、一輛の馬

ウオルヅウオルスの想冥の座

車を御して馳せ來たる。一婦人は大きな體格で、顏には白きヴエールを掛けてゐた。予は此馬車と摺れ違つた途端に白ヴエールの婦人を見て、アツト低く叫ぶ。馬車も亦た直ちに止まる。馳せ寄り見れば、此婦人こそ餘人ならず、熊本回春病院長リデール女史で、日本で久しく知合になつてゐた人であつた。意外な處で、意外な對面に久濶を叙し、互の近情を短く語りて、又の日倫敦にて再會せんことを望みつゝ別れた。

また向ふから一人來る、これは例の宣教師であつた。予に、君は何處へ往つてゐたか、自分はルチノウやマシウ、アーノルドの家も見た、これから又た向の方を歩いて見るから、コーチが來たら、馭者にサウ云つて呉れと云つて、ヅン〳〵『ヴオルヅウオルスの座』の方へ往つた。予は尙ほ又たライダル湖の水際に下りたり、ライダル河上の木橋に立つて逝く水を眺めなどして、詩仙在世

の古へを心に畫きつゝあつた中に、コーチが來たので、これに乘り、來たりし道を悠々と、夕ぐれの光、やゝに西に茜色の帷を垂れて、湖水の面にさらめくを眺め渡しつゝ、六時あまりにケジックへ歸り着いた。

時候が丁度廻遊の季節なので、此日の往復に乘合の自働車、馬車をはじめ、貸馬車、貸自働車を驅つて、この湖畔の大道を往くものが多く見受けられた。自轉車を走らす若い衆も少くなかつた。しかし自働車や自轉車では、折角の風景が雲烟過眼で、さほどの樂しみにもなるまい。それよりは予等のやうに、コーチの頂邊に高くとまつて、悠然としてゐる方が、餘程悧巧だわいと澄ましてゐた。しかし男女の遊客の鉾を曳いて徒歩するものを見ては、ア、自分も時間さへ許すなら、あの風に一つやつて見たいものだと羨んだのである。

此夜は疲れたのを口實で、無論家の祈禱會には列席し無かつた。翌日は午前中天幕の集會にて、倫敦で一二と云ふ評判の說教家キャンベル、モルガン氏の聖書講義があると云ふから、聽聞に出かけた。往く途中で一寸書店に立寄つて、一冊皮綴の小さく美しいウオルヅウオルス詩集を買つた。

扨てモルガン氏の說教は、基督使徒中の快男子ペテロの人格評であつた。モルガン氏は長幹

痩軀の頗る神經質らしい人て、說敎の中にても、屢ば神經的に手や軀を震はせてゐた。此の性格の人では、理窟の講釋は出來やうが、眞にかの小兒らしい大人格、うぶな儘の豪傑、激し易い、感じ易い、又た變り易いが、でも氣節に於て岩のやうな堅いところがある、それで基督も汝を以て敎會の礎を置くべき岩とせんとて、ペテロ(岩)の名を與へられた、此の東洋的人傑の使徒の性格に私淑することが出來るだらうかと怪しむだ。併し評判程あつて頗る雄辯、また學問も深いやうだ。善男善女は無暗と嬉しがる。氏はペテロを評してエレメンタリー、マンと云ふ、所謂うぶな人と云ふことであらう。基督に從ふに至つてから、其敎育を受くる初期の彼を評したのを、僕は天幕外の草の上に坐して聞いてゐた。至極尤もな評言だと感心した。而して聞きながら、先きに買つた詩集の前付紙に、『東京、エチ、櫻井』と羅馬字にて書くと、予の側に坐してゐた田舍の牧師らしい男が、之を見てモルガン氏の說敎の聞書を取つてゐた手帳の中へ、『東京、エチ、櫻井』と寫し取つた。妙な人だなと思つた。

今日本田君はアンプルサイドへリデール女史を訪問に出かけた。猪股君は信仰の厚い人だから、說敎祈禱の方に熱心する。予は午餐の後獨り拔出しウォルヅウォルス集を携へ、汽車に乘つて、バッセンスウエイト湖畔を過ぎて、コッカマス市へ往き、ウオルヅウォルスが幼時回顧

の詩にも現はれたる古城趾を尋ね、公園に詩仙夫妻紀念の噴水塔を見たる後、今日の目的たるウオルヅウォルス誕生の家を訪ふた。家は大通の端れにあるのだが、初め一寸見付からず、ツン〳〵歩いて、町の裏を流るゝコッカー河の岸まで出たが、其家らしきものが無い。それて荷車を取して通る男に尋ねると、詩人の家か、それは行き過ぎたのだ、此通を引返せば左側にあるカウ〳〵した建物だと敎へてくれた。それでやうやく見つかる、後から來た取者は其前て、此處だぞと指す。家は中流紳士の邸宅て、石の門柱に高き扉を鎖して、前庭にはポプラーの木が茂つてゐる。今はグラハムと云ふ醫師の住居になつてゐて、無論公開せぬばかりか、これが詩仙誕生の家なりと示す一枚のタブレットさへ掲げて無い。眞鍮板に嚴めしく刻り付けて、煉瓦塀に打付けあるものは、名も知れぬ田舍醫者の姓名だ。予が先きに繪葉書の寫眞に引合はして尋ね廻つたのに、見付け得無かつたのも道理である。家の横は小路になつて、直ぐ屋後を流るゝ河岸へ出られる。水は淺いが清くて廣い、向ふの木立や、汽車道の鐵橋などが、風景の中に入つて一寸佳い。それに詩人が八歲まて此處で育つて、今予が立てる河岸の水て、幾度かジャブ〳〵やつたことてあらうと思へば、其人が偲ばれてならぬ。予は腰を下すべき石も無いので水際に立つたまゝ、途中て買つて來た、此誕生の家の繪葉書に宛名を書いた。

町で郵便局を探して、切手を買つて葉書を投函した。郵便局の書記はいづれも女で、予は彼の詩集を出して、紀念の爲だから、この本に今日のスタンプを押して貰へまいかと頼んだが、ケヾンな顏して、郵便物で無いから出來ぬと云ふ。切手を貼付したら、消印を捺してくれるかと云へば、郵便で發送するのかと聞く。紀念の爲に消印を捺すと云ふやうなる事はこれまでした事は無いかと聞けば、ツイぞ知らぬ事だと答ふ。例の無い事でもあらうが、予は日本人で、今日態々此詩集を書いた人の故郷を尋ねて來たのであるによつて、此本に地名と日付とのある今日のスタンプを捺して貰へると、實に絶好の紀念である、若し規則に背くことで無ければ、ドウか聞き入れてくれまいかと頼んでも、書記等は田舍女の事で、融通が利かぬ。只だ變な黑い男が、妙な事を云ふわいと云ふ顏ばかりしてゐる。中で年とつたのが、どうもそれは規則に無い事だから出來ぬと云ふ。遂に仕方が無く、予も斷念し、サンキューを拂つて此處を出た。

ケジックに歸つて、晩餐の時の雜談に、今日の集會で、予がウォルヅウォルス詩集に、自分の名を書いたら、側の人が手帖に寫取つたと笑ひ話にすると、一人の婦人は眞面目に、それは其人が君の爲に祈つてくれるのであらうと云つたので、一時の座興が、お難有い話に落ちて仕舞つた。しかも話が糸を引いて來て、この二三日予が祈禱もせねば、集會にも度々は出ぬ、難

有い話もせぬので怪しんでゐた一人の婦人宣教師で、何でも九州小倉とかに傳道してゐたと云ふ人が、突然予に、君が生涯の野心は何かと、話が宗教的につまつて來た。予は平然として、『平和に生き、平和に死す』の外に野心は無い。これが予の宗教觀で、この野心を滿たす爲には、即ち生涯の苦戰奮鬪を意味するのだと答へた。婦人は呆れたと見え、天國へ往く望は無いのかなどと反問する。予は天國などは知らぬ、予の宗教觀は諸君のとは異つてゐるし、且つ東洋人の宗教思想は到底西洋人とは同一て無いとのみ答へる。婦人は外國宣教師から聖書の講義を聽いたことがあるかと愚にもつかぬことを云ひ出し、又た他力本願の難有信者になれないかなどと、肉を食ひながら云ふ。予は自家の宗教を說いて、かゝる感情的迷信的な信者共を驚かし、お客人たる禮義を失するのを避ける爲、また食事をなしつゝ、かゝる眞面目なる議論をするのは不本意だから、只だ好い加減に受流してゐた。やがて食事が濟むと、食卓に就いたまゝで御祈禱が始まつた。列席の十數人男女いづれも大聲に神の名を叫び散らす、かの婦人は、我側に坐せる紳士が悔改めますやうにとお祈禱をする、予は即ち祈り上げられたのである。中て予一人のみは、人の前に出て、雷同附和的に漫りに神の名を唱ふべからずとのモーセの戒を守り、クエカー教徒の教に倣つて、祈禱に流るゝの罪を犯さない。だから感情的な信者連は一層

變に思はざるを得無いのであつた。

翌日の朝は、ッレデニック氏に誘はれて、又た昨日の天幕へ、モルガン氏の說敎を聞きに往つた。予も最早明日は倫敦へ歸ることになつてゐるのだから、此際一つ、日本傳道會を有効ならしむるに就いて心得とすべき自說を述べて置くのは、この數日の厚意に對する感謝を表するものだと信じてゐたもので、天幕へ往く途中からしてボッ〳〵と話た。日本へ傳道しやうとならば、日本國二千有餘年の歷史を知らねばならぬ、また日本にも宗敎がある、國民特有の思想がある、それを知らねばならぬ。多くの宣敎師は、單に基督敎を以て新宗敎なり、唯一の敎なりと妄信し、日本人を目して、異敎徒なり暗きに迷ふ民なりと賤しめ、中世紀的の宗敎思想、感情的宗敎を、眞向から信仰させやう、舊思想を打破して、西洋思想を以て毀損したる、基督の眞敎ならずして、英米人の基督敎なるものを布敎せんとし、未開なるサクッン人民を敎化したやう、野蠻なる布哇土人を慴服せしめたやうにしやうとて、それは日本人が決して受入れるものて無いと說いたが、數年前までの一個の遊蕩家が、悔悛して、感情一方に、只だ難有いづくめなッレデニック氏には、尙ほ宗敎上の經驗が足らぬから解せられぬ。予は又た氏に、新渡戸氏の『武士道』を讀んだことがあるか、此書には日本に於ける基督敎の立場と將來とが論じて

あるかと云へば、ッ氏は武士道の語さへ初耳らしく、無論此書を見たことも無い。それはどう云ふ議論かと尋ねるから、予はそれはつまり、日本の基督敎は英米の基督敎てはならぬ、即ち日本の精髓たる武士道に繼ぐべき接穗とならねばならぬ。日本に道あり、著者はこの道も亦た神の與へたる道、佛敎、儒敎は勿論、野蠻人の宗敎も亦た同じく、神の時に應じ、處に應じ、人に應じて與へたる道であると論ずるのであると說明すれば、氏は大いに驚いた。基督敎は新敎なり、世界唯一の道なり、之を傳ふるに於て、日本人の歷史や昔からの思想精神を排斥せねばならぬと云ふ。予は如何なる道を信ずるとも、達する所は神の奧義なり、諺にも『路は凡て羅馬に通ず』と云ふては無きかと云へば、ッ氏は羅馬は天國て無いとの名言を以て答へ、天國に達するの道は基督敎あるのみと云ふ。かく思想が無く、迷信一方に陷つてゐるに、其妄を開くことは、予の力には及ばぬ。あまりに話が馬鹿々々しいから、予も激昂せぬてない。また例の癖が出て少し調弄ふ氣にもなつた。予は君等のは迷信だ、基督敎の眞義は予も之を以て大なる眞理、殊に其愛の敎の深く尊きより、予は斯敎を信ずるのてある、しかし死んて天堂極樂へ往きたいから、他力信神すると云ふ損益勘定の信仰は取らぬ。基督敎も迷妄に陷れば恐るべき害毒を流すもので、名が基督敎だから豪い、基督敎國だから暗きに迷は無いのては無い。露國

はドウてあるか。彼國に基督敎が無かつたら、スラヴ族は豪宕の天稟を以て、もつと進歩することが出來たらう。其宗敎の人民を恐にするの害は、ウオッカ酒の害と共に露國の二大弊てあるては無い乎。ッ氏曰く、露國の基督敎は眞の基督敎て無い。予曰く、如何にも然り、されど露國の宗敎家が、正敎を以て眞の基督敎だと信じてゐるのは、君等が感情的基督敎を以て眞敎と思ふのと同じことてあるて無いかと。ッ氏は又た予に、君の如き信仰ては安心平和が無いであらう、自分は數年前信者になつてからは、天國へ往かれる望が生じて、大いに平和てあると云ふ。予は、宗敎が若し安心平和のみを意味するものならば、我國の佛敎徒の多くを見よ、阿彌陀如來を頼み奉つて、安心平和の堅固なること、迚も生臭い基督敎徒などの及ぶところては無い。しかし宗敎とは安心平和以上に尙ほ或者を意味するのてあると云つた。

天幕へ來たから、話は途切れた。モルガン氏が今日の演題も昨日のつゞきて、ペテロ傳の批評だ。基督がいよ〳〵敵の手に渡されたる後、ペテロが三度主を識らずとピラトの兵卒に答へた條を評して、これはペテロの信仰が次第々々に墮落したためてあると云つた。して見ると、昨日同じ口からペテロを評して、うぶな人格、感情の冷熱の變化が不秩序に起る性質と云つたのとは、辻褄の合はぬ說だ。モルガン氏は西洋人だ、西洋の思想ばかり知つてゐる人だから、果

して東洋流の豪傑たるペテロが分ら無いやうだ。

歸途もツレデニック氏と同行であつた。氏は、今日のモルガン氏の演說を聞いて感心したらうと云ふから、子は御世辭も無く、いや實に心得難い說だと思つた。昨日モルガン氏はペテロをエレメンタリー、マンてうぶな人格だと評したて無いか、うぶな人間は、感情の冷熱が順序的にあるものて無い、突發的なものだ。然るにペテロが三度主を識らずと云つたのを以て、信仰の次第に冷却した結果だとは、うぶな人格だと評するのと、氷炭相容れ無い。モルガン氏にはペテロが分つてゐ無いのだと云つた。東洋から來た顏の黑い小男が、倫敦著名の大先生の說を罵倒するのだから、ツレデニック氏たるもの驚かざるを得無い、又た激してもゐた樣子てあつた。

町端れてグレタ河の橋近くまて來ると、モルガン氏の乘つた自動車が止まつてゐる。これを見るとツレデニック氏は予に、彼人と握手せぬかと聞く。いかにもしやう。てはと近寄つて予はモルガン氏に引合して握手させ、而して此日本人は先生の今日の講演を非難してゐると云ふと、モルガン氏は左樣か、神の書を讀んだら良からうと、矢張牧師らしい口調の返事をした。予は却つてモルガン氏が如何に神の書を讀んてゐるかと尋ねたかつた。

公園へ來た。矢張り二人は宗教論だ。彼は予を以て妄なりとし、予も彼を以て妄なりとするのだから、調和する所は毫も無い。予は自家宗教觀の一端を說いて、予は中世紀神學者の說いた原罪說などを取らぬ。日本人は其の美なる風土に養はれたる國民思想として、六根淸淨を信じ、心の鏡の曇らぬやうにとするが、其單純なる宗教思想である。クエカー教徒と同じく良心の光明を信ずるものである。又た聖書は悉く信ずべきもので無い。基督は神の子として產れたもので無くして、彼は三十年の試練によりて、其神性が圓滿に發達した人間である。彼は神で無く、神性の人であると云ふ。說く所一々ツレデニック氏の驚愕を値ひするのみ。氏は聖書は表紙より表紙に至るまで、一言一句神の書きたる眞理で、毫も誤謬が無きものだと、ては寧ろ聖書を燒いて灰にして呑んだ方がよかりさうな說だ。アヽ、迷信とは恐るべきもの、クリスチャン、サイエンスの開祖エデー夫人は、其經文を以て、神が太古萊文を以て書いて、二千年後のエデー夫人に授けたものだと欺き、其教徒は之を信じてゐるでは無いか。

公園を二回ほど廻つたが、議論は盡きない。予は可い加減にして切り上げやうとしても、ツレデニック氏が止めない。氏は好人物だけに、至つて眞面目になつてゐるし、予も後にはかゝる人を驚かすのが氣の毒になつた。遂には、君と予とは到底一致せぬのであるから、宗教論は

止めやう、唯だ君等が日本傳道の意志は稱すべきであるが、之を實際に行ふに於て、蛇の如く狡猾なる手段を取らねばならぬ。今日の多くの宣教師のやうに、日本を蔑視し、暗黑人民だと盲解して傳道しては、到底教育ある人に接することが出來ぬ。會ま宣教師に媚びて餌を求めんとする下賤な人間に欺されるに過ぎずして、却つて基督教を汚瀆してゐる今日までの狀態に鑑みたまへと、頂門の一針を與へたつもりで、話を結びつゝ、やうやく家に戻り着いた。

午後はダーエントウォーター湖邊に散步して、ラスキンを感化したる僧都岩の風致も今日が見納めぞと靜想を練りつゝ、兎角して時を過した。予は感情的基督教徒の此の宗教大會に於て何の得る處も無かつたが、只だ之が機會となり、又た明媚なる山水の地に在るがためで、湖畔を逍遙する間に宗教思想に耽ることを得たのである。

晩餐の時、ツレデニック氏は滿座の中にて、予が席間に唱へた宗教觀を吹聽したので、男女共に驚き、なほ予に意見も述べよかしと誘ふたが、予は初めに、食堂は神聖なる問題を說くべき場所で無いからと謝つたのに、客人等はしきりと予を攻擊するから、予はつまり相手にせぬが可いと思ふもので、口數を少くし、又た人々が場所も辨へず、食物をムシャブリながら、信仰說を唱ふるのを不快に感じたから、只だ予は東洋人の思想を以て聖書を解釋し、基督教を學

ばんとするものである。バイブルはこれ東洋の經典なり、諸君等西洋人には解し得られぬところがあると思ふ。見よ今より二十年にして、諸君は日本よりして、眞にバイブルを說き、又た却つて西洋人を導くべきの基督敎は起らん。日本は既に外國宣敎師によりて學ぶ所ある無しなどと廣言を吐いたのである。ア、沈着にしてレザーヴドなる英國人中にも、かゝる感情的妄信的なる人のあるものか、予は爰に一の學ぶところを得たのである。

其夜は例よりも祈禱會が長くて、十二時過ぎにも及んだが、予は無論列席せぬ。多分人々は予の不信を神の前に告訴したことであらう。

翌朝九時、祈禱中だから、食事もせず、主人側の人々にも別れの言葉を殘すこと無く、猪股氏に送られて停車場へ出た。二三十分も過ぎるとツレデニック氏外一人が送りに來て、一婦人からとて、菓子やサンドウイッチの辨當を齎らした。予は改めて數日間の厚意を謝し、又た昨日來異說を唱へて、大いに諸氏の感情を害したるの罪を宥されたしと云つた。ツレデニック氏が、ウード夫人等は予が昨夜の議論で怒つたのであるまいかと心配してゐると云ふから、何て左樣の事があらう、予こそ却つて大いに無禮をなしたのであるから、同宿なせし紳士淑女に赦免を乞ひたし、特にッ氏自からの宥を求むるのであるとて、握手して別れた。別れに臨んで、

ッ氏は予に與るに狀袋に入れたものを以てした。發車の後これを開いて見れば、中には二三冊『信ぜざれば死なん』などと題した宗敎書が入つてゐた。松江のバックストン氏等が書いたものだ。予は此等を讀むことを欲し無い。英國の百姓でも拾つて讀むがよからうと、直ちに客車の窓より投棄てた。

夕刻倫敦の下宿に歸ると、主婦はどうであつた、面白かつたかと聞くから、いかにも天然の風景の絶佳なるを樂んだが、御祈禱づくめには閉口したと云ふと、さうであらう、ロー、チャーチの人は實にその通りの迷信だと笑ふ。主婦はハイ、チャーチに屬する者である。客間にゐた二三人に向つても、予はケジックてかやうな說を唱へたと、少しく我觀宗敎を述べたのは、ケジックからのお土產であつた。

海水浴の名所

夏期又た冬期の數週間、我が住む都會はた村落を去り、我家を去つて、他鄕に遊び、宿屋の飯を食ふと云ふは、西洋人が年中行事の一になつてゐるのである。山水に放浪して樂しむによ

りて、健康に益あることは疑ふまでも無いが、暑氣を避け、市塵に遠ざかるが必ずしも目的で無い。夏期かクリスマスかにホリデイを取つて、他處へ遊びに往くと云ふは、これが人間の習慣になつてゐるので、此習慣を守ら無いと、先づきまりが悪いと云ふ譯なのだ。されば料理屋の女中でも家庭の下女でも、休日を貰ふ權利があつて海岸などへ出かける。英國の紳士淑女は夏は蘇國、或は瑞西へ遊び、冬は伊太利や南佛に遊ぶ。又た上部埃及まで往くものも多い。夏冬共に内地の海岸へ往くのは無論の事だ。米國からは夏を歐洲に遊ぶ客が甚だ多く、倫敦の八九月になると、市中の富人は都落ちをして、之に代つて米國人が多く來る、それて『米人の洪水』の季節てふ稱がある。

倫敦人が夏季の休暇に、海岸へ轉地するのは、避暑では無くて、日光の能く照る處、空氣の良い地を求めて往くのである。英國海峽に面した海岸には多くの海水浴場があつて、いづれも『日光の地』と云ふを看板にして、競爭で客を呼ぶ。年中日光を見ることが稀で、空が毎もドンヨリと曇り、又た霧の多い倫敦に住むことだから、自然サンニー、プレースを渇望するのである。伊太利の風光を賞するにも、第一の形容は『日光の伊太利』といふ語てある。

我國には烟霞療養の地と云ふことがあるが、英國人には烟霞は倫敦て澤山だから、日光療養

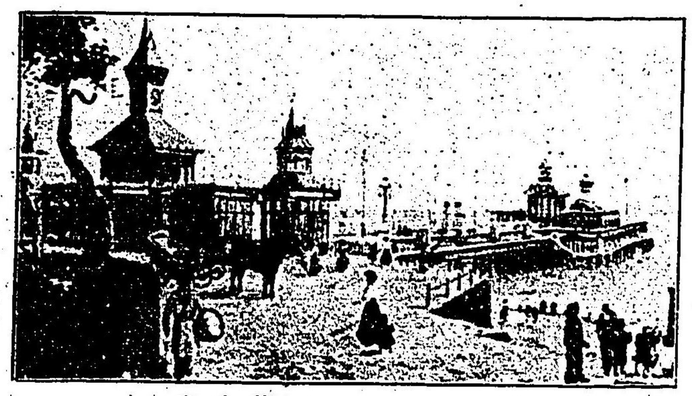
の地を慕ふのてある。而も亦た療養の爲に避暑避寒するのて無くて、習慣の爲てある。見えの爲てある。文明人は何事につけても氣が多い。種々なる方便を講じて見え坊贅澤を競ふのてある。療養の地は都會の奢侈を移すの地に外ならぬ。都人が百姓屋、漁師屋の片隅を借りて暮らし、又た宿屋の一室にて、鍋釜を借りて自炊すると云ふには野趣があつて、身體を鍛ひ、心根を一洗することも出來るが、宏大なる別墅を構へ、華美なるホテルに在りて、贅澤三昧に日夜を蚤々と過してゐるのては、却つて疎懶の性を養ひ、身心を鈍らすのてはあるまいか、予の如き平民には、まだそのやうな境遇に落ちたためしが無いから、能くは分らぬ。……扨て轉地論はモウ澤山だ。

予は英國に在る間にボーンマスとマーゲートとの二大海水浴地を、一寸覗いて見た。

ボーンマスには、予が未見の友人なりしリヂャード氏が住居して居る。氏は十數年前日本に遊んだこともある人て、倫敦日本協會員の一人てある。また地理に趣味多く、旅行が好きて、屢ば亞弗利加へ遊んだこともある。それて氏は皇立地學院會員てふ名譽の肩書を有してゐる。又たバイブル、ソサエチーの委員として働いてゐる。予が氏と相識るに至つたのは、數年前予が英學新報を主幹してゐた時、突然在倫敦の中川治平氏を通して、日英學生の通信を開始して

はドウかどの勸誘があつて、英國學生の書狀數十通を送つて來たのを動機となり、予は日本學生の側に立ち、氏並に中川君と共に、この興味ある通信を暫く繼行した。併し寫眞によつて氏の相貌は知り、又た度々書狀の往復もしたが、顏を合したことは無かつたのである。中川氏も亦た會つた事の無い友人であつた。氏は秀英舍の職工から出で英國に在ること既に十三年、今日ではレディング市に獨力活版業を經營してゐる自助奇特の人である。予とは彼の通信事業以來多年書信上の友であつたのである。予は倫敦に着くと、中川氏に其趣を通じ又たリヂャード氏に改めて面會を求むるの紹介を賴んだ。するとリヂャード氏からは、直ちにボーンマスへ遊びに來いとの、親切な案內が來たのに、丁度湖畔地方へ往く爲に妨げられて、歸來の後中川氏と約して、ボーンマスを訪ふことになつたのである。七月二十五日午後予はウォータールー停車場へ往つて、プラットフォームに立つと、一人カバンを提げた日本人の予に近寄るのが中川氏で、態々レディングから廻つて、予と同行する爲にこの停車場へ來たのである。初對面の喜びに數年未見の交誼を溫めたのである。それより同乘、三時間にしてボーンマスへ着くと、リヂャード氏が迎へに出てゐられた。これまた舊知初めて會ふの快を得たのである。

徒步にてリヂャード氏がロッドボロー、グレンヂの淸趣閑靜なる家に入つて、日本品や亞弗



四ボーンマス海水浴

利加の珍物を飾つた室にて夫人にも會ひたる後、リヂャード氏及び中川氏と予と三人にて海岸を散步した。ボーンマスの地松樹多くして風景に富み、波靜かなる英國海峽を望めば、霞の中に、テニソンが晩年を送りたるワイト島が見える。海を以て國を建つる英國の水夫の夢を繞るてふ白堊の懸崖が、碧波に臨んで白鳥の首を擧げてゐるやうな長汀曲浦の一角、霞めるが中に一基の柱高く立てるものあり、リヂャード氏之を指して、マルコニーが初めて無線電信を試驗したる電柱なりと云ふ。

波を支配するブリタニアの岸なる絕壁は、絕えず波に支配されて、洗ひ殘された土砂は崖下一帶の砂濱を成してゐる。こゝて紳士淑女が海水浴をするのである。崖の麓に小屋が建ち並んでゐるのは、富人が時期を限り、高き價を拂つて借用し、海を眺めつゝ茶など飲むところだ。小さなテントを掛けてゐる人もある。又た水際に無數の大きな箱車

があるのは、婦人連の浴客が、其中で衣裳更へをなし、又た其車を水中へ押し往きて、人目に立たぬやうに水浴をするためである。女のたしなみは海水浴場でも嚴重に行はれてゐる。我國の海水浴場となると、貴婦人令嬢が、あられもなや、男の着るなる水浴衣を召し、いと細からぬ御腰付て、海岸はおろか、大磯鎌倉の市中まで平然と歩き、外國寄席の尻振踊以上の醜態を露出し、風俗壞亂を公演するのとは、大いに趣が異つてゐる。

岸から海中へ一千呎も築き出した、廣い高い棧橋がある。其一端には音樂堂がある。この棧橋へ出るには、少額の入場料を要する。そして頗る贅澤なる遊歩場であり、遊客の紳士淑女が海風に吹かれつゝ手を携へて散歩してゐる。釣を垂れるものもある。又たワイト島などへの遊覽船も此の棧橋から出る。この棧橋一つを見てもボーンマスの、いかに贅澤なる海水浴場であるかが察せらるゝのである。ボーンマスはこの海岸一帶の地を稱する地名で東、中部、及び西の三ヶ處に分れてゐて、いづれも夏冬の間に、幾萬の都人が來遊するファッショネーブルな遊覽地療養地であるから、立派なホテルや料理屋の設備もある。海岸、懸崖の上には所々に音樂堂もある。富人の別莊多く、またリヂャード氏の如くに退隱して閑居を樂む紳士の邸宅が建並んでゐるから、商店の軒を連ねる街衢も、住宅の區域も、いかにも清らかで、萬事が裕かさう

に見受けられた。

翌日は日曜日で、午前はリヂャード氏夫婦、中川氏及び予の四人は馬車で、土地の組合教會へ赴き、牧師ジョーンス氏の說教を聽聞した。午後中川氏と予と二人で散歩に出かけたが、第一の目的は煙草を買ふにあつたが、此のボーンマスでは煙草店さへ日曜日には店を開けない。紳士の住地であるだけに、規律習慣も嚴格で、日曜日を守ることは、煙草屋まで及んでゐるのである。予等は市中では仕方が無いから、停車場の酒場まで往つたが、酒場の給仕女は、煙草はあるけれども、規定の時間が來ぬから賣つては叱られると云ふのを、強ひて賴んで、やうやく十本入りの三箱だけを、內證で讓つて貰つたのである。

これよりは市中、郊外、海岸などを散歩し、松林の間を通り、又た野原にて、ヘザーの花を摘んだ。ヘザーは蘇國や英國の荒野ヒースの夏を、紫にまた白に飾る小さ叢生花で、さまで愛らしいといふのでは無いが、殊に蘇國の花として賞せられ、詩文にも多く歌はれてゐるのである。それにヘザーは幸福の花と云はれ、就中白きものが喜ばれるので、婦人の胸に咲き、又た靴屋や其他の店頭には、このヘザーを飾つてゐるのである。予もその事からボーンマス一見の紀念として摘み取つたのであつて、今なほリヂャード氏から貰つた一冊の書籍の中に挾んであ

る。氏はまた予に贈るに、亞弗利加の義人リヴイングストンの心臓を葬りたる、亞弗利加ニアスランドなるチタンボの蠻村に近き大樹の下に生じてゐた草の一莖を以てせられた。

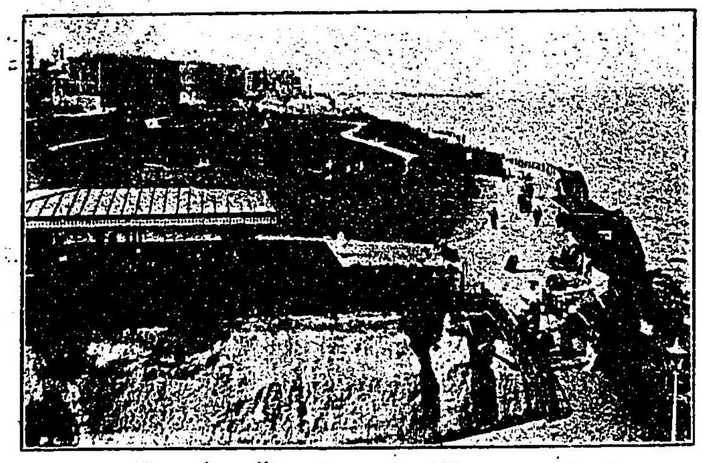
リヂャード氏が歡待の家に泊ること二夜、二十七日には小村大使の歸朝出發を見送らねばならぬので、名殘多き此の知友の家と、風光明媚なるボーンマスの海岸とを離れねばならなかつた。其翌朝七時予は遂に中川氏と共にロッドボロー、グレンヂを後にして此地を去つた。予一人は倫敦ヴオクゾール停車場より下車し、馬車を驅りてヴイクトリア停車場へ馳せ付け、今將に出發せられんとする小村伯に告別の辭を述ぶることを得た。

後九月六日になつて、予は上谷君と相携へて、マーゲートに轉地中なる根岸氏の一家を訪ふた。倫敦橋停車場で、半日間の往復切符三志六片と云ふ減法に廉い切符を買つて乘つた。尋常に往復すれば、其數倍の賃錢を拂はねばならぬのであり、普通廉いといふので八志六片ぐらゐは取られるのを、予等は只だの三志六片であつた。尤も半日往復と云ふ廉もあるが、倫敦では廻遊の季節になると、折々時間を限りて、馬鹿に安い切符を賣る、予等は甘くそれに打つかつたのであつた。

此日は日曜日であつた。例によつて倫敦市中は眠れるが如く、死せるが如く、實に寂々寥々

の感があるのであつた。予等は停車場で一寸酒店へ入らうとした。すると其入口に一人の男が立つてゐるかなれども、マーゲートまた一個の贅澤な云ふ。それでやうやく通されて一杯のエールを傾けてゐる海水浴地である。海岸の長き防波堤を石とセメントの中に、モウ十一時である、教會の時間であるて、戸を鎖すから早く出ろと追ひ出された。

マーゲートへ着いて、根岸氏を訪ねる。共に電車で海岸の見物に出かけた。英國海岸に付きもゝの懸崖の上の大道を散歩する男女、スクエアにて音樂を聞きながら、椅子により日傘を差しつゝ讀書に耽ける美人醜女、いかにも夥しい數であつた。棧橋の遊歩場もある、宏大なるホテルもある。凡ての設備は稍ボーンマスに劣つてゐる海水浴地である。海岸の長き防波堤を石とセメントにて固め上げ、之に並んで、浴客の爲に設けたる多く



マーゲート海水浴

の貸間あり。これを見ても、ホリデイとは、英國人によりて如何に重き年中行事の一なるかを察せらるゝのである。

マーゲートよりは近い、英國第一の古刹カンダーベリーに遊ぶものが多い。予等は時の無いために、遂に之を一覽するの機會を失つた。

カーライルの家

昔はテームス河に沿ひたる一村落、今は倫敦市の一區劃を成せるチエルシーは、東京にて例を取らば、先づ根岸か。十六世紀の政治家として、傲慢なるヘンリー八世すら時々駕を枉げて訪れたるサア、トマス、モーア、後には宗教問題より、專横なる國王に抗して刎首されたる彼が其名著『ユートピア』の理想鄕を描いた以來、又た彼が大宗教家エラスマスと膝を交へて、學問復興の氣運を招致した處であつた以來、文藝の名流の、此のチエルシーを卜して家を營みたるもの少からず。中にも指を屈すべき人々には、哲學者ロックあり、科學者にニユートン、史家にスモーレット等あり。大英博物館の創立者スローンあり、政治家にはワルポールあり、又

た畫人には、風景畫家ターナーあり、肖像畫家ホイスラーあり。將軍にはゴルドンあり、而して文學には、アヂソン。スチール。レイ、ハント。カーライル。ロセッチ夫妻及びジョーヂ、エリオット等があつた。ターナーが臨終の下宿、エリオットの家、ホイスラーの畫室など今な

カーライル肖像